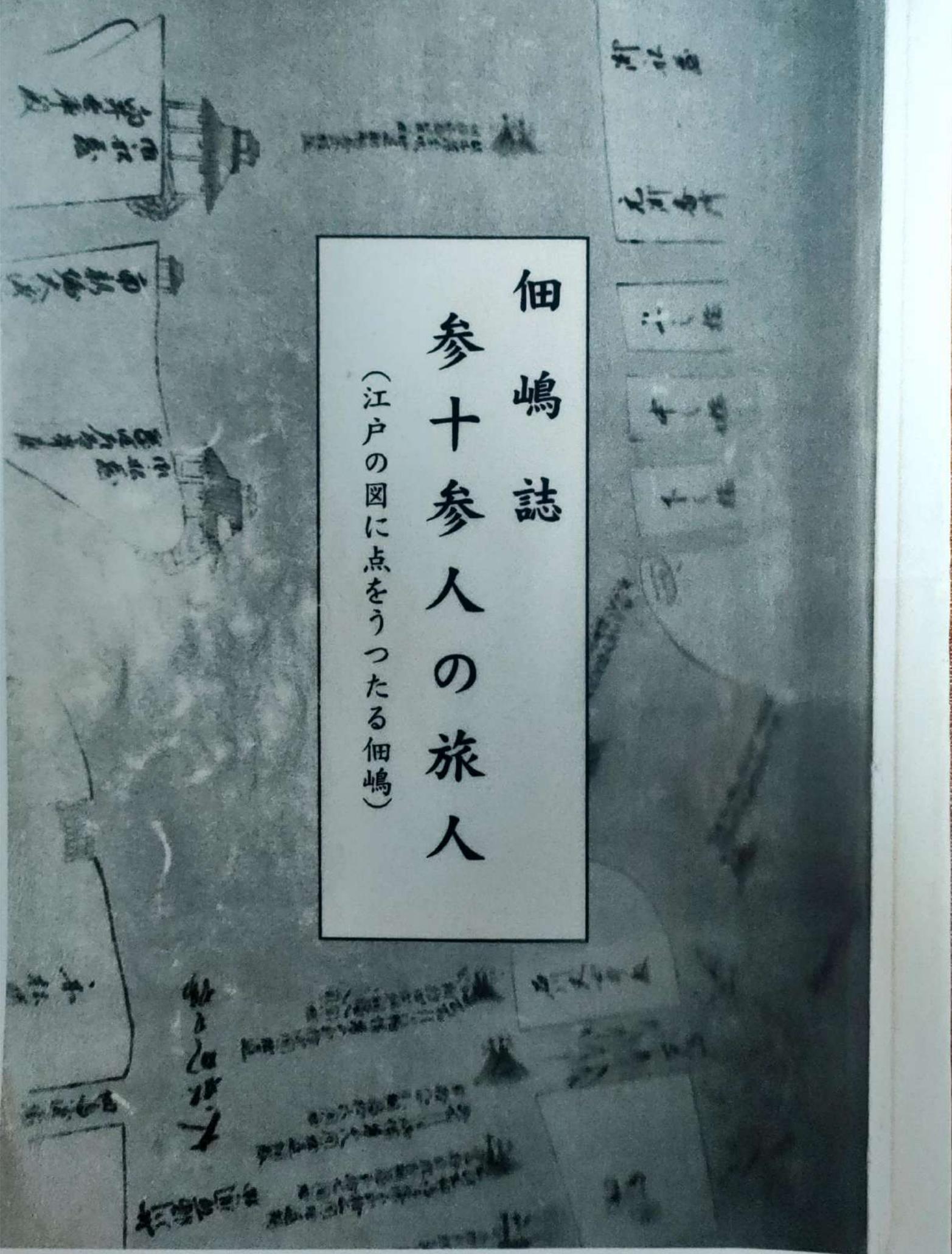


佃嶋誌

参十参人の旅人

(江戸の図に点をうつたる佃嶋)



佃嶋誌 参十参人の旅人

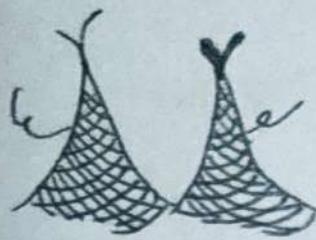
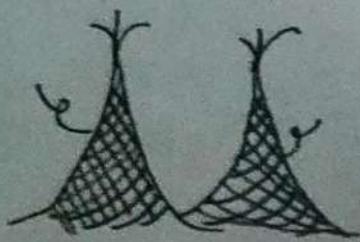
編著者・発行者 金子正夫

〒一〇四一〇〇五二

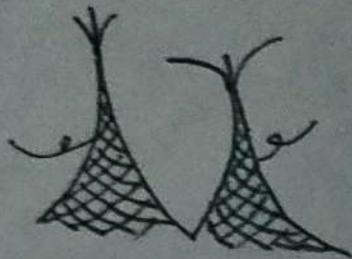
東京都中央区月島二一六一一〇

TEL 〇三(三五三一)三八五五

発行 平成二十五年四月二十六日



佃



参

嶋

十

参

誌

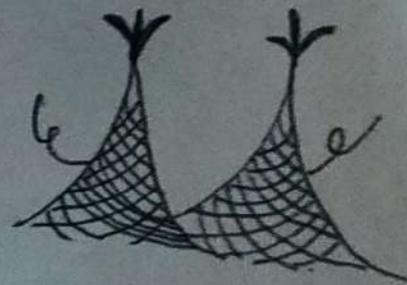
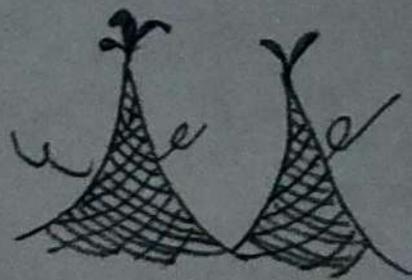
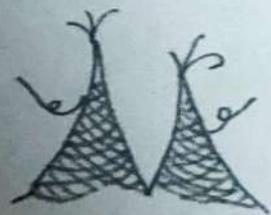
人

の

旅

人

(江戸の図に点をうつたる佃嶋)



目次

まえがき

一 佃島の起源

(一) 徳川家と攝津佃村漁民	1
(二) 摂津佃村漁民の江戸小石川・浜町移住	1
(三) 三十三人の旅人	3
(四) 家康公より拝領・「お墨付き」	4
(五) 提灯(佃嶋)	5
(六) 森孫右衛門の略年図	5
(七) 森一族七名	6
(八) 江戸佃島森家の墓	7
(九) 森孫右衛門(見市家)・東京本家	8
(十) 見市はる	10
(十一) 十組問屋組合	10

二 沽券絵図に見る佃島

(一) 沽券図(四〇〇年のねむり) 沽券図(写真)	11
(二) 沽券絵図の説明	12
(三) 佃嶋(沽券)地割・第一表宝永七年(1710)	13 ~ 14
(四) 佃嶋(沽券)地割・第二表(1744)	15 ~ 16
(五) 佃嶋(沽券絵図)宝永七年(1710)地主	17
(六) 佃嶋(沽券絵図)宝永七年(1710)家守	18
(七) 佃嶋(沽券絵図)延享元年(1744)地主	19
(八) 佃嶋(沽券絵図)延享元年(1744)家守	20
(九) 宝永七年・延享元年対称表	21
(十) 明治六年沽券絵図・地主	22
(十一) 明治十七年沽券絵図・地主	23

三 佃島マップ

四 佃島の道場と築地本願寺の現在・過去

佃島の道場と築地本願寺の現在・過去	25
佃島マップ	24

九 佃島漁民と生活

(八) 金子政吉氏の葬儀・和田掘り配置	37
(九) 佃島に始めて「道場」が建つ	38
(十) 佃島説教所の前進	38
佃島漁民と生活	39
(一) 白魚漁	39
(二) 佃島魚師と白魚漁	40
(三) 佃島漁業協同組合解散之記(杉並区和田掘)	41
(四) 佃島漁業協同組合解散之記(杉並区和田掘) (清書)	42
(五) 島民の屋号	43
(六) 入船稻荷神社(住吉神社内)	44
(七) 初期の佃島漁業組合	45
(八) 船魂神社・鳥居(住吉神社内)	46
昭和十六年 佃島漁業協同組合 有志	
(九) 森 稻荷神社(下町)裏河岸 浪除・於咲稻荷神社(東町)	47
(十) 佃の昔 (一) 佃観音	48

	(十一)	佃漁業組合(昭和六十二年)	49
	(十二)	佃島土地の変革(明治六年・四十五年)	50
	(十三)	唐獅子(神社内)	51
十		日本橋魚市場との関り(問屋・鑑札・半纏)	50
	(一)	魚市場	53
	(二)	佃島名主	55
十一		明治十三年東京商人録に見える。問屋・仲買人	56
十二		島民から様を付け呼ばれた者『庄五郎』・櫻木	57
十三		市場関係者のスタイル	57
十四		問屋営業権査定額・板船売場証	58
十五		日本橋市場(正保時代)	59
十六		屋号(佃の冠)・の付いた店舗(暖簾分け)	60
十七		日本橋魚市場が壊滅	61
十八		日本橋魚河岸問屋及び仲買の配置図	62
十九		現在における築地市場の概要図	73
二十		日本橋魚河岸発祥の地記念碑建立によせて	77

二十一	震災後魚市場(芝浦)・築地市場開始	81
二十二	佃島出身者の市場関係者(住居)	82~84
二十三・二十四	芝浦の役員・開場式(築地)	85~87
二十五	魚市場の配置図(単一魚問屋会社が創立)	88
二十六	市場の建物が半円を描くわけ	89
二十七	築地・明石町と外国人居留置・(通称・時計台)	90
二十八	戦禍を逃れた佃島	90~91
二十九	庄五郎こと櫻木藤吉	92~94
三十・三十一	櫻木家・明治初期の建築物・見取り図	95~96
三十二	庄五郎の覚書	97~99
三十三	明治二年佃島戸籍簿より	100
三十四	櫻木庄五郎文書	101~102
三十五	日本橋魚市場組合鑑札・認可書	103
三十六	佃島・佃(過去・現在)	104~105

	問屋・仲卸業者を束ねた	106
	佃島に井戸	106
	新酒屋	106
	銀座と佃島・井戸	107・8
	佃島が一番、重要地の所有者	108
	所有者の年表	109
	佃島渡船場跡・記念碑	110
	佃の記録・例大祭	110
	佃の旧家	110
	佃島のまつえについて	110
	佃島のよもやま話	111
三十七	(一) (故吉田喜代太郎) 談話	111
	(二) 大正時代の休日	112
	(三) 佃島の地図	112
	(四) 父は立教大学教授・息子は総長	112
	(五) 佃のご隠居	112
	(六) 神戸精一	112

	(七) 丸敏号	1	1	2
	(八) 佃の文筆家	1	1	3
	(九) お魚かるた(考案者)	1	1	3
三十八	佃島こませ屋	1	1	4
三十九	京橋区佃島こませ同業者	1	1	5
四十	こませや	1	1	6
	(福) 田中 こませ	1	1	7
	(福) 半纏・佃橋の影	1	1	8
四十一	佃の町並み	1	1	9
		1	2	7
四十二	佃の名物・広場(メインストリート)	1	2	8
四十三	佃島小学校創立の功労者	1	2	9
	思い出	1	2	9
四十四	(一) 佃島小学校第一回卒業 名簿	1	3	0
		1	3	3
	(二) (透かし入りの修業證)	1	3	3
四十五	佃島の強制疎開	1	3	4
	強制疎開 以前の島民 (東町)	1	3	5
		1	4	0

(あとがき)

六十一	御協力者	161	(162
六十二	渡船場跡地に佃のシンボル(千貫御輿倉)	123	180
付録	昭和三十八年(築地市場の仲卸業者店舗)配地図	128	128
五十六	古龍舞臺の隆盛	121	
五十五	遊藝風景	121	
五十四	仲買師更の野音	120	
五十三	六丁ま(おぼろ)台座	118	119
五十二	助野文号	117	
五十一	田八号	117	
五十	平知の御外(調子)の御外(調子)	116	
四十六	舞群	114	
四十八	萬葉財金・徳文金会員	114	
四十九	土州の楽座(臨時)の御外(調子)	113	113
四十六	佃の舞臺(おぼろ)の御外(調子)	111	

(十四)
(十五)

まえがき

江戸の川柳に『江戸の図に点をうつたる佃島』と詠われている。

こんな『佃島』についての本を書き後世に残したい。この事を一途に何年も調査・研究を重ねて聞き書きを実施してきた。

平成二十四年は、徳川家から江戸に呼ばれ、撰津佃村を出発して四百年、築島後から数えると三百六十八年にあたる。

現在も大勢の子孫の方々は健在である。佃島の近くに生まれ育ち地域の築地市場仲卸業者の先輩・同期・後輩達が「佃」の文字の付いた屋号等を残したいとの意気込みは、長く市場行政の業務に関ってきた私の意気込みにもなった。

大阪・撰津佃村から森孫右衛門を始め漁民一同、総勢『佃島三十三人の旅人』は、江戸に呼ばれ、小石川・浜町等の大名屋敷に分散移住した。後に鉄砲洲沖の干潟の百間四方を徳川家に与えられ

築島して『佃島』と命名した。森孫右衛の親戚にあたる宇右衛門は後に『佃姓』を名乗る。

『江戸に三代住むと江戸っ子と呼ばれる』とは言え、佃人の祖先は関西人で江戸っ子にとって『よそ者』である。漁民一同には掟もあって人間関係は複雑だったろう。

築島に始まる佃島の漁師の努力は、漁業から魚市場の間屋・仲買人、町を歩いて販売する棒手振り、漁業で使用する『えさ』を浜に販売する『コマセ屋』等と業種を拡大して日本橋魚市場から築地市場へとつながる。

特に、現在は、多く市場関係の仕事に就いた佃人が少なくなっているためか『佃島』の歴史・様子・人々の生活等と様々なことが、平成の時代の子供達に親から伝わっていない。例えば、生活基盤となつている佃のメインストリートの広さの謂われ、人さえ道れば良い路地、そこに住み続けてきた方々の楽しみや苦勞、佃人から有名人が輩

一 佃島の起源

(一) 徳川家と攝津佃村漁民

江戸幕府の御菜御用を勤め、徳川直参の漁夫として、江戸湾でえらく、幅をきかした、佃漁民の祖先は、摂津国西成郡佃村、大和田村の漁民が江戸に移住したものである。

天正十年六月四日(平成二十四年より四百三十年前) 徳川家康浜松在城のころ、京都に上り摂津多田の御廊と住吉神社へ参詣に立ち寄ったことがあるが、そのとき所の神崎川出水のため渡船も留つたので、土地の佃村の庄屋、孫右衛門は数隻を出して家康を渡した。

家康喜び参詣の帰途、孫右衛門方に立り庭前松の木三本あるのを見て、以後森と名乗るようとの上意をうて、これより森孫右衛門と改めたいということである。

天正十八年七月小田原落城して八州は家康の領地となり、八月江戸入城(平成二十四年より四

百三十年前)このとき、命に、よつて孫右衛門・弟忠兵衛・九左衛門は江戸近海調査のため、江戸に下つたといふことである。

これより、家康天下の覇者となるまで、秀吉死後、あるいは、伏見城にまた大阪城に關ヶ原の合戦等に、その時々御肴御膳御用を勤めた。

(二) 摂津佃村漁民と江戸浜町移住

その後、慶長十七年(平成二十四年より四百年前)家康、江戸入城後二十二年後七月、

二代將軍「秀忠」の世になつて、孫右衛門はじめ総勢三十三名が江戸に移住した。

漁民一同は浜町安藤対馬守屋敷(及び石川八左衛門屋敷へも分けられたといふ)内に居住することを許された。

慶長年中將軍淺草川に遊りようしたとき、

佃村漁民に網を曳かせたのが御成先御りようの始めであつて以後御成先御りようは、佃村

漁民の専ら勤めむるところとなつた。

かくして、中川・利根川を御膳御用川に拝領し専ら幕府の御膳御用を勤め、殊に家康の命によつて、佃島漁民が遠く、名古屋浦から移植した、白魚は専ら佃島漁民の司とつたもので、この白魚りようのため中川際に三百八十間余の場所を漁夫の小屋の地として、定められ、毎年冬春のうちはそのこへ小屋をたて日々白魚を献上したものである。

かようにして、江戸の漁師の間に伍して専ら幕府の御用を勤め、慶長十八年八月十日(平成二十四年から数えて三百九十九年前)海川漁りよう勝手たるべしという、御証文をえて、江戸近海では、御法度場所であつて浅草川、稲毛川を除いていかなる場所でも、あみかけ勝手たるべし、ということになつたのであるが、これは、漁民として大きな権利で家康以来つくした功によつたものである。

翌、慶長十九年大阪冬の陣、元和元年夏の陣には、佃島漁民大いに、努力し軍事の蜜使あるいは、陣中の御膳御用等大いに勤めたことが、佃島由諸書にのつている。

すなわち、「大阪両度御陣の節中国・四国両国筋の様子を探り御用船をりよう船に仕立て、御加勢申上茶臼山御本陣へ御肴御用仕日々御中進申上候、御陣場御肴御不自由に付御膳御肴差上候落城の節々橋々焼落往来不自由に付き、りよう船にて通行致候」とある。

寛永十九年中になつて、町人は一切武家屋敷内移住することが許されなくなつたため、永らく、浜町安藤対馬守屋敷にいて魚業をやつていた漁民はどこか他に居住すること、やむなし。

そこで、鉄砲洲の東の千潟が漁業上至便の地であつたから、この地百件四方(小澤長吉氏所蔵の佃島古事記には、九十間に九十五間

とある)を拝領し漁夫等自ら日夜築島に努力し、正保元申年二月ついに築島を完成し、ここに漁家を建て並べ漁夫一同引き移ったのである。そこで、本国佃村の名によつて佃嶋と号した。

その後は孫右衛門の弟忠兵衛が佃島

の名主を勤孫右衛門は本国佃村に帰り年々出府した。

これから六代目まで佃忠兵衛と称し七代目以後は本国森家から入家して、相続し森姓改め代々森幸右衛門と称した。江戸の名主の中でも佃島の名主は最も權威重く常に上席に坐したといふことである。

その後になつて、御成先御用繁多となつたため享保四年十月二十四日(平成二十四年より二百九十三年前)大岡越前守の掛で深川八幡宮前に武家方より屋敷

八百四十四坪を拝借してこれに町家を建て「佃町」といつた。

この深川の地は一説に安藤右京進屋跡であつたといふ、この地が後に「あひる」といつて深川岡場所の一つになつたのであるが、この「あひる」といつ言葉については、いろいろの説があるが、佃島漁師のほした「網干る」からでたといふ説が、事実のようである、その後、享保七年には深川にさらに三百八十四坪を助成地として、拝借したことが、みえているが、これは、そのご寛延二年九月に返上してある。江戸に下つた三十三名の漁夫が日々えた魚類は第一に幕府の膳所に奉つたが、その余りのえ物は水の便利のよい人の集まる、日本橋の傍で売りさばいた。後に孫右衛門の弟森九左衛門發意して

ここに魚市場を開くことを幕府に願ひ、始めて魚市場が開かれたのである。九左衛門は本国の名により佃屋と号し、また孫右衛門支配地の内佃村のつづき大和田村から出たものは、大和田屋と称した。

(小沢貞夫氏所蔵、金子為雄氏所蔵、昭和発西元旦発行「砂払」初号による)

(三) 三十三人の旅人

慶長十七年大阪・摂津佃村を旅たった

(一) 三十三人の名前

神主 平岡日向守

忠蔵

宇右衛門 吉右衛門 平左衛門 太右衛門

善吉郎 長兵衛 太左衛門 五兵衛

伊右衛門 半四郎 太兵衛 仁左衛門

五左衛門 庄左衛門 五郎兵衛 忠右衛門

久兵衛 長四郎 勘十郎 善九郎

喜兵衛 孫左衛門 市兵衛 仁兵衛

伝兵衛 長兵衛 喜左衛門 甚左衛門

六左衛門 清兵衛 孫兵衛 太郎左衛門

(四) 家康公より拝領の「お墨付き」

「塩水三合差す処予

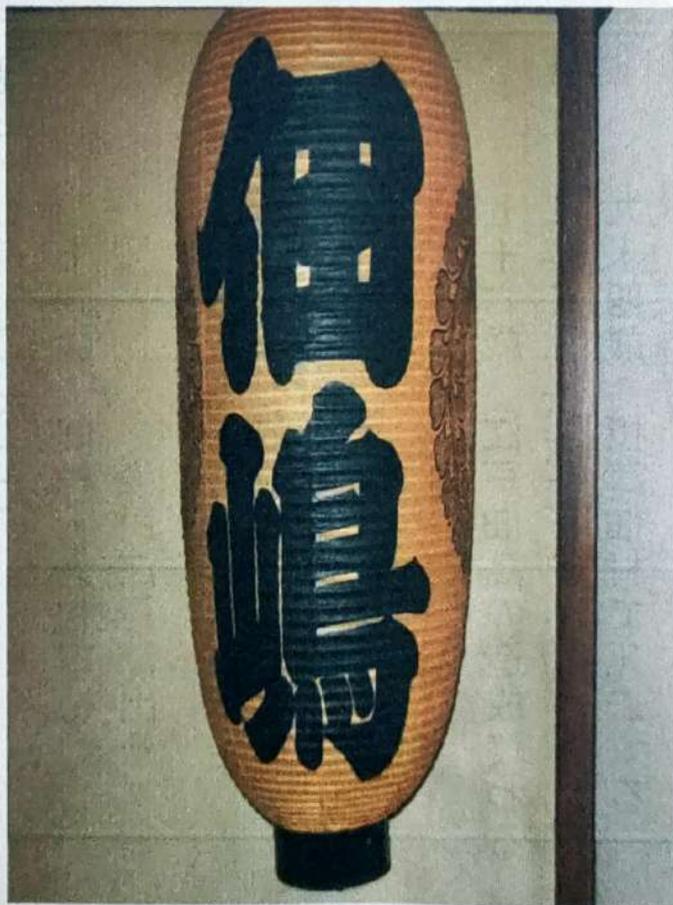
の勝手元の漁事たべし」

この、お墨付により 江戸湾内各浜浦に
漁を営んだ。

森孫衛門の弟にあたる、佃屋九左衛門宅に
「お墨付き」があった。

提灯

(佃島説教所所蔵)



しまは横に山ありが正式

(五) 森孫右衛門

(二) 森孫右衛門の年譜

永祿十二年 (一五六九)

一歳 摂津 佃村に生まれる

天正 十年 (一五八二)

十四歳 家康の幾内巡遊

天正十八年 (一五九〇)

二十二歳 一族初めて江戸に出る

慶長 五年 (一六〇〇)

三十二歳 関ヶ原の戦い

慶長 六年 (一六〇一)

三十三歳 一族江戸へ住み

慶長十二年 (一六〇七)

三十九歳 日本橋に着市場を開く

慶長十七年 (一六一二)

四十四歳 佃村・大和田村

漁民江戸に出る

慶長十九年 (一六一四)

四十六歳 大阪冬の陣

元和 元年 (一六一五)

四十七歳 大阪夏の陣

正保 元年 (一六四四)

七十六歳 江戸佃島の造成終わる

寛文 二年 (一六六二)

九十四歳 摂津佃村で死去する

(佃島新築の顛末)

終

(七) 「森一族の七人」

元の名前 肴市場の名乗り寛永十八年 その後職

森九左衛門 佃九左衛門 肴問屋

森与市右衛門 佃屋九郎兵衛 佃九郎兵衛 屋敷方肴納め

森作治兵衛 佃作治兵衛

井上与市右衛門 大和田与市右衛門

大和田与市右衛門 肴問屋

井上作兵衛 伏見屋作兵衛同上 屋敷方肴納め

矢田三十郎 野田屋三十郎 同上 屋敷方肴納め

佃屋忠左衛門 佃忠左衛門 肴問屋

(二) 和田掘・・・江戸佃島名主森家墓地

杉並区 和田掘 西本願寺

初代篤行院釋久西居士	佃忠兵衛則之	寬文二年四月四日	十一代	不詳	森幸右衛門 勝文
二代兼忍則道信士	佃忠兵衛則達	貞享三年六月九日	十二代	不詳	森幸右衛門 榮次郎
三代兼興重久禪定門	佃忠兵衛達久	寬保三年六月十三日	十三代	釋教證信士	森幸右衛門 重明
四代智香院釋了貞信士	佃忠兵衛資之	明和八年六月四日	十四代	順乘院釋謹嚴	大正六年八月十九日八十歲
五代惠徳院釋超證居士	佃忠兵衛資將	明和二年九月廿四日	十五代	森	昭和二年八月廿四日七十五歲
		五十二歲			滿(改メ謹一郎)

江戸佃島名主森家代々之墓

六代圓證貞利信士	佃忠兵衛貞利	天明三年十月廿四日	五十四歲
七代寛行院釋祐玄居士	森幸右衛門光真享和三年八月十六日	六十六歲	
八代善得院釋輝元居士	森清右衛門愛久	天保七年十二月十一日	七十五歲
九代達道院釋壁海居士	森清右衛門友之	天保十年十一月廿五日	四十三歲
十代盡心院釋勝道居士	森清右衛門勝鎮	文久三年三月五日	四十四歲

平成五年一月吉日 十五代 森 滿

江戸佃島名主森家墓地(清書)

十條問屋聯合

(九) 森 孫右衛門(見市家)

当初の旅人三十三名の足跡を追って見ると、現在、佃一丁目に跡を追在、されておられる方の中には、森孫衛門(見市家)のまつえ(東京本家)が今だ存在、なを、古い書物の中にも見える、東京の分家も、現在『東京築地市場』の仲卸業者として継承されている(音幸号)

(十) 見市はる(国三氏夫人)

森か見市か芥川と呼ばれた三旧家 森(見市) 孫右衛門第十八代の子孫、はるの父親、鎌吉は漁師から岡作(魚屋)に転じ日本橋の仕出し屋「住吉」を経営し、当時の政・財の各界からの支援を受けた。

(十一) 十組問屋組合

(前畧) 此ノ江戸大阪間ノ廻送ト之ニ積載

シタ江戸及関東地方ノ注文シタ品々ハ、江戸ノ諸問屋屋が検収スルノデアツタが、問屋ノ中ニハ海運ノコトニ明ルイ者が少ク、又組合を結ンデナカッタ。従ツテ貨物ノ廻送が個々別々デアツタ為、何時シカ実権ハ廻船問屋ノモノトナッタ。是レヨリシテ荷主ト廻船問屋トノ間ニ種々ノ紛糾が生ジ特ニ難破ノ際ニソレが余計ナ費用ヲ費スコトが多ク、船頭ヤ水夫ハ、廻送ノ途中、或ハ荷物ヲセツ取シタリ、或ハ故意ニ浸水セシメテ荷物ヲ詐取スルモノヲ少クナカッタ。又廻船問屋ハ、自己ガ支配スル廻船が難破シタ際ハ残存荷物ヲ入札シテ其代金ハ積込荷物ニ応ジテ荷主ニ返スベキナノニ、割当ノ書類ノミヲ送ツテソノ代金ヲ送ラナカッタ場合モ多ク、ソノ横暴ニフンガヒシテ、元禄六年日本橋通町仲間川上(大阪屋)伊兵エガ大阪ヨリノ

商品ヲ取扱ヲ江戸ノ荷主達ノ糾合ヲ發起

スルニ至リ翌七年ニ八十組組合菱垣廻船積仲間組
合ヲ結成スルコトニ成功シタ。

十組トハ即チ、「塗物店組、絹布、太物、繰綿、
小間物、雛人形（内店組）小間物、太物、荒物、
塗物、打物（通町組）菓種、砂糖、（菓種店組）
釘、銅、鐵物類（釘店組）綿（店組）畳表青竹延
（表店組）水油（川岸組）紙蠟燭（紙店組）酒（店
組）」デ總數百十三軒アツタ。

沽券に關係する物は「中央区沿革図集」を
参考として作成する



二 佃島沽券絵図宝永七年（1710）
写し故吉田喜代太郎所蔵

慶長十七年(1612)徳川家の命を受け、

大阪摂津佃村を出発して、元和・寛永・正保・

慶安・承慶・明暦・万治・寛文・延宝・天和・

貞享・元禄・寶永・正徳・享保・元文・寛保・

延享・寛延・寶暦・明和・安永・天明・寛政・

享和・文化・文政・天保・弘化・嘉永・安政・

万延・文久・元治・慶応・明治・大正・昭和・

平成と時代を駆け巡り今年平成二十四年

(2012)が四百年目(四十の年号)を経過。

(佃島の今昔より) 佐原六郎編著 雪華社

(一) 沽券

土地・家屋などの財産の売買の際に売主から買い主に与える売渡し証文

(二) 沽券絵図

もともと、この地は築造の完成と共に移住漁民の間に宅地が分割された。この分割の仕方、開発後六十余年を経た宝永七年(一七二〇)に作成された「佃島(沽券)絵図」によって充分に窺われる。それは鎮守住吉社の社地を除いて三十五筆にわかれており、当初の移住者に関する伝承とほぼ一致する。

絵図には作成時現在に置ける所有名が記入されているが、そのうちには攝津佃村の住民名(九左衛門・孫右衛門・八右衛門)が三人見えて、他、島民所有地は一五筆にすぎず、本小田原町民の九筆を初めとする他、所人の所有地一七筆に及ばないのが注目される。本

小田原町は、いうまでもなく当時の魚河岸の所有地であるから、六十余のうちに、佃島の宅地の過半の筆数が早くも島民の手から魚河岸の問屋商人の手に移っていたことを示すもの他ならない。

佃島の開発者の子が創めたといわれる魚河岸の問屋商業の発展が、逆に佃島漁民からその宅地を奪う結果となったのである。

だが、佃島の住民は土地を離れはしなかった。本小田原町、その他の地主から土地を借りて住み続けたばかりか、益々その戸数と人口を増していった。

佃島は、中央を東西に通ずる道路で距てられた上・下両町と、船入にかかる佃小橋で結ばれた東町との三区域にわかれていた、そして、それぞれ町から「獵師総代」各一名が出て、漁業に関する島内での相互規制に当ると共に漁業権の保護を初めとする外部との折衝にあたってい

た。

このことに関連して戸籍作成の六年前である、文久三年（一八六三）の総代は、上町・善右衛門・下町・庄五郎、東町・金蔵であった。

(三)

第一表佃嶋（沽券）の地割（宝永七年）

一七二〇年（金子家所蔵）

地主	地主住所	家守
1 九左衛門	(摂洲佃村)	平左衛門
2 孫右衛門	(摂洲佃村)	平左衛門
3 八右衛門	(摂洲佃村)	平左衛門
4 忠兵衛	()	宇右衛門
5 孫八	(舟松町2丁目)	弥次右衛門
6 作兵衛	(本小田原長)	清兵衛
7 忠左衛門	(本小田原長)	六左衛門
8 伝兵衛	(拾間町)	甚左衛門
9 清兵衛	()	加右衛門

1 0	忠兵衛	(舟松町2丁目)	六左衛門
1 1	彦左衛門	(南八丁堀五丁目)	
1 2	忠兵衛	(舟松町2丁目)	
1 3	善太郎	(武州清沢村)	善次郎
1 4	平右衛門		
1 5	与一右衛門	(本小田原町)	四郎兵衛
1 6	理兵衛		茂兵衛
1 7	吉右衛門		
1 8	善兵衛		五兵衛
1 9	一郎兵衛	(安針町)	
2 0	覚兵衛		善兵衛
2 1	庄兵衛		庄五郎
2 2	忠兵衛	(舟松町2丁目)	伊右衛門
2 3	十兵衛	(南伝馬町)	長五郎
2 4	住吉神社		

3 8	地主	(舟松町2丁目)	六左衛門
2 5	庄兵衛	(南八丁堀五丁目)	
2 6	清兵衛	(舟松町2丁目)	
2 7	七兵衛	(武州清沢村)	善次郎
2 8	治兵衛		
2 9	次郎兵衛	(本小田原町)	四郎兵衛
3 0	忠兵衛		茂兵衛
3 1	市郎左衛門		
3 2	長右衛門		五兵衛
3 3	庄兵衛	(安針町)	
3 4	甚右衛門		善兵衛
3 5	次右衛門		庄五郎
3 5	七兵衛	(舟松町2丁目)	伊右衛門
3 6	善兵衛	(南伝馬町)	長五郎
	地主住所		家守
		(南茅場町)	八兵衛
		(本小田原町)	五左衛門
		(南茅場町)	庄左衛門
		(本小田原町)	五郎兵衛
		(本小田原町)	藤兵衛
		(本小田原町)	久兵衛
		(南小田原町)	四郎兵衛

(四)

第二表 佃島沽券(国会図書館所蔵)

延享元年 (1744年)

地主 地主住所 家 守

1	平岡讚岐	(佃島)	平左衛門
2	弥兵衛	(深川大島町)	平左衛門
3	弥兵衛	(深川大島町)	平左衛門
4	宇右衛門	(佃島持家)	庄八
5	喜八	(舟松町1丁目)	孫兵衛
6	いろ・後見長五郎	(佃島)	清兵衛
7	宇右衛門	(佃島持家)	七之助
8	宇右衛門	(佃島持家)	忠七
9	麻次郎	(佃島)	宗右衛門
10	岩太郎	(佃島)	長兵衛
11	善左衛門	(佃島)	佐助

地主 地主住所 家 守

1	森幸右衛門	(佃島)	十右衛門
2	よふ・後見宇右衛門	(佃島)	庄八
3	宇右衛門	(佃島)	庄八
4	む 免	(佃島)	庄五郎
5	駒太郎・善右衛門	(佃島)	駒太郎
6	善右衛門	(佃島)	重兵衛
7	む 免	(佃島)	徳松
8	善右衛門	(佃島)	嘉兵衛
9	善右衛門	(佃島)	源五郎
0	善右衛門	(佃島)	岩太郎
1	福太郎	(佃島)	
2	住吉神社	(佃島)	
3	住吉神社	(佃島)	
4	住吉神社	(佃島)	

4 2	あ加・九左衛門	(佃島)	長五郎
4 1	ゑい	(佃島)	長五郎
4 0	ゑい後見長五郎	(佃島)	半四郎
3 9	善右衛門	(佃島)	清七
3 8	町内助成地		
3 7	金蔵	(佃島)	喜兵衛
3 6	定右衛門	(佃島)	
3 5	右衛門	(佃島)	房次郎
3 4	善右衛門	(佃島)	吉兵衛
3 3	宇右衛門	(佃島)	久兵衛
3 2	金蔵	(佃島)	喜平次
3 1	喜平次	(佃島)	地主直家
3 0	善右衛門	(佃島)	清七
2 9	善右衛門	(佃島)	清七
2 8	宇右衛門	(佃島)	利兵衛
2 7	九左衛門	(佃島)	地主直家
2 6	善右衛門	(佃島)	平六
2 5	善右衛門	(佃島)	金太郎



伊東家の番地

4 2	あ加・九左衛門	(佃島)	長五郎
4 2	あ加・九左衛門	(佃島)	金太郎
4 2	あ加・九左衛門	(佃島)	長五郎
4 2	あ加・九左衛門	(佃島)	金太郎

沽券絵図に関する物
 中央区佃島地区文化財団報告及び
 国会図書館所蔵沽券絵図より

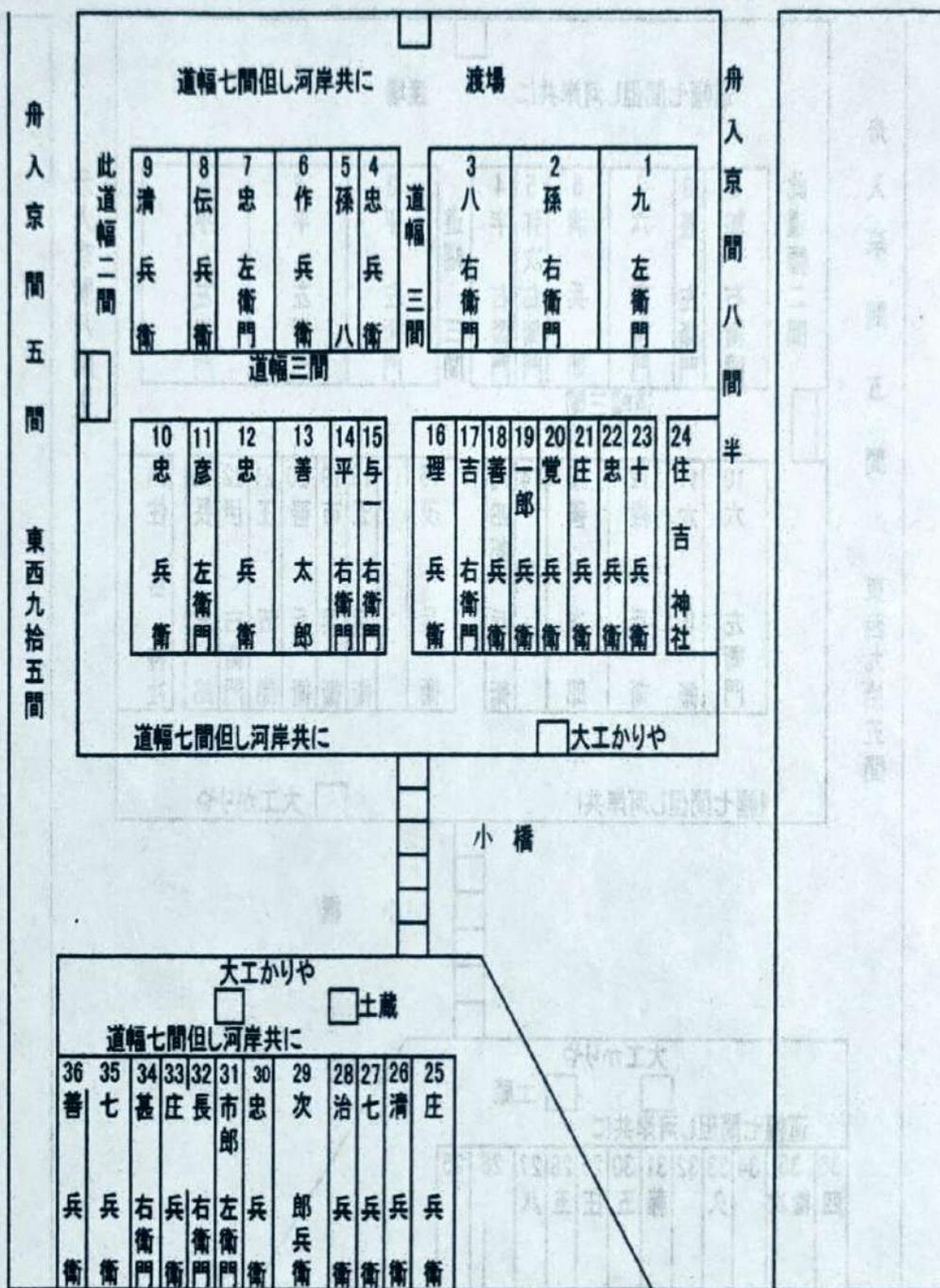
佃島沽券絵図

宝永7年(1710)(金子家所蔵)

南北九拾間

(地主)

(五) 佃島沽券絵図 (地主)



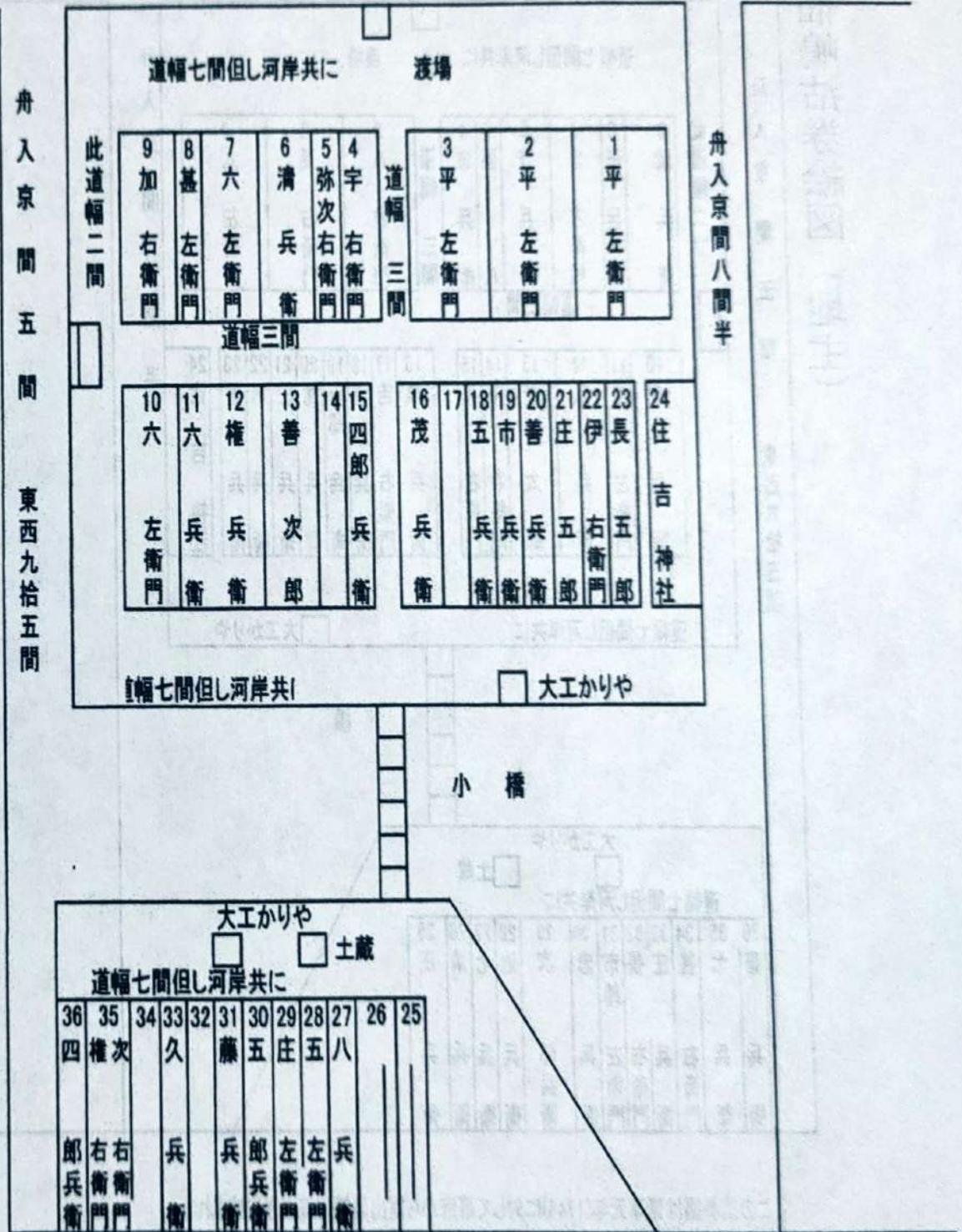
この沽券図は延享元年(1744)に対して幕府から提出要請に基づき作成された。

図と内容は佃島地区文化財調査報告より引用

(六) 佃嶋沽券絵図 (家守)

(家 守)

佃嶋絵図(沽券)の地割宝永7年(1710)(金子家所蔵)
南北九拾間

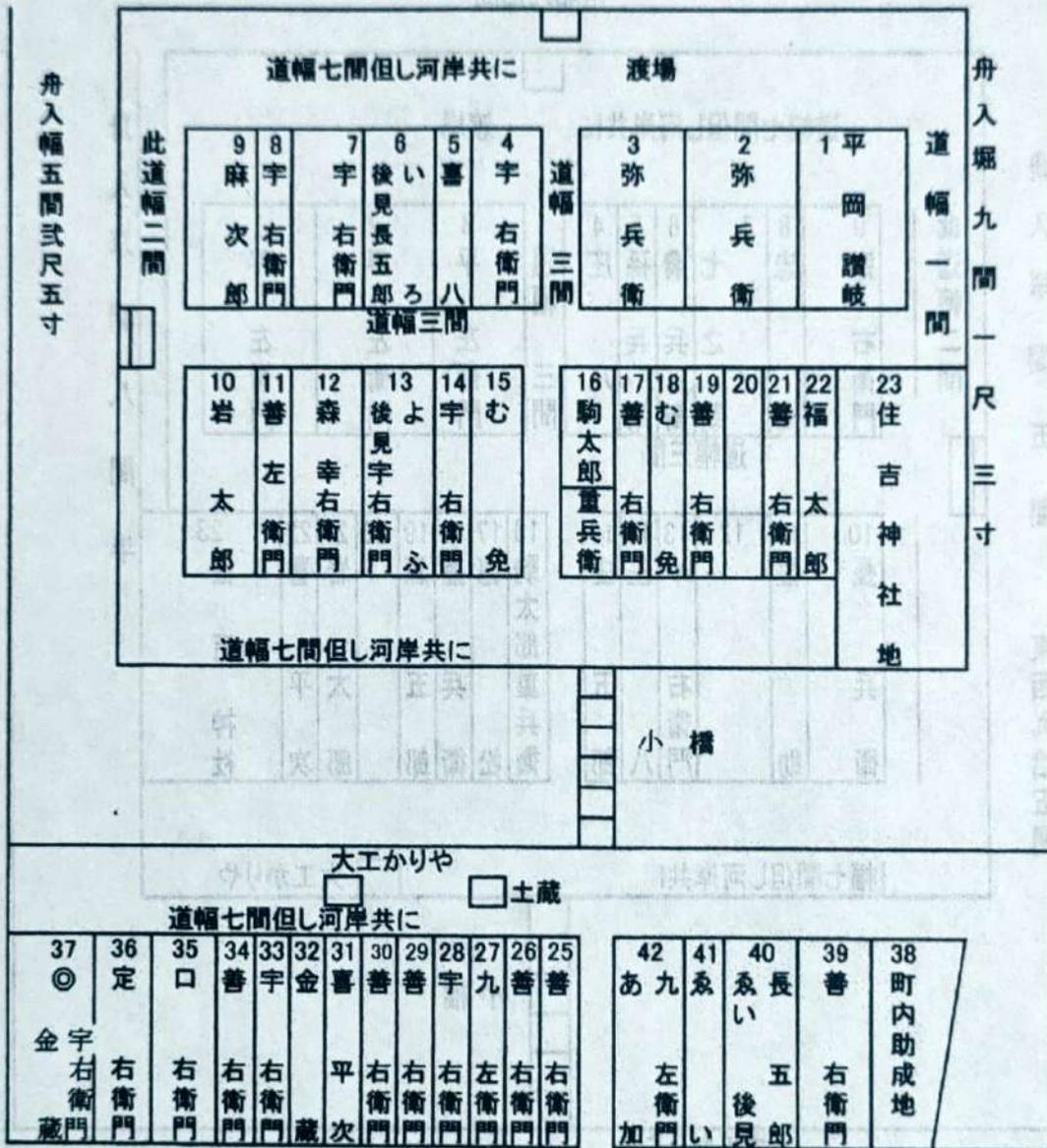


(七) 佃嶋沽券絵図 (地主)

佃島沽券絵図

(延享元年)(1744)(国会図書館所蔵
南北九拾間

(地主)



この沽券図は延享元年(1744)に対して幕府から提出要請に基づき作成された。

当初の沽券は、宝永7年(1710)この間 34年間

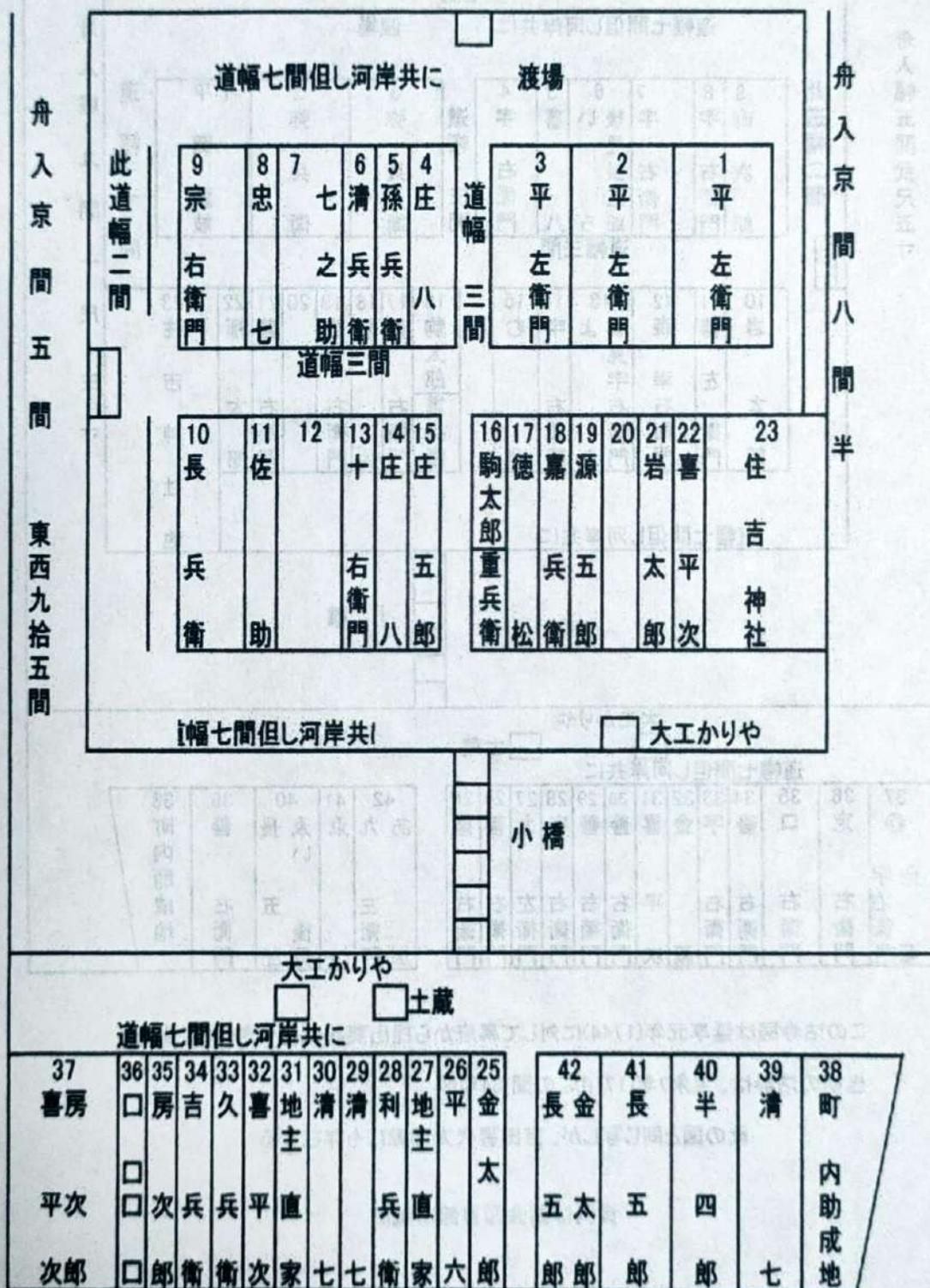
此の図と同じ写しが、吉田喜代太郎家にも存在する

資料は国会図書館所蔵図

圖(家 守)

佃島絵図(沽券)の地割(延享元年)(1744)(国会図書館所蔵
南北九拾間

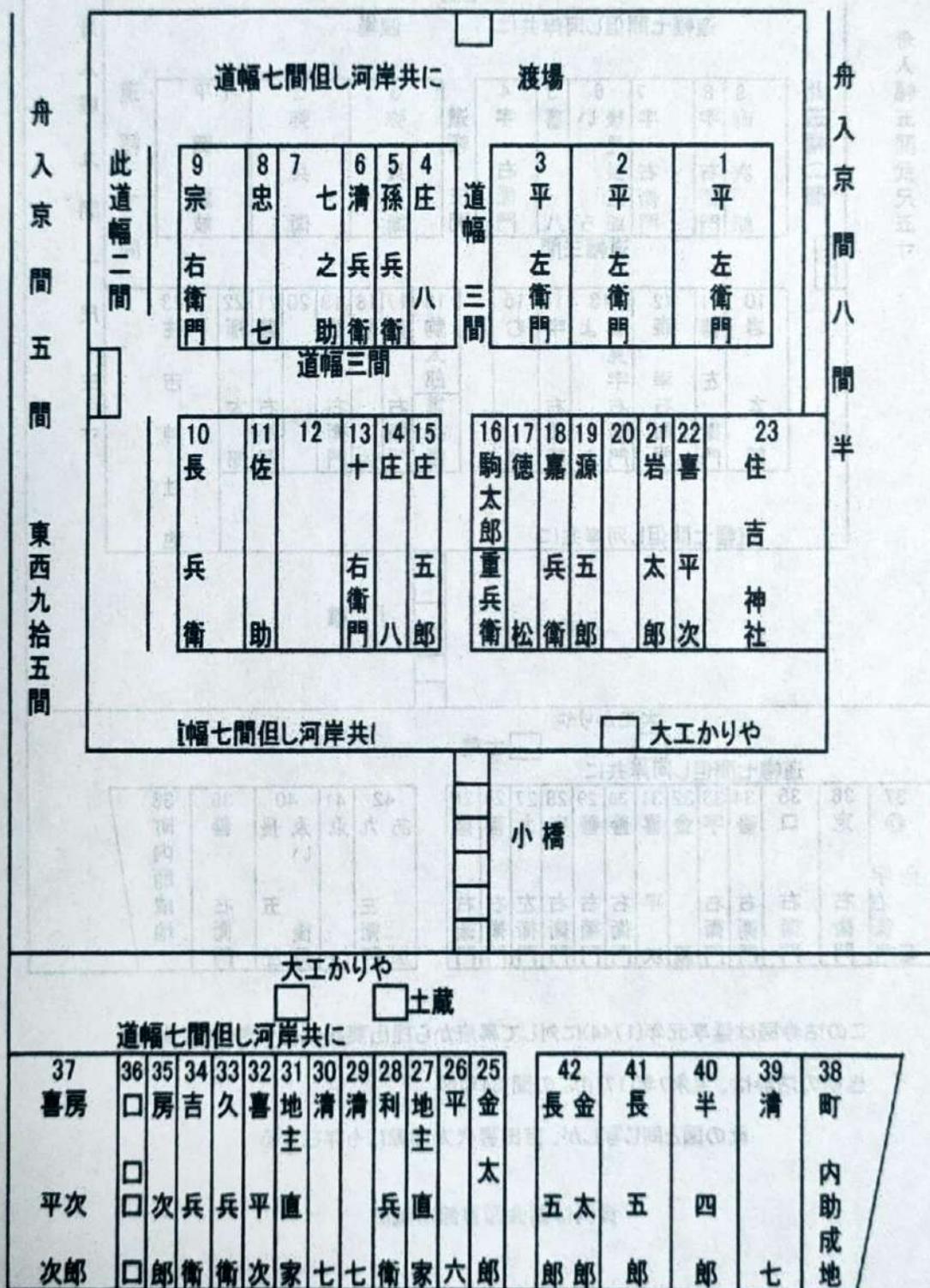
(八) 佃嶋沽券絵図一表・二表(相對表)



圖(家 守)

佃島絵図(沽券)の地割(延享元年)(1744)(国会図書館所蔵
南北九拾間

(八) 佃嶋沽券絵図一表・二表(相對表)

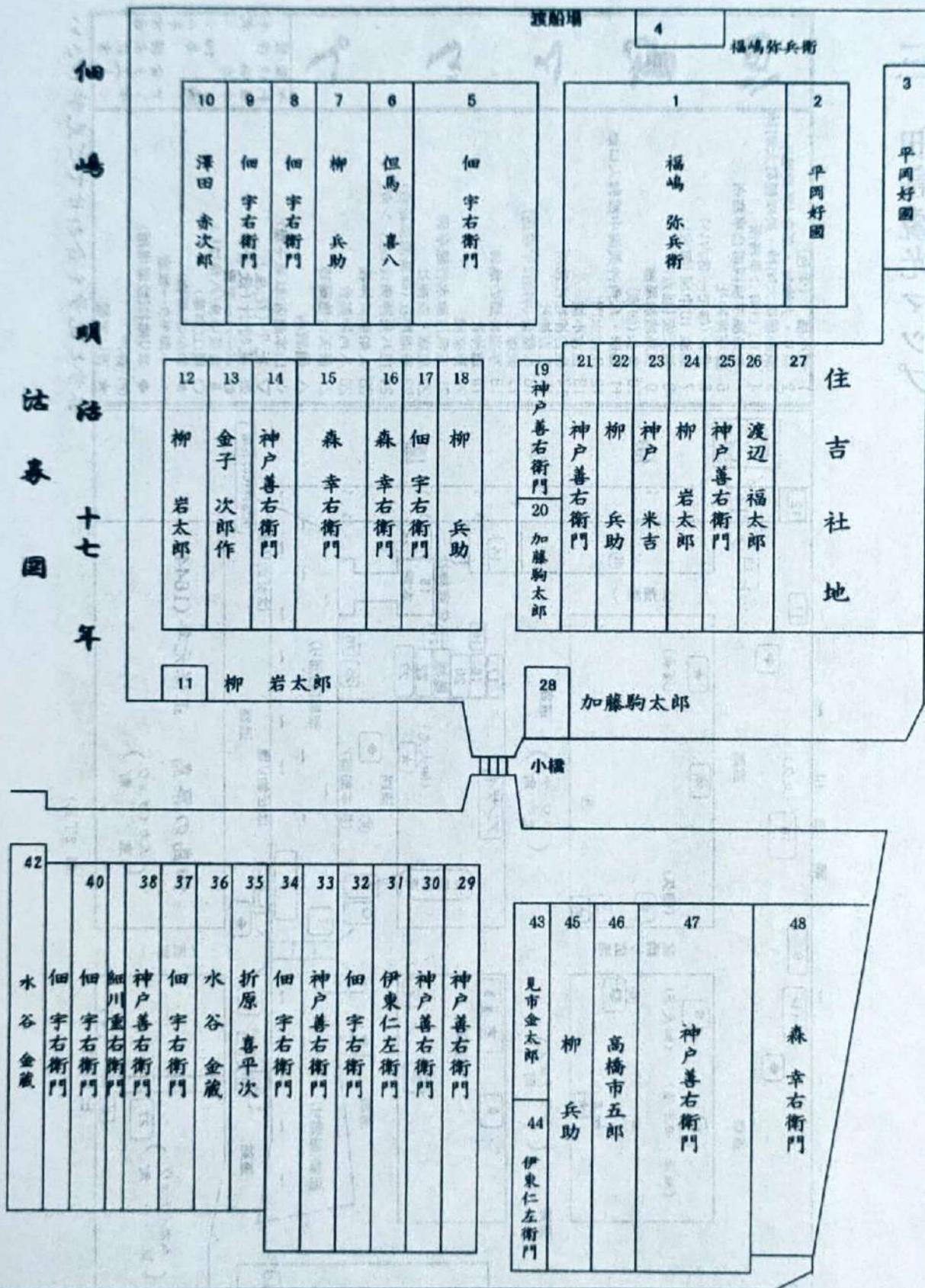


(九) 宝永七年と延享元年の対称表

第1表 佃島沽券絵図(金子家所蔵図)地割表						第2表 佃島沽券絵図(国会図書館所蔵図)地割表					
	地主	地主住所	家守	間口 間	面積 坪	地主	地主住所	家守	間口 間	面積 坪	
1	九左衛門	摂州佃村	平左衛門	12	240	平岡讃岐	佃島	平左衛門	12.36	264.6	
2	孫右衛門	同上	同上	12	240	◎ 弥兵衛	深川大島町 家持	平左衛門	12.4	264.6	
3	八右衛門	同上	同上	12	240	◎ 弥兵衛	同上	平左衛門	12.4	264.6	
4	忠兵衛	———	宇右衛門	10	200	宇右衛門	佃島家持	庄八	10.3	220.6	
5	孫八	舟松町2丁目	弥次右衛門	5	100	◎ 喜八	舟松町1丁目	孫兵衛	5.15	110.25	
6	作兵衛	本小田原町	清兵衛	5	100	い 後見長五郎	佃島	清兵衛	5.15	110.25	
7	忠左衛門	同上	六左衛門	5	100	宇右衛門	佃島家持	七之助	5.15	110.25	
8	伝兵衛	拾間町	基左衛門	5	100	宇右衛門	同所	忠七	5.15	110.25	
9	清兵衛	———	加右衛門	5	100	麻次郎	佃島	宗右衛門	5.15	110.25	
10	忠兵衛	舟松町2丁目	六左衛門	8	160	岩太郎	佃島	長兵衛	8.24	176.4	
11	彦左衛門	南八丁堀5丁目	六兵衛・権兵衛	8	160	◎ 善左衛門	———	佐助	8.24	176.4	
12	忠兵衛	———	———	9	180	森幸右衛門	———	———	9.27	198.45	
13	善太郎	武州清沢村	善次郎	4	80	◎ 後見宇右衛門	佃島	十右衛門	4.12	88.2	
14	平右衛門	———	———	4	80	◎ 宇右衛門	佃島	庄八	4.12	88.2	
15	与一右衛門	本小田原町	四郎兵衛	4	80	む 免	佃島	庄五郎	4.12	88.2	
16	理兵衛	———	茂兵衛	4	80	◎ 鮎太郎	———	重太郎	4.12	88.2	
17	吉右衛門	———	———	4	80	善右衛門	佃島	徳兵衛	4.12	88.2	
18	善兵衛	———	五兵衛	4	80	◎ む 免	佃島	嘉兵衛	4.12	88.2	
19	一郎兵衛	安針町	市兵衛	4	80	善右衛門	佃島	源五郎	4.12	88.2	
20	覚兵衛	———	善兵衛	4	80	◎ 善右衛門	———	———	4.12	88.2	
21	庄兵衛	———	庄五郎	4	80	善右衛門	佃島	岩太郎	4.12	88.2	
22	忠兵衛	舟松町2丁目	伊右衛門	4	80	◎ 福太郎	佃島	喜平次	4.12	88.2	
23	十兵衛	南伝馬町	長五郎	4	80	———	———	———	———	———	
24	住吉社地	———	———	8	160	23住吉社地	———	———	12.1	261.6	
25	庄兵衛	———	———	4	80	善右衛門	佃島	金太郎	4.12	88.2	
26	清兵衛	———	———	4	80	同上	同上	平六	4.12	88.2	
27	七兵衛	南茅場町	八兵衛	4	80	九左衛門	———	地主直家守	4.12	88.2	
28	治兵衛	本小田原町	五左衛門	4	80	宇右衛門	佃島	利兵衛	4.12	88.2	
29	次郎兵衛	南茅場町	庄左衛門	4	80	善右衛門	佃島	清七	4.12	88.2	
30	忠兵衛	本小田原町	五郎兵衛	4	80	同上	同上	同上	4.12	88.2	
31	市郎左衛門	同上	藤兵衛	4	80	喜平次	佃島	地主直家守	4.12	88.2	
32	長右衛門	———	———	4	80	金 蔵	佃島	喜平次	4.12	88.2	
33	庄兵衛	本小田原町	久兵衛	4	80	宇右衛門	佃島	久兵衛	4.12	88.2	
34	基右衛門	———	———	4	80	善右衛門	佃島	吉兵衛	4.12	88.2	
35	七兵衛	———	次右衛門 權右衛門	8	160	口右衛門	佃島	房次郎	4.12	88.2	
36	善兵衛	南小田原町	四郎兵衛	12	320	定右衛門	佃島	□□□□	4.12	88.2	
37	———	———	———	———	———	◎ 宇右衛門 金 蔵	佃島	房次郎 喜兵衛	12.36	264.6	
38	第1表宝永7年(1710)					町内助成地	佃島割残り 地所地主無之	———	———	144.4	
39	第2表延享元年(1744)					善右衛門	佃島	清七	12.0	234.6	
40						い 後見長五郎	佃島	半四郎	4.0	80.8	
41						い 九左衛門	佃島	長五郎	3.3	72.1	
42						あ 加	佃島	長五郎 金太郎	3.3	73.5	

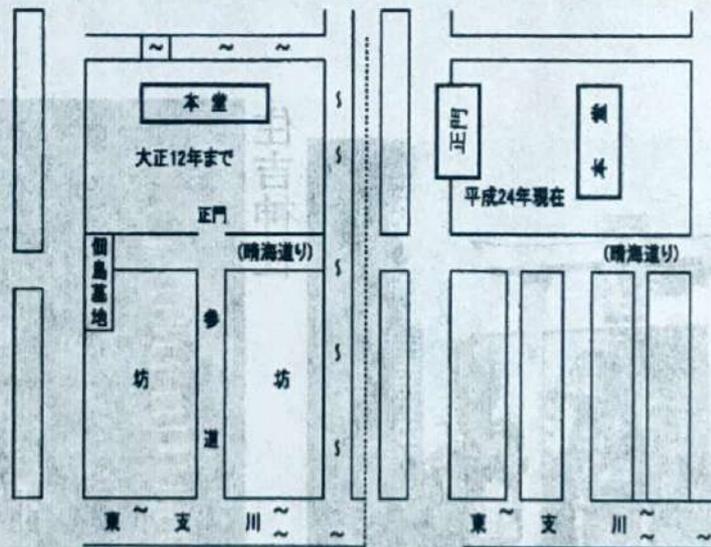
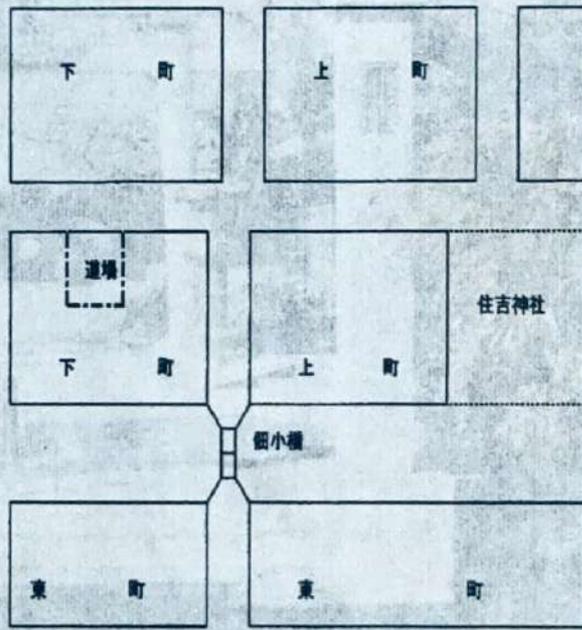
(十二) 佃嶋沽券絵図 (地主) 明治十七年

佃嶋
明治十七年



四 佃嶋の道場の位置及び築地本願寺の現在と過去

佃嶋道場の位置



築地西本願寺の現在と過去

住吉神社



住吉神社



住吉神社 内 鳥居(平成二十四年)

五 佃島と住吉神社

(一) 住吉神社

祭神

底筒男之命・中筒男之命・上筒男之命(住吉大神) 撰社 龍神社・疫神社・疫瘡神社・入船神社・船魂神社・稻荷社

沿革

撰津の佃村(大阪市西淀川区佃村)の漁者は、徳川家康が住吉神社などに参拝した際、神崎川を渡して以来の縁故があり、慶長十七年(一六一二)頃、江戸に向えられ、始めは小網町の安藤対馬守の蔵屋敷内に移住し、そこに故郷の氏神住吉神を勧請し、後、佃島の地を交付されて之を造成し、正保三年(一六四六)島の現在地に、社殿を建てて遷座した。元禄十二年(一六九九)古蹟地(寛永八年一六三二以前建立の社寺)に編入され、神職は津守氏(後に平岡氏と改名)が世襲した。当社は佃島の氏神であるばかりでなく、社前が

諸国廻船の湊であつた関係から、対岸の鉄砲洲稻荷社と同様に、海運業者の信仰厚く、関連の諸問屋にも信奉された、宝永二年(一七〇五)江戸下り酒支配人仲間が住吉講を結成して、毎年正月と九月に庭神楽の奉納を取決め、天保十四年(一八四三)鯉節問屋の小舟町組が毎年四月鯉釣の神楽を奉納することとしたのもその表われである。

また寛政二年(一七九〇)に北の石川島に開設された人足寄場(浮浪者を收容して職業教育を行う施設)とも関係深く、同四年、寄場役所から年三回米一俵を奉納の申し出があり、神社では寄場で生産する種油を購入していた。

佃島は江戸の大火には飛火による火災が多く、社殿も寛永十五年(一六三八)・安永七年(一七七八)・天保五年(一八三四)・同九年(一八三八)・安政五年(一八五八)・慶応二年(一八六六)に類焼、その都度再建が行われ、現在の社殿は明治三年の建造である。

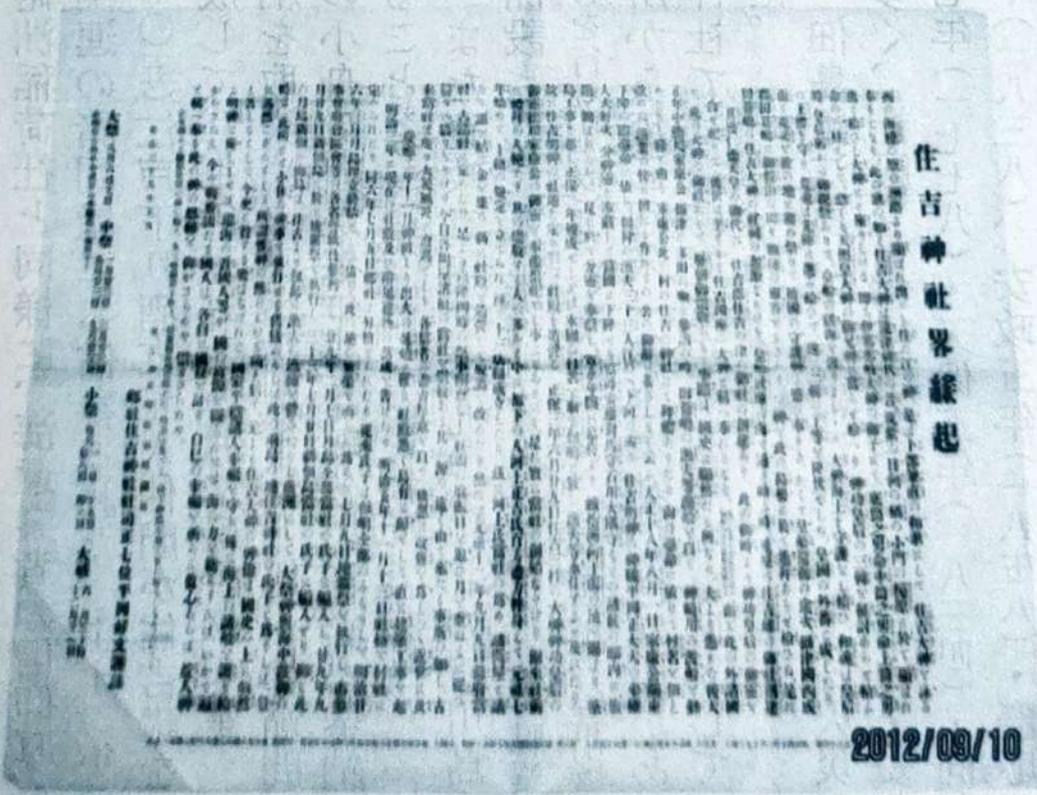
拝殿はは桁行三間、梁間三間、屋根切妻造り、銅版葺、幣殿、は桁行一間、梁間五

間、両下造、銅版葺、本殿は土蔵造、本瓦葺、である。一の鳥居は隅田川に面し、銅版巻の神明鳥居、二の鳥居はみかげ石神明鳥居、明治二十七年、陶器仲間の寄進。二の鳥居の左手に社務所、右手に水盤舎と神楽殿、拝殿左手間に文政五年（一八一二）奉祀の龍神社、右手には藤棚、本殿右手に嘉永三年（一八五〇）祭祀の疫神社、疱瘡神社などの摂社がある。

（中央区文化財調査報告書より）

住吉神社畧縁起（明治三十九年五月）

（佃島門徒講所蔵）



七 住吉神社宮司の歴代

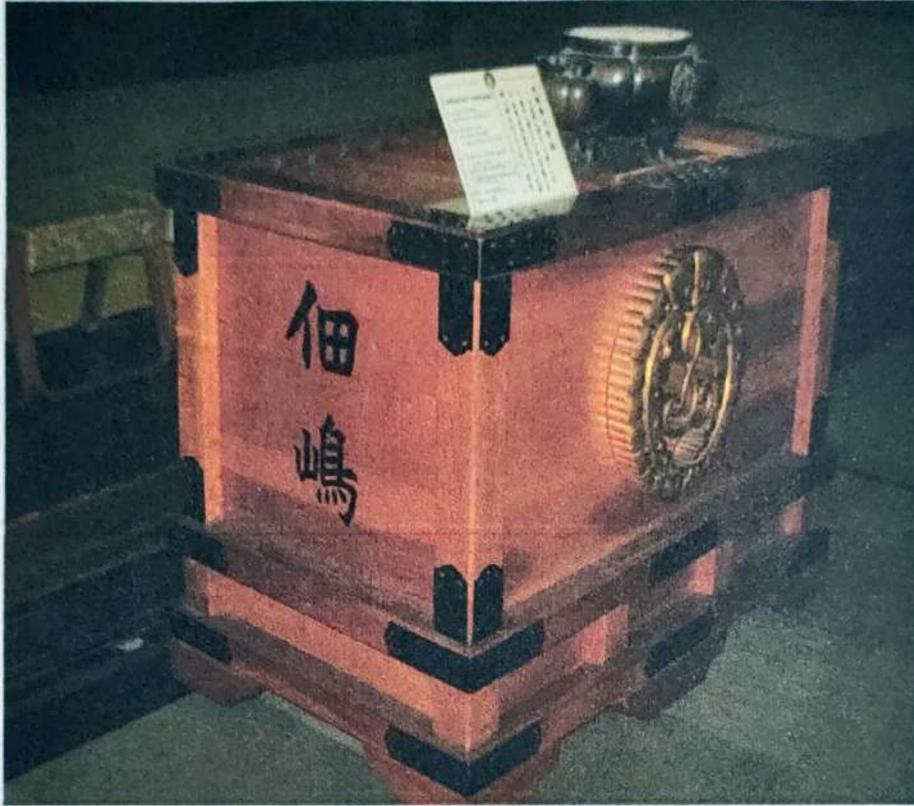
- 初代 平岡好次
- 第二代 平岡好和
- 第三代 平岡好智
- 第四代 平岡好信
- 第五代 平岡好昌
- 第六代 平岡好弘
- 第七代 平岡好祖
- 第八代 平岡好貞

八 薬師本願寺との関り

- 第九代 平岡好国
- 第十代 平岡好文
- 第十一代 平岡好道
- 第十二代 平岡好和
- 第十三代 平岡好朋

薬師西本願寺本堂 表紙

八 築地本願寺との関り



(一) 築地西本願寺本堂・・・賽銭箱

築地西本願寺本堂・・・賽銭箱



(二) 鉄砲洲と『佃島』

寛永十九年中になつて、町人は一切武家屋敷内移住することが許されなくなつたため、永らく、浜町安藤対馬守屋敷にいて魚業をやつていた漁民はどこか他に居住すること、やむなし。

そこで、鉄砲洲の東の干潟が漁業上至便の地であつたから、この地百件四方(小澤長吉氏所蔵の佃島古事記には、九十間に九五間とある)を拝領し、漁夫等自ら日夜築島に努力し、正保元申年二月ついに築島を完成し、ここに漁家を建て並べ漁夫一同引き移つたのである。

そこで、本国佃村の名によつて佃嶋と号した。その後は孫右衛門の弟忠兵衛が佃島の名主を勤孫右衛門は本国佃村に帰り年々出府した。これから六代目まで佃忠兵衛と称し七代目以後は本国森家から入家して、相續し森姓改め代々森幸右衛門と称した。

江戸の名主の中でも佃島の名主は最も権威重く常に上席に坐したといふことである。

なつて、御成先御用繁多となつた、ため享保四年十月二十四日(平成二十四年より二百九十三年前)大岡越前守の掛で深川八幡宮前に武家方より、屋敷八百四十四坪を拝借してこれに町家を建て「佃町」といつた。この深川の地は一説に安藤右京進屋跡であつたといふ。

この地が後に「あひる」といつて深川岡場所の一つになつたのであるが、この「あひる」といふ言葉については、いろいろの説があるが、佃島漁師のほした「網干る」から、でたといふ説が、事実のようである。

その後、享保七年には深川にさら百八十四坪を助成地として、拝借したことが、みているが、これは、そのご寛延二年九月に返上してある。

江戸に下つた三十三名の漁夫が日々えた魚類は第一に幕内の膳所に奉つたが、その余りのえ物は水の便利のよい人の集まる、日本橋の傍で売りさばいた。

後に、孫右衛門の弟森九左衛門発意して、ここに魚市場を開くことを幕

府に願ひ、始めて魚市場が開かれたのである。九左衛門は本国の名により佃屋と号し、また孫右衛門支配地の内佃村のつづき大和田村から出たものは、大和田屋と称した。

(小澤貞夫氏所蔵、金子為雄氏所蔵
昭和癸酉元旦発行「砂払」初号による)

(三) 築地本願寺・佃島道場

杉並区和田堀・佃島説教所

現在から三三三三年前、延宝七年二月(一六七九)築地本願寺が再建された際、本願寺の移転にたいする、佃島門徒一統の努力について甚大であった。これを機として従来にも増して本願寺と佃島は深い縁で結ばれた、地所に関しては、何事についても、佃島へ対談の上事を決することになりました。佃島の墓地に付いても、この時、いずれの場所でも勝手しだいと言う事で御堂か

ら西の方定め、これを佃島の墓地として尊守は佃島から差置くことにいたしました。

また、何しろ、佃島は海を離れた場所ですから、風雨の節、墓参は容易ではなかつたので、佃島に出張所が出来、老人も朝夕墓参が出来る様になった。(出張所とは、築地本願寺説教所「道場」元文四年(一七二九)現在地の一丁目四番地十号、当時の名主、佃忠兵衛、屋敷内西南を割り、寄贈されたものである、間口四間奥行五間、の「道場」を持ち、築地本願寺の墓地行かなくても「道場」で参拝したのではないかと思われる。

築地本願寺の墓地は延宝七年から昭和六年(二五二)年間築地本願寺内に設置していたが、大正十二年の関東大震災において、大打撃を受け昭和五年震災復興事業により、現在の晴海道りの開通及び勝どき橋開通に伴い、多くの寺院の移転、佃島門徒の墓地も、移転対象となり、昭和六年杉並区和田堀に移転した、この移転に際し努力された方が「佃政」金子政吉氏であった。

この移転に伴い政吉氏も自らの墓地を作つ

た(他の者とは、比較にならない立派な墓地である)政吉氏は昭和九年三月九日に永眠された。

(四) 築地本願寺における佃島門徒のお墓の位置について (佃島小学校座談会)

(座談会) 佃島を語る 日時 昭和六十一年二月二十五日 (中央区の昔を語るより写す)

凶面の※が佃島門徒のお墓場所出席者
伊東豊太郎(丸仁) 明治四十一年七月
二日生まれ佃一の九の八 (明石小学校卒業)

小澤清太郎(浜清) 明治四十二年一月十六日
生まれ佃一の十の七 (佃島小学校卒業)

金子新太郎(丸国) 明治四十年七月十日
生まれ 佃一の四の六(月島第一小学校卒業)
業) 松江梅子(源重) 大正三年二月二十四日
生まれ 佃一の三の四(泰明小学校卒業)

文化財調査指導員 川崎房五郎

座談会内容

川崎 ええ田舎でしたからね

金子 新宿でも何もないんだから、築地が終点新宿行きという電車が出たんですよ、墓場のうえからずっと見ていたんです。

川崎 今、あなた、墓場ということを言ったが、これはよつぽど大事なんですけども、なかなか皆さん僕らが墓場ということをいっても佃島の墓場ということを御存知ない方、とっても多いですよ。

伊東 今の共和国の中です

小澤 あそこに全部あるんですね

川崎 大変な広さだったそうですね

伊東 かなり広かった

(五) 「佃島説教所門徒講」

延宝七年(一六七九)築地本願寺再建された際に信者らが尽力したことがきっかけとなり結成する。

築地本願寺における佃島門徒のお墓の位置について

(座談会) 佃島を語る 日時 昭和六十一年二月二十五日 於青年館

出席者

図面の※が佃島門徒のお墓の場所

- 伊東豊太郎 明治四十一年七月二日生 佃一ノ九ノ八 (明石小学校卒)
- 小沢清太郎 治四十二年一月十六日 佃一ノ十ノ七 (佃島小学校卒)
- 金子新太郎 明治四十年七月十日生 佃一ノ四ノ六 (月島第一小学校卒)
- 松江 梅子 大正三年二月二十四日生 佃一ノ三ノ四 (泰明小学校卒)

文化財調査指導員

川崎房五郎

座談会内容

金子 新宿何と言うのは、本当にまだまだ

川崎 ええ、田舎でしたからね

金子 新宿でもでも何も無いんだから、築地が終点
新宿行きという電車が出たんですよ、基場
上からずつと見てたんです

川崎 今、あなた、基場ということをやったが、こ
れはよっぽど大事なんですけれども、なが
か皆さん僕らが基場ということをやっても佃
島の基場ということを御存じない方とっても
多いんですよ

伊東 今の共和会の中です

小沢 あそこに全部あるんでですね

川崎 大変な広さだったそうですね

伊東 かなり広かった

(八) 金子政吉氏の葬儀及び和田堀り佃門徒講のお墓の配置

煎餅の入口 (即島越焼の煎餅)

田一丁目四番地十号 煎餅(佐賀)の店主

(十) 即島越焼の煎餅

金子政吉氏の葬儀

それは大変な葬儀であった様子、渡船を渡るを渡った、明石町から、本願寺までの道路の両側に人々がぎっしり並んだ様子、また、当時、芝三田四国町に住まいがあった。芝から本願寺まで、芸子さんが大勢並び、全国の親分衆が参列された様子、全国の親分衆の連絡に時間がかかり、葬儀が一週間かかった様だ。

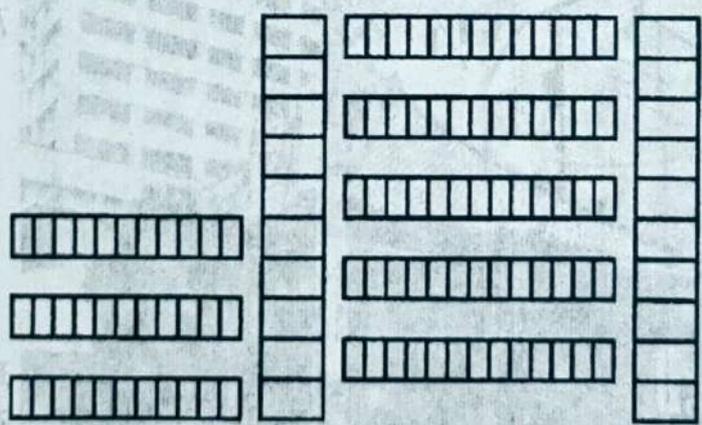
築地『大平山』佐藤喜三子氏の談話から、当時親分の三十年忌が帝国ホテルで、実施された際に葬儀の様子を写したフィルムを見たとのこと。それは、盛大であった。(昭和三十八年頃)是非、見てみたいものである。

築地市場水神社の狛犬は金子政吉氏祈願した物

煎餅(佐賀)の店主

田島煎餅と主舌(即島煎餅と白煎餅)

平気二十四半即島煎餅



杉並区 和田堀 佃門徒のお墓の並び



(九) 佃島に初めて「道場」が建つ

阿弥陀木仏を安置する、丈け連座を除き
 壺尺五寸と言う、六日、移徙に付き、本願
 寺より、輪番等に来て、御会務之。

(十) 佃島説教所の前進

佃一丁目四番地十号 道場(当時の名主、
 佃 忠兵衛)屋敷内の一部を寄贈された、
 道場の入口 (佃島説教所所蔵)

佃島の「道場」については、昭和九年に現
 在地に「佃島説教所」が落成するとともに
 消滅した。
 現在七十八歳



平成二十四年佃島説教所

九 佃島漁民と生活(佃島魚師と白魚
 漁・佃島の子孫)

(一) 白魚漁

白魚漁に用いる網は、昔は佃では、建網、四つ手網の二種類あった。

最近に至り四つ手網がなくなり、張長

袋すくい網、等が出来、又、地曳網を用いる所があつた。建網は、昔御用網といつて、佃島でも、一般漁師には使用を禁止された。

この網は、すが糸(生絲)で作られ、一枚の大きさは、高さ三尺位幅一間位で、流れに従つて、縦に張り、白魚が網目に首を突込むように作られてゐる、網は昔は越前家(福井県)の武士達が内職に之を作つたもばれる。のといふ、(一種のさし網なり)又、本張りといつて、流れを受けて張る方法もあり「当時、この網を使用すると、川岸で皆焼き捨てられたが之をしつていて、尚、使用する者があつた程、この建網は漁獲のあつたものと言われている、この建網を似て御用漁を勤めるもの威勢は素晴らしいものであつたといふ。」

佃島でも、この網を使用する家は四・五軒位であつた。最近佃でも此の網を見なく

る、ただ、羽田の猟師が専門に使用していたが、飛行場が出来て魚場が埋め立てられたのでこれも無くなり、今は昔の語り草となつた。篝火を焚いて白魚漁する四つ手網も、今は、広重の江戸名所絵で見るとのみ、明治の末期まで四つ手網で(夏網といふ)芝海老を猟つていたが、これも不漁にてなし、現在は佃島付近に白魚漁なき為、漁場を中川一ヶ所で張網に依る漁のみ残り。

すくい網も築地・鉄砲洲・神田川辺より盛んに出漁せしも、今は長島・雷辺に残在せるのみ。

千住大橋上の白魚漁については、昔はしらねど末まだ佃付近で漁のあつた頃少し見たことがあれど、淡水多きためか、形に於いては、やや大きいれど、色は透明ならず白色なり、寒中よりも春の終り頃に獵れんのみ、欲歌に『佃育ちの白魚でさいも、花浮かれて隅田川』昔、白魚の豊漁の時分には、朝猟船が帰つて来ると何れも白魚を籠で何杯も揚げたもので、私の家(庄五郎)など

は、船数が多き為、流しに白魚をぶちまけ、家内総がかりで箱へ立てたと言う。

当時、一箱二十五チヨボ(五百尾)立であったが、段々魚もすく白魚の幼魚の頃は「べら」と称して一合・二合と桝にて量る半寒たつて(又は白魚祭り以後とも言う)白魚となりチヨボと呼ばれる。明治天皇御在世之頃宮内省漁類調進所へ白魚は私の家(庄五郎)より十月頃のべらの初漁より、五月の白魚終漁まで毎日納めていたが、何日も注文は一桝・二桝により注文にて何チヨボとは言わず(註、一桝は普通三十三チヨボ位に、二十五チヨボの計算にて納めたり。(江戸の時代の佃島・櫻木庄五郎より転写)

(二) 佃島漁師と白魚漁

かくして、中川・利根川を御膳御用川に拝領し専ら幕府の御膳御用を勤め、殊に家康の命によつて、佃島漁民が遠く、名古屋浦から移植した、白魚は専ら佃村漁民の司とつたもので、この白魚りようのため中川際に三百八十間余の場所を漁夫の小屋の地

として、定められ、毎年冬春のうちはそのこへ小屋をたて日々白魚を献上したものである。かようにして、江戸の漁師の間に伍して専ら幕府の御用を勤め、慶長十八年八月十日(平成二十四年から数えて三百九十九年前)海川漁りよう勝手たるべしという、御証文をえて、江戸近海では、御法度場所であつて浅草川、稲毛川を除いてはいかなる場所でも、「あみかけ勝手たるべし、」いうことになつたのであるが、これは、漁民として大きな権利で家康以来つくした功によつたものである。翌、慶長十九年大坂冬の陣、元和元年夏の陣には、佃村漁民大いに、努力し軍事の蜜使あるいは、陣中の御膳御用等大いに勤めたことが、佃島由諸書にのつている。すなわち、「大坂両度御陣の節中国、四国両国筋の様子を探り御用船をりよう船に仕立て、御加勢申上茶臼山御本陣へ御着御用仕日々御中進申上候、御陣場御着御不自由に付御膳御着差上侯落城の節々橋々焼落往来不自由に付き、りよう船にて通行致候」とある。

(三) 佃嶋漁業協同組合解散之記



(四) 佃嶋漁業協同組合解散之記(再掲)

(四) 佃嶋漁業協同組合解散之記(清書)

佃嶋漁業協同組合解散之記

佃嶋の漁業は遠く江戸時代から今日に至るまで、東京湾の漁業の先駆をなし郡人士に新な魚介を供給する使命をもつて古くからのしかし近年東京都の急激な膨張に伴う都市改造の要請は港湾等の拡張計画の推進を余儀なくし、佃嶋の漁業についてはこれにその座を譲り伝統の強みと特異の存在としての誇りの上に受け継がれてきた權益を、漁業補償を受けることによれば慶長十八年以来栄枯盛衰を重ね実に三百五十年の長歲月に亘り傳われてきた漁業に終止符をうつことは、誠に愛惜の情に堪えないものがある。

ここに佃嶋漁業者の母体たる佃嶋漁業協同組合がその使命を終え解散するにあたり懐旧の情を述べ永く記念するものである。

昭和三十八年十二月二十五日

多田 裕 誌

(五) 島民の屋号(軒)

国名を付けたと思われるもの

萬屋	玉屋	大黒屋	岩屋	豆屋	八百屋	海苔屋	川	松江屋	鹿島屋	伊豆屋	播磨屋	遠州屋	大島屋	新宮屋	上総	伊勢屋
1	1	1	3	1	1	2	商業と関係のあるもの	1	1	1	2	2	3	3	8	16
丸屋	竹屋	納屋	富屋	釘屋	団子屋	碓屋		尾張屋	越前屋	三河屋	上州屋	和泉屋	大坂屋	津国屋	神戸屋	下総屋
2	1	1	1	1	1	1		1	1	1	2	2	2	3	6	1
・	・	・	・	・	・	・		岩城屋	・	大和屋	・	越後屋	・	三浦屋	・	但馬屋
3	5	1	7	6	1	1		3	5	1	0	2	4	3	2	1

3つに属さない物

金子屋	山田屋	桜木屋	福田屋	古島屋	平岡屋	福本屋	山和屋	飯田屋	野田屋	伊東屋	柳屋
2	3	3	2	2	1	1	1	1	1	1	1
小沢屋	高瀬屋	小林屋	細川屋	高橋屋	岡田屋	山崎屋	西村屋	古屋	川口屋	水屋	新屋
2	3	2	2	2	1	1	1	1	1	2	2
田中屋	・	福村屋	・	伊藤屋	・	森田屋	・	太田屋	・	・	・
10	5	2	1	2	8	1	5	1	5	5	2

1だけ借家住まい後家の家には屋号はない。

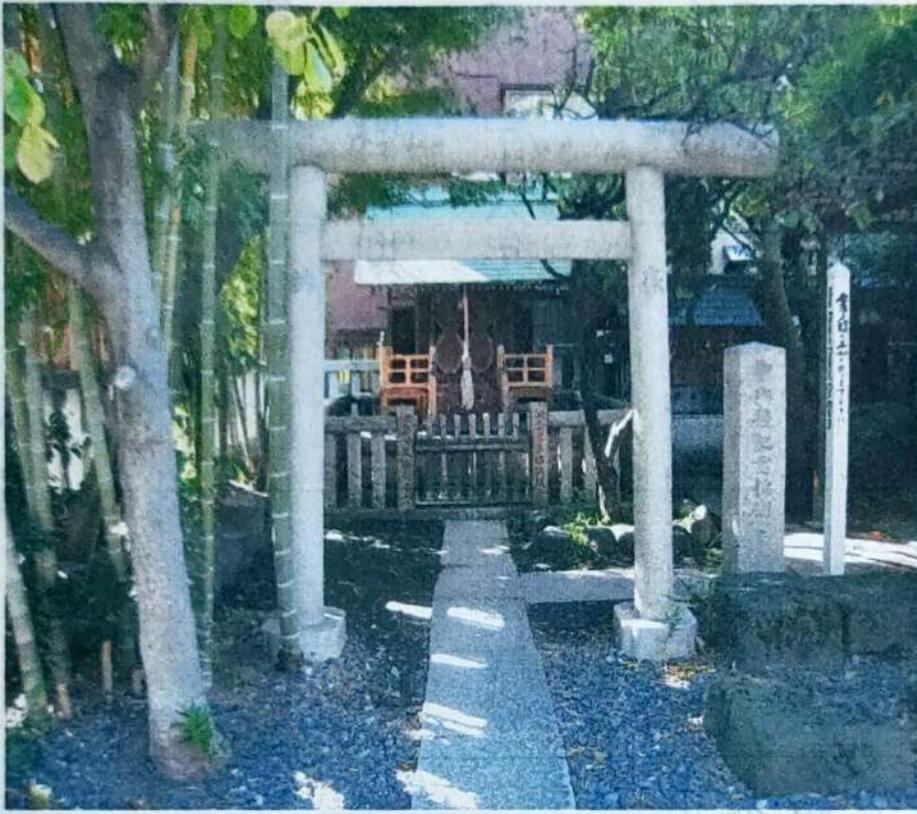
230軒 佃屋(45)

人(借家) (吉村村内)

小林 富光 寺田 志平
菅田 英藏 松島 志平

(七) 船魂神社・鳥居

(紀元二千六百一年)



昭和十六年 有志

京畿区田島四 佃島漁業協同組合

京畿区田島四 佃島漁業協同組合

左側 藤田島二丁目六右側 田島吉

京畿区田島二 佃島三番地 高瀬 重四

金子 為雄 二番地 内田 市子蔵

黒部 亀吉 八番地 金子 巳之助

横田 金太郎 四番地 八渡辺 瀧 松

金子 清四郎 齊藤 杏

飯田 熊次郎 合 藤 金子 新太郎

浦井 重吾 高橋 久三郎

小澤 甚之助 重四 小澤 新治郎

折本市 太郎 吉 高橋 小 亀次郎

高山 口 広吉 岩崎 金 富太郎

山田 長之助 飯島 山 孝太郎

伊東 久太郎 小川 金太郎

田中 久三郎

吉一 燈台 田島 吉

出部 吉 又 外 野 人 田島 吉

田島 吉

田島 吉



(八) 初期の佃島漁業組合

明治三十六年三月創立總會 決議録

佃島漁業組合發起人一同は明治三十六年三月一日午前十時東京市京橋区佃島十八番地旧漁業組合事務所に於いて、佃島漁業組合創立總會を開きたるに、其の招集に出席したる者は、小澤菊次郎・高橋喜三郎・小澤勝次郎・飯田栄吉にして、組合員たるべき飯田栄吉は田中鉄五郎、外百拾七名の委任状を持参し、其の代理権を証明たるを

似て、會議を開き、發起人浦井嘉七会長となる。

出席者及代理人として出席したる飯田栄吉一致を以て、左の決議を為せり。

佃島漁業組合發起人

- 浦井 嘉七
- 山田 寅吉
- 高橋 重助
- 金子 卯之助
- 金子 太助
- 金子 佐吉
- 小澤 松之助
- 小澤 菊次郎
- 高橋 喜三郎
- 小澤 勝次郎
- 飯田 栄吉

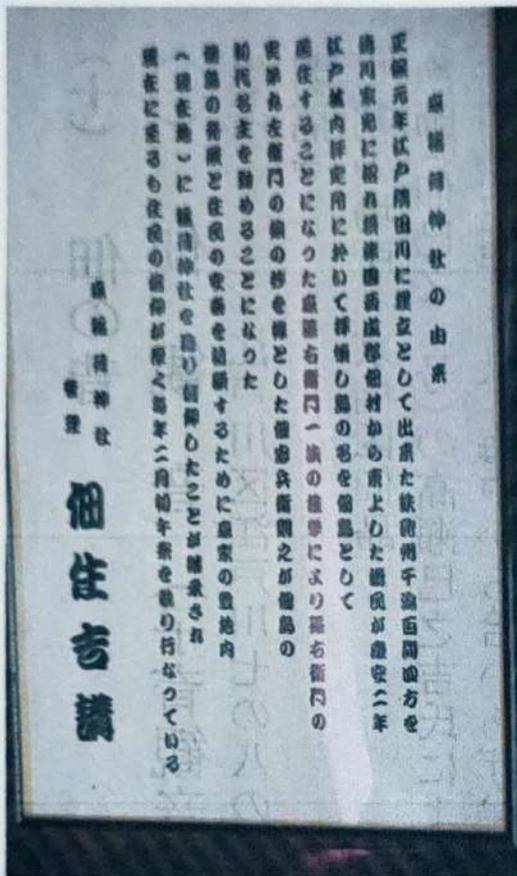
佃島漁業組合設置發起人

- 京橋区佃島四拾八番地 浦井 嘉七
- 京橋区佃島八番地 滝口 民次郎
- 京橋区佃島三番地 金子 佐吉
- 京橋区佃島二拾三番地 高橋 重助
- 京橋区新佃島二丁目六番地 山田 寅吉
- 京橋区佃島四拾一番地 金子 卯之助
- 京橋区佃島四拾七番地 小澤 松之助

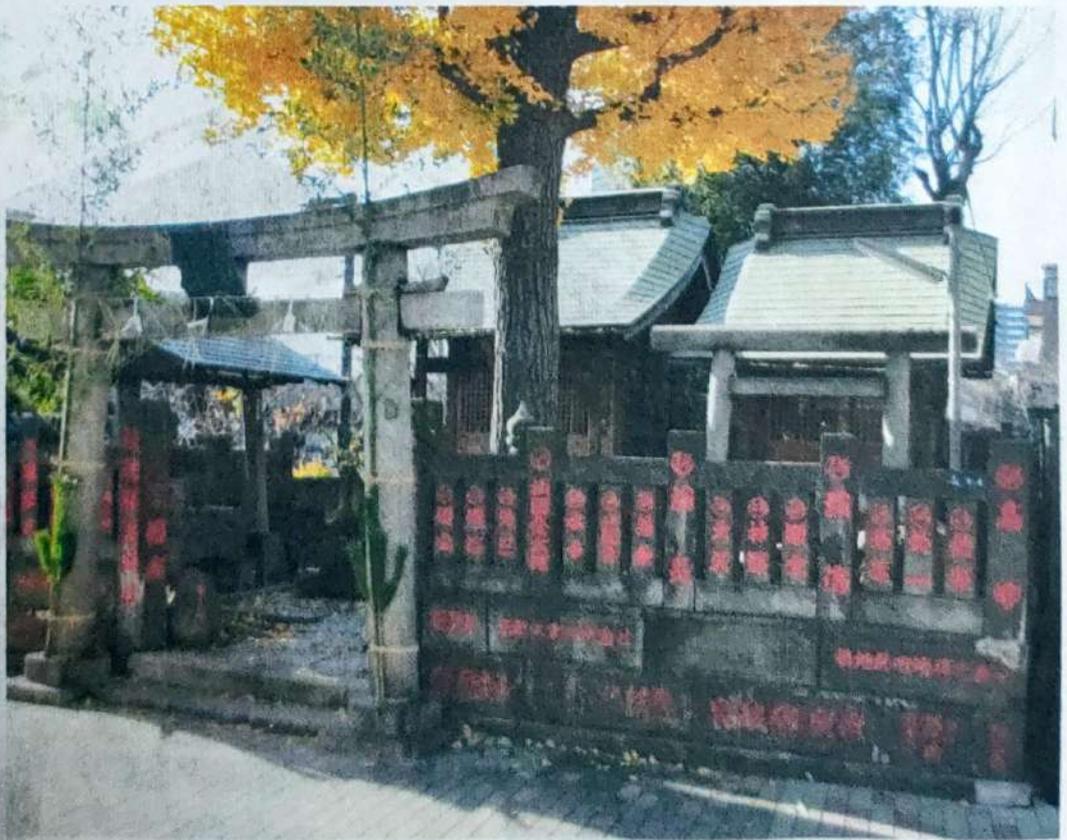
(佃島と白魚漁業より)



(森) 稲荷神社(下町)裏河岸



(九) 森・浪除・於咲・稲荷



於咲稲荷
浪除稲荷

(十) 佃の昔

(一) 佃 観 音 (子育観音)

場所 江戸川区江戸川七の八の一

明福寺

当初の場所 京橋区佃島

漁師(佃巳之 号)の高瀬巳之吉氏によつ

て、明治三年二月、海中から拾いあげ、我

家で泰っていたとされる像です。

のちに、昭和十年(一九三五)中央区の佃

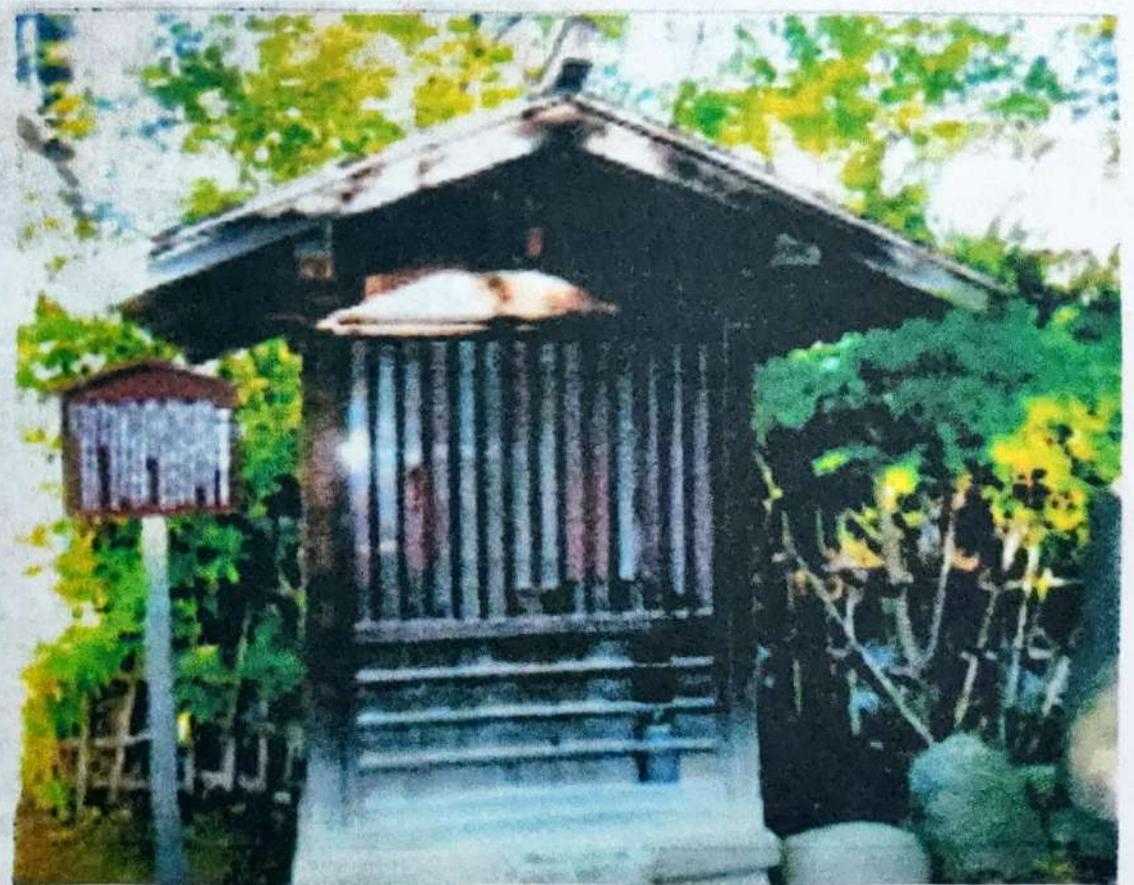
からこの地に移つて来た

観音像。

現在も高瀬巳之吉氏の子孫によつて、こ

の像は大切に維持されていることが確認さ

れております。



住吉神社入口門柱(佃漁業組合)昭和62年

(十一) 佃漁業組合名簿(昭和六十二年)	1	相 吉 相 原 勇	25	佃丸長 加 藤 弘
	2	池 田 池 田 俊 夫	26	浜 清 小 沢 清 太 郎
	3	飯田水産 飯 田 豊	27	浜 長 小 沢 政 吉
	4	丸 瓜 瓜 生 隆 男	28	浜 房 小 沢 房 吉
	5	越 安 宮 森 安 雄	29	藤 間 藤 間 陽 一 朗
	6	加藤水産 加 藤 守 宏	30	① 浦井 浦 井 克 昇
	7	神 勝 神 戸 信 男	31	丸 仁 伊 東 豊 太 郎
	8	龜 吉 山 田 太 吉	32	丸 国 金 子 新 太 郎
	9	紀 竹 遠 藤 松 仁	33	丸 政 小 林 三 郎
	10	栗 原 山 本 コ ウ	34	⊕ 佃吉 浦 井 吉 夫
	11	越 栄 林 定 冶	35	丸幸水産 小 塚 潔
	12	米 松 内 山 政 冶	36	水 直 栗 原 時 正
	13	小林水産 小 林 富 次 郎	37	水 十 野 田 秀 夫
	14	三佐水産 竹 内 浩 一	38	山 勝 山 本 喜 平 冶
	15	鈴 一 櫻 木 正 雄	39	佃伊之分店 飯 田 喜 三 郎
	16	鈴 重 浦 井 重 雄	40	佃龜新 加 藤 順 一
	17	鈴 龜 鈴 木 龜 次 郎	41	佃 熊 山 田 敏 之
	18	鈴 三 鈴 木 喜 三 郎	42	佃水産 高 瀬 好 昭
	19	善 金 神 戸 一 男	43	佃 源 田 中 賢 太 郎
	20	大 久 小 林 潔	44	佃大忠 加 藤 忠 男
	21	高 安 高 橋 安 吉	45	佃 寅 高 橋 金 三 郎
	22	佃 文 長 谷 川 武	46	佃 信 酒 井 信 一 郎
	23	佃 赤 田 中 俊 郎	47	佃 林 折 原 義 三
	24	佃伊之 飯 田 栄 太 郎		

佃島における土地の変革(明治6年)・(明治45年)・(昭和7年)・(昭和27年)
 明治6年(第一大区十区) 明治45年地籍台帳より

(十二) 佃島土地の変革(明治六年・明治四十五年)

地番	坪数	地価(円)	所有者住所	所有者氏名	地番	坪数	地価	所有者住所	所有者氏名
3	85.5	75	小	平岡好國	1	529.85	1,906.74	本所区緑町1-16	福島弥兵衛
2	95.0	75	小	平岡好國	2	111.18	400.24	佃島3	平岡好文
1	484.5	450	小	福島弥兵衛	3	187.87	460.33	同上	平岡好文
4	35.0	35	小	福島弥兵衛	4	36.25	130.50	本所区緑町1-16	福島弥兵衛
5	200.0	150	小	佃宇右衛門	5	255.92	921.31	佃島5	佃豊
6	100.0	75	小	但馬喜八	6	117.65	423.54	同 17	金子政吉
7	100.0	75	小	柳兵助	7	116.87	420.73	同 2	柳源次郎
8	100.0	75	小	柳兵助	8	115.96	417.45	同 17	金子政吉
9	100.0	75	小	佃宇右衛門	9	115.18	414.64	同	金子政吉
10	80.0	65	小	澤田赤次郎	10	92.61	333.39	同	金子政吉
11	64.0	64	小	渡辺福太郎	26	11	27.20	同	金子政吉
12	64.0	64	小	神戸善右衛門	25	12	65.78	同	金子政吉
13	64.0	64	小	柳岩太郎	24	13	66.78	同	金子政吉
14	64.0	64	小	神戸米吉	23	14	69.30	松屋町2-7	菊池清次
15	64.0	64	小	柳兵助	22	15	160.55	佃島5	吉田半次郎
16	64.0	64	小	神戸善右衛門	21	16	74.58	南新堀町2-6	福井新政吉
17	30.0	30	小	神戸善右衛門	17	70.45	253.62	同 17	金子政吉
18	40.0	35	小	加藤駒太郎	18	70.24	70.24	同 2	柳源次郎
19	32.0	25	小	加藤駒太郎	19	22.40	80.64	新湊町1-15	尾崎喜三郎
20	64.0	60	小	柳兵助	20	45.36	163.29	同 17	金子政吉
21	64.0	48	小	佃宇右衛門	21	71.56	257.61	同 15	白井興吉
22	64.0	50	小	森幸右衛門	22	68.53	246.70	同 2	柳源次郎
23	144.0	100	小	森幸右衛門	23	74.82	269.35	同 17	金子政吉
24	64.0	55	小	神戸善右衛門	24	79.33	285.58	同	金子政吉
25	64.0	50	小	金子作次郎	25	81.86	294.69	同	金子政吉
26	64.0	50	小	柳岩太郎	26	44.85	280.26	新湊町1-15	尾崎喜三郎
27	24.0	15	小	柳岩太郎					
28	64.0	90	小	神戸善右衛門	28	43.78	157.60	佃島28	加藤忠三郎
29	64.0	65	小	神戸善右衛門	28・2	60.73	218.62	同	外2名
					29	75.03	270.10	同 15	同
					30	75.94	273.38	同	白井興吉
30	64.0	50	小	伊東仁左衛門	31	77.88	280.36	日本橋区新右衛門1	水谷鷹之助
31	64.0	48	小	佃宇右衛門	32	71.54	257.54	同 17	金子政吉
32	64.0	75	小	神戸善右衛門	33	73.52	264.67	同 15	白井興太郎
33	64.0	48	小	佃宇右衛門	34	72.66	261.57	同 17	金子政吉
34	56.0	73	小	折原喜平次	35	68.67	247.21	同 31	伊東仁左衛門
35	56.0	70	小	水谷金藏	36	72.16	259.77	同 35	折原初太郎
36	56.0	42	小	佃宇右衛門	37	71.52	257.47	同 17	金子政吉
37	56.0	57	小	神戸善右衛門	38	70.87	255.13	同 15	白井興太郎
38	56.0	80	小	細川重右衛門	39	70.22	252.79	同 35	折原初太郎
39	56.0	42	小	佃宇右衛門	40	69.57	250.45	同 17	金子政吉
40	56.0	42	小	佃宇右衛門	41	68.93	248.14	同	同
41	64.0	80	小	水谷金藏	42	80.36	289.29	同 41	同
42	28.0	50	小	見市金太郎					三浦吉兵衛
43	57.0	48	小	柳兵助	43	36.86	123.69	同 5	吉田半次郎
44	66.0	80	小	高橋市五郎	44	35.88	129.16	同 17	金子政吉
45	198.0	170	小	神戸善右衛門	45	66.41	239.07	同 2	柳源次郎
46	90.0	80	小	森幸右衛門	46	80.64	290.30	南新堀町2-6	福井新政吉
47	28.8	30	小	伊東仁左衛門	47	241.61	869.79	大堀町3	池田清一
					48	142.20	511.92	同 13	山口嘉一郎

昭和四年八月一日 大禮奉祝記念献納(唐獅子)

(十三) 唐獅子

大禮奉祝記念献納(唐獅子)

昭和四年八月一日

氏子 総代 氏子 総代

柳源次郎 中山卓二

伊東仁左衛門 吉岡平吉

野竹久次郎 柴崎浦

石島平太郎 黒岩貞重

中島信次郎 長谷川昌蔵

内田雅祐 中村松之助

同星

十一 日本謝祭市場との関り



神社内の唐獅子

石島平太郎

十 日本橋魚市場との関り

問屋と鑑札

内田 綱 市

中林 健 文 郎

中島 計 次 郎

梶谷 川 昌 齋

石島 平 太 助

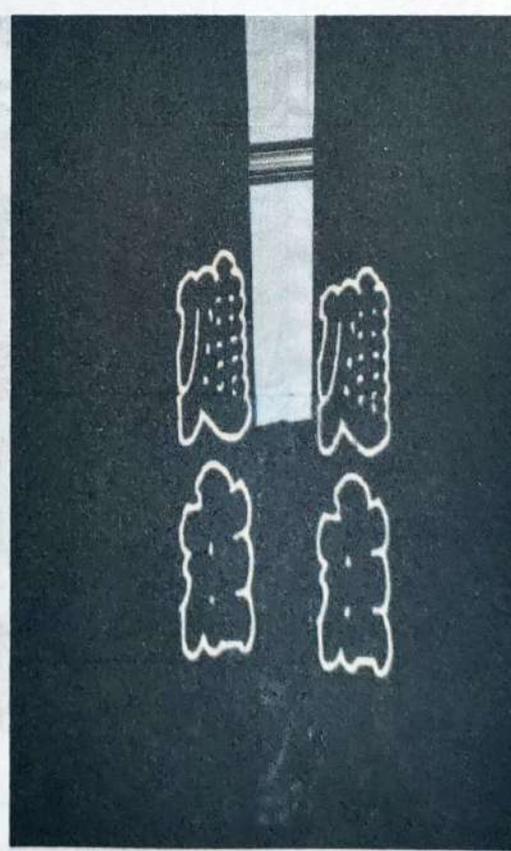
黒岩 貞 重



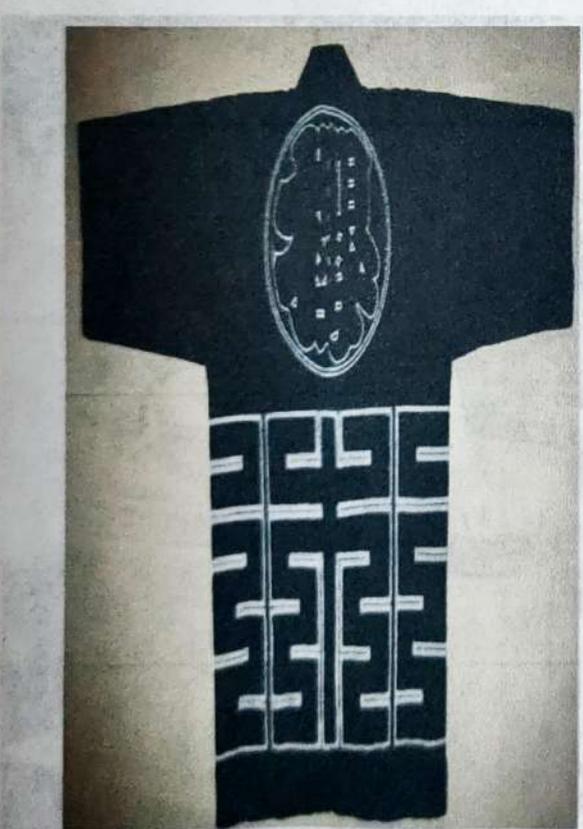
(十三) 問屋 佃庄

昭和初期 得意先に配布された半纏

おもて つくししょう



うら側



(一) 魚市場

慶長十七年伏見にて江戸に下るべき命をうけ、佃村より始めて漁師達が江戸に来て、小石川の安藤邸に住居を構えたと見るのが先つ似て至当であろう。小石川に網干坂と云う地名が残っている理由もこの点より領ける事である。只此所に三つの問題点となるのは、佃村の漁師達は、その後、寛永七年日本橋の小網町辺及び石川島へ移転して(寛永三年に石川八左衛門重次が石川島を拝領したので氏所に漁民が住居せんものならん)漁業に従事するかたわら、所謂魚市場を開いたと云われる点であるが「日本橋魚市場沿革記要」上巻には、天正十八年説をとり幕府に供した残りの魚を市中に販売していたが、同業者が増加して来たので「慶長の頃に至り、森九左衛門等、其幕府え納せし残余の魚類を引き受けて、これを販売するに便益を謀りて、売場を日本橋本小田原町に開設」しこれが魚市場となったたのであるとしている。

もし、この説を至当とするなら慶長十七年に始めて江戸に下つたと云う、佃村の記録に疑問が生ずるのであるが、更に問題になるのは、慶長十四年江戸に来朝した、「スペイン人ドン・ロドリゴ」の日本見聞録中に江戸市中の状況を叙して、魚市場の盛況を述べている点である。すなわち、彼らは「又魚市場と云う一区あり奇異なるを似て、予は特にこれを見物する為案内せられんが同所には海と川との各種の魚の鮮しきと干したる塩漬けにしたるとあり、又、数個の水を満たした大釜に生魚多数あり、買う人の望みとまかせ、これを買うべし。而して魚を売る者多きが故に街路に出て、時に依り又必要に応じてこれを売買なり」と記しているが、この市場がもし、日本橋の魚市場だとすると、慶長十七年説に疑問が生ずる。ただし、佃島記録が慶長十七年と記している以上、それ以前に魚師達が江戸え下つて来ていたと考えられる。(おそらく、ロドリゴノ見た市場が日本橋の魚市場なら、未だ魚市の時代で、市場とは云えない時代

であつたらう)ただし、魚市場についても芝浦・金杉の漁業者は古くより居住し北條氏時代より漁業していたと云われ是等の漁人が市場を開いていた事は『芝浦漁業起立』に『慶長六丑年本芝村・金杉村東海道往還筋に相成ひ以後、両村とも町名を唱、獵師共取場ひ魚類を往還にて市を立、商致し』とあるから、日本橋魚市場開設以前に芝に魚市があつた事は察せられる。

尚、ここに特記すべきは佃島の獵師が日本橋魚市場開設に功績があつたと伝えられている事で、前述の通り魚市の創始当時には關係がないとしても、これを一大市場として獵師達を結成して漁獲物を市場で売る常設的組織を作りあげたのは佃の漁師達が大いに興かつて力あつたのであつて魚市場沿革紀要にも日々得た魚類のうち幕府の膳所に奉つた、其の余の獲物を繁華の中心でよく人の集まる、日本橋の傍で売っていたが次第に漁船の数も増加し漁業も次第に発展して来たので、孫右衛門の弟(一説に二男)森九左衛門が発意して、これまでに、魚市

場を正式に開くことを幕府に願ひ出て、是が許可を得めて日本橋魚市場が開かれたとある。

これが、魚市場の正式に開かれた權興であつて、かくて九左衛門は本国の名により佃屋と号し、又孫右衛門支配地のうち、佃村のつづき大和田村から出たものは大和田屋と稱した。江戸時代に於ける魚市場問屋の名にも此の両屋号をとへる家の多いのは皆これから出たものだと云われている。

徳川幕府と機縁を作つた、名主孫右衛門佃島初代名主としての佃島の基礎を作つた弟忠兵衛、江戸魚市場の創始者たる弟九左衛門等の功績は佃島の祖として今尚島民欽慕されている。

魚市場の問屋はこれ等佃島の漁師中の商をあるものによつて、營業されたのであるがこれについては、本小田原・本船町魚問屋の由緒書によれば。

其節(江戸移住当時)より唯今に至り本小田原町組當時問屋仕罷在候

孫右衛門二男 森 九左衛門

右同断 御屋敷方御肴相納渡世仕罷在候

佃屋九郎兵衛 森与市右衛門・同作兵衛

右同断 当問屋仕罷在候

大和田与市右衛門・井上与市右衛門

とあつて、このうち佃島漁師と仕入れ問屋九左衛門との関係については記録に私共、先祖攝津佃村御供仕、御菜御用御成先御用相謹・御由緒を似、慶長年中御当地にて魚獵御免之場所御證文惣漁師共頂載仕名主預り所持仕罷在摂津に相残罷在 孫右衛門・與次兵衛・弥惣右衛門本小田原町にて三人待合に出店を仕問屋株を相立、佃屋九左衛門と申名前にて佃島漁獵仕入仕荷物相送り渡世仕候。

とあつてその本小田原町への出店が佃島漁業の商業的方面への発展の一つの方策であつたことがわかる。このほかにも、勿論佃の者で魚問屋を開いていた者は数多くあるが九左衛門の店の特殊なるなる点は、仕入れ

(二) 佃島名主

江戸の名主は、その町政の上に於いて一般江戸市民と最も関係の深い者である、名主は普通古来よりの由緒によつて四種類に区分される。第一は草創名主で、祖先がその町屋一帯を開拓し、以来伝統的に名主役をついで来たものを云う、天正十八年家康入国以前より住居していたものと、家康の入国に際して共に移住し来たものを含んでいゝる。享保の調査では二十九人で、この草創名主は名主中で一番権威のあつたものである。佃島の名主この佃島填築後は孫右衛門の弟忠兵衛が同島の名主を勤め、孫右衛門は本国佃村に帰り、年々出府したと伝わっている。

名主忠兵衛は之より六代目に至るまでは佃忠兵衛と称していたが、七代目以後は本国森家から入家して相続し森姓に改め以後代々森幸右衛門と称した。

名主の各町支配関係の内(佃島名
に關係あるだけ)

町名	佃島	享保十四年	佃	忠兵衛
		寛保二年	佃	忠兵衛
		宝暦八年	佃	忠兵衛
		文化十五年	森清右衛門	
		文政九年	森清右衛門	
		弘化二年	森清右衛門	
船松町一丁目・二丁目		享保十四年	佃	忠兵衛
		寛保二年	佃	忠兵衛
		宝暦八年	佃	忠兵衛
		文化十五年	森清右衛門	
		文政九年	森清右衛門	
		弘化二年	森清右衛門	

注) 湊町船松町一丁目は現在、三町目の一部、同二丁目は現明石町の一部で前出の通り、本国、森家から入家するまでは、佃島の名主が兼任していた。

十一 明治十三年東京商人録に見える四軒の魚問屋と六軒の魚仲買人

(一) 組合 魚問屋之部

京橋区

- 佃ノ鷹町二十一番地神戸善右衛門(善金)
- 全 三十一番地 伊東仁左衛門(丸仁)
- 全 三十四番地 水谷金蔵 (金 蔵)
- 全 五番地 櫻木 庄八 (庄五郎)

(二) 魚仲買之部

京橋区

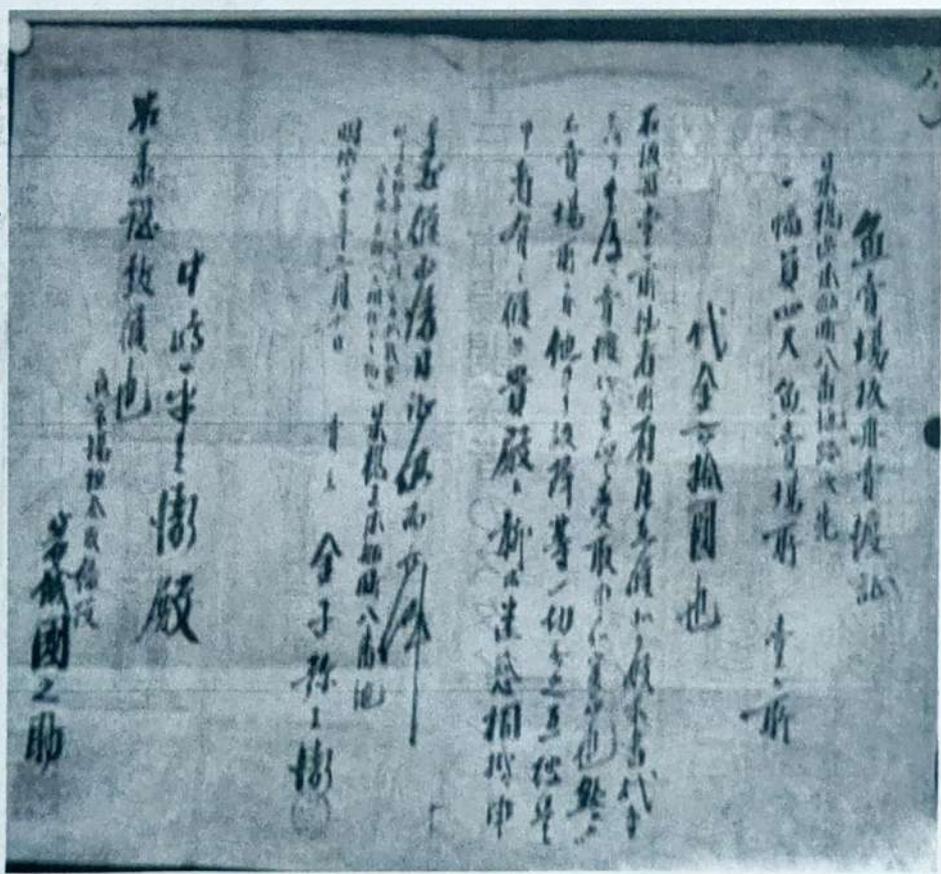
- 佃嶋東町廿三番地 渡邊熊太郎
 - 全 上町廿三番地 柳 岩太郎
 - 佃嶋十七番地 櫻木熊次郎
 - 佃嶋一番地 松江 常吉
 - 全 十七番地 木村重兵衛
 - 全 三十六番地 水口米次郎
- 明治十三年東京商人録より

十四 問屋營業權査定額

(個人所蔵) or



魚売場(板船壳渡証

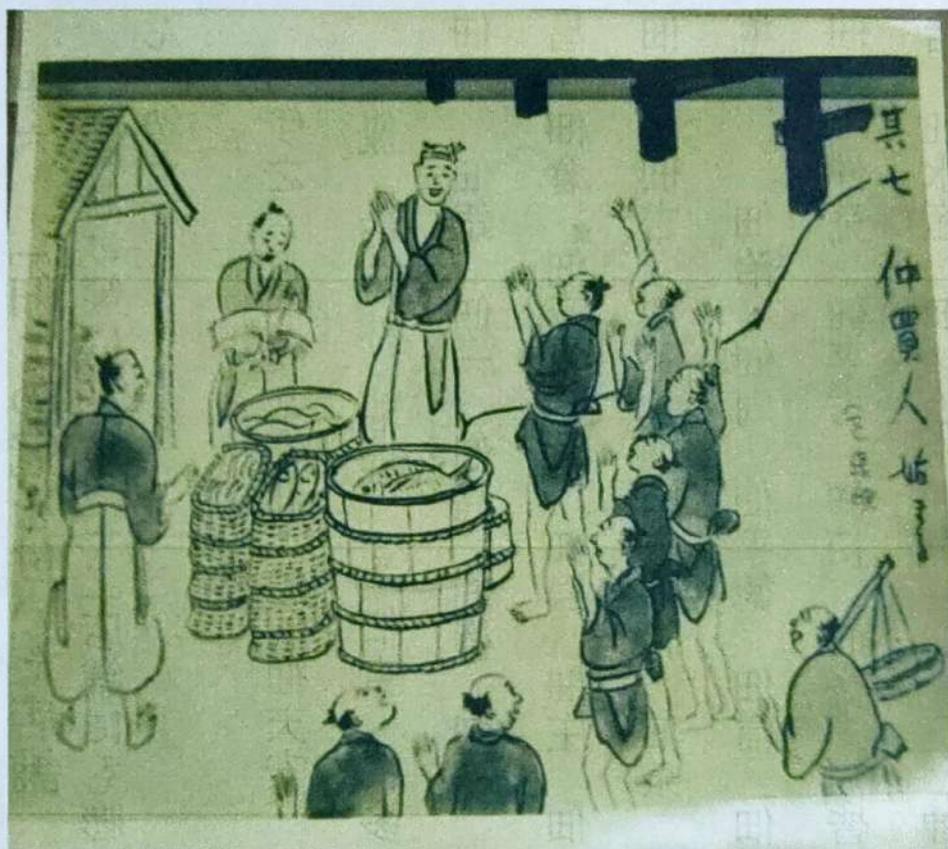


(独立法人水産総合研究センター所蔵)

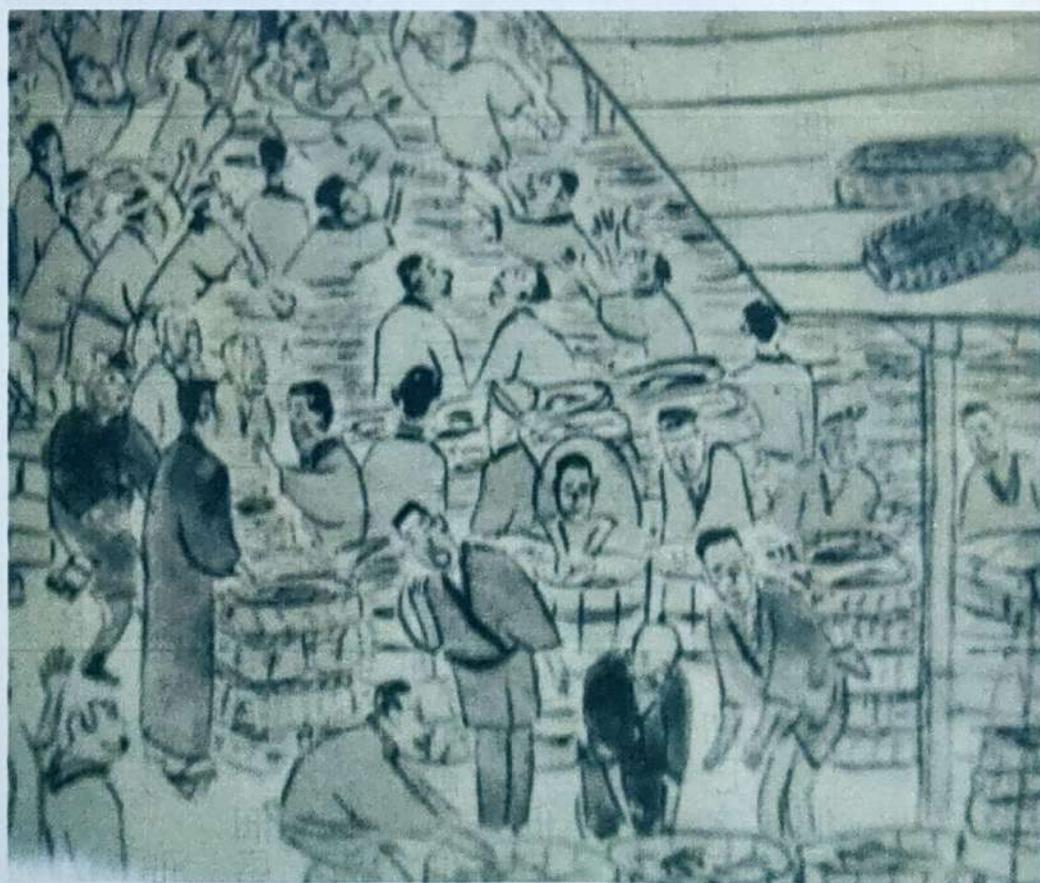
(独立法人

正保頃の日本橋市場

(独立法人水産総合研究センター所蔵)



十五 日本橋市場



其の七 中買人始まる (正保年代頃)

(独立法人水産総合研究センター所蔵)

十六 「佃」の冠を付いた店舗

(暖簾わけ等により一―二店舗にも膨らんだ勢力)

佃伊之 佃喜八 佃大忠 佃天安
 佃豊 佃小林 佃井 ④佃寅 佃多喜
 佃久 佃銀 佃一 佃亮 佃権 佃寛 佃
 昌 佃倉 佃彦 佃和 佃岩 佃庄 佃木
 佃赤 佃吉 佃堅 佃幸 佃藤 佃泉 佃
 龜新 佃治 佃周 佃平徳 佃信 佃友
 佃文 佃寛 佃平吉 佃初 佃皆 佃皆分
 店 佃水産 佃ノ松 佃輝 佃喜三 神戸
 佃栄 佃金 佃千代 佃源 齊藤佃勝 佃

丸長 佃伝 佃茂 佃熊 佃平秀 佃金市
 佃初分店 佃金支店 佃勝 佃静 佃辰
 佃与 佃芳 佃甚 佃康 佃佐 佃広
 佃林 佃七 佃鷹 佃鉄 佃長 佃勇 佃
 安 佃浅 佃寅 佃直 佃嘉 佃重 佃屋
 佃善 佃千代支店 佃万 佃勘 佃忠
 佃半 佃兼 佃三 佃屋 佃弥 佃鶴 佃
 晴 佃屋幸 佃五郎 佃寛杉 登志 佃広
 支店 佃半分店 目佃金 全佃金 佃ノ松
 支店 佃勝徳 佃二三 佃巳之 佃巳之支
 店 佃伊之支店 佃輝支店 佃善久 佃久
 支店 佃金支店 佃権支店

五洲の日本書

十七 「日本橋魚市場が壊滅」

大正12年9月1日午前11時58分4

6秒。突如、遠雷の轟きに似た地鳴りがした
と思うと、ドスン、ドスン、と大地が揺れだ
した。

東京にかつてない大震災に襲われ、日本橋
魚市場も壊滅状況、この時、魚河岸だけで四
百の尊い人命を喪った。

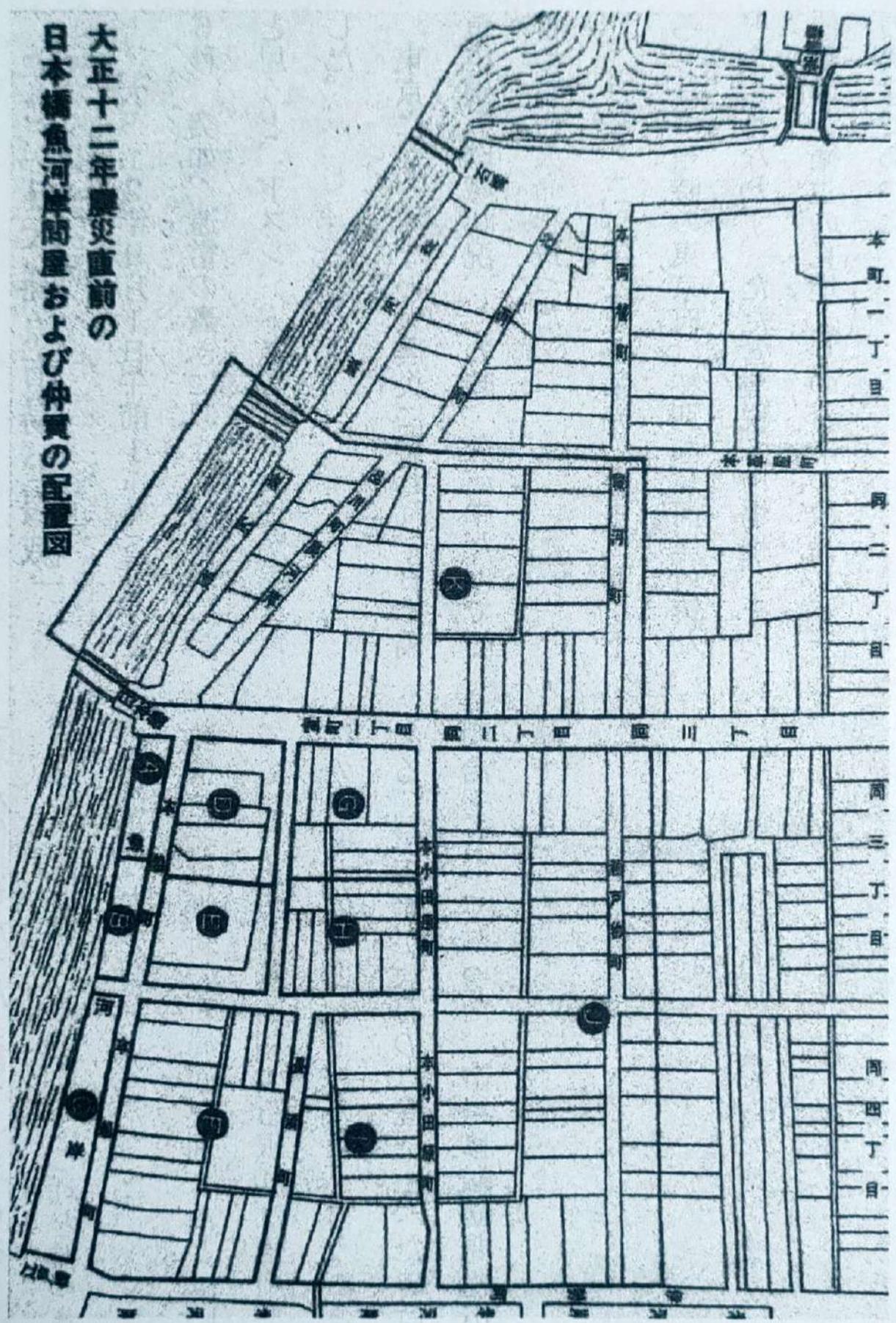
ここに、三百年に及ぶ栄光の歴史に幕を下
ろした。当時の東京府は特別な魚河岸対策な
ど全く行なわず、ただ営業税・市場税、その
他警備と衛生の見地よりの若干の取締りがそ
の実態であった。

言うなれば「やらざるばかり」の極めて

非常な仕打ちだったと言うことである。

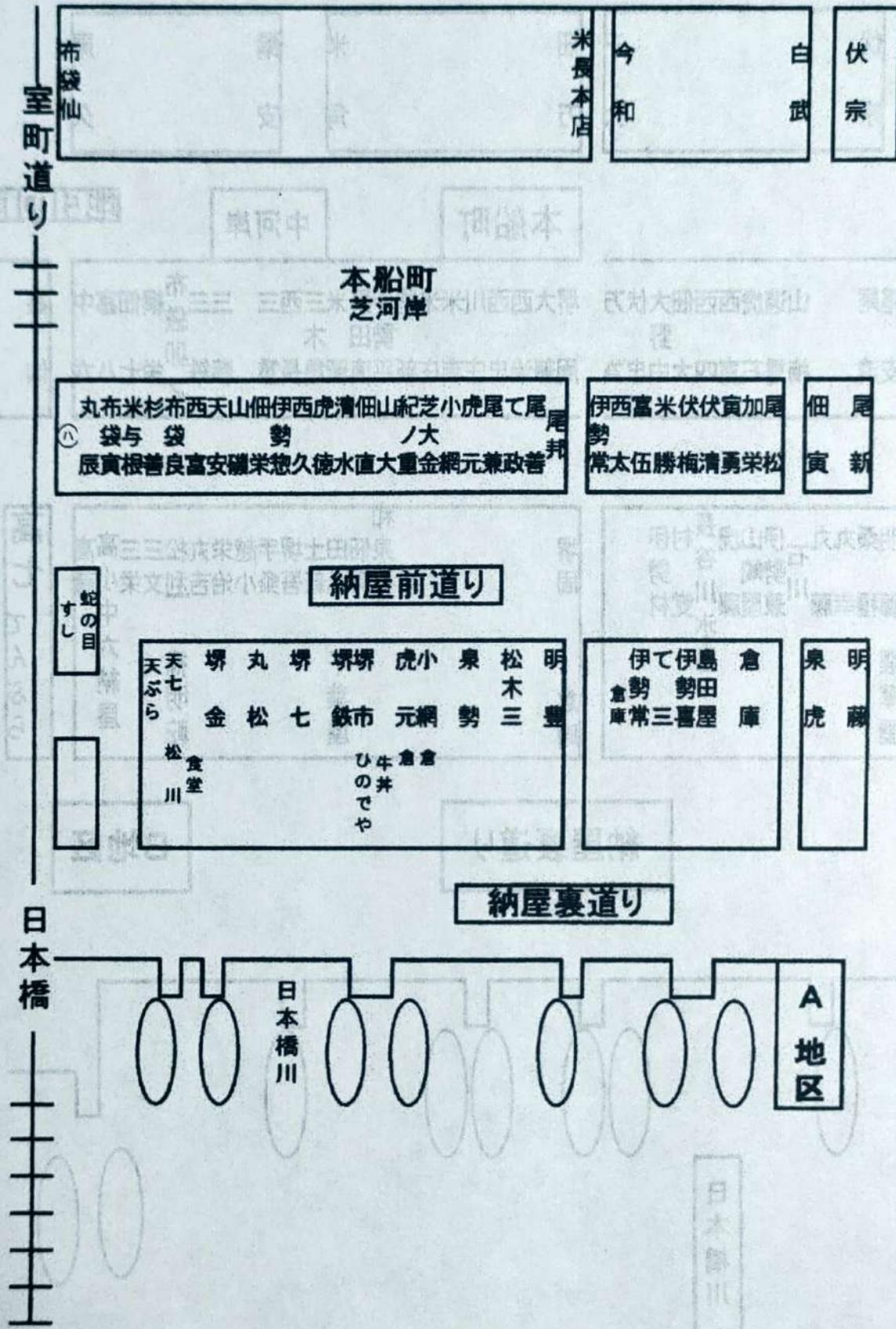
従って魚河岸の営業面にはこれと言った特
段の進歩など何ら見られなかった。

政情こそは維新の新局面を迎えたとはいっ
ても、こと魚河岸に関する限りは徳川三百
年の旧態が依然として続いたと言うことで
ある。魚河岸が政府の日程に上ったのは、
明治十七年であった。市場移転問題が端
緒である。



大正十二年震災直前の
日本橋魚河岸問屋および仲買の配置図

魚河岸百年より写す 問屋・仲買・その他配置図

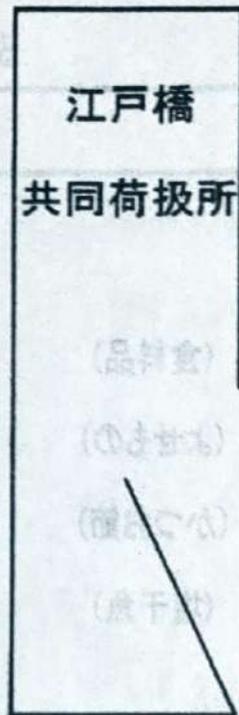
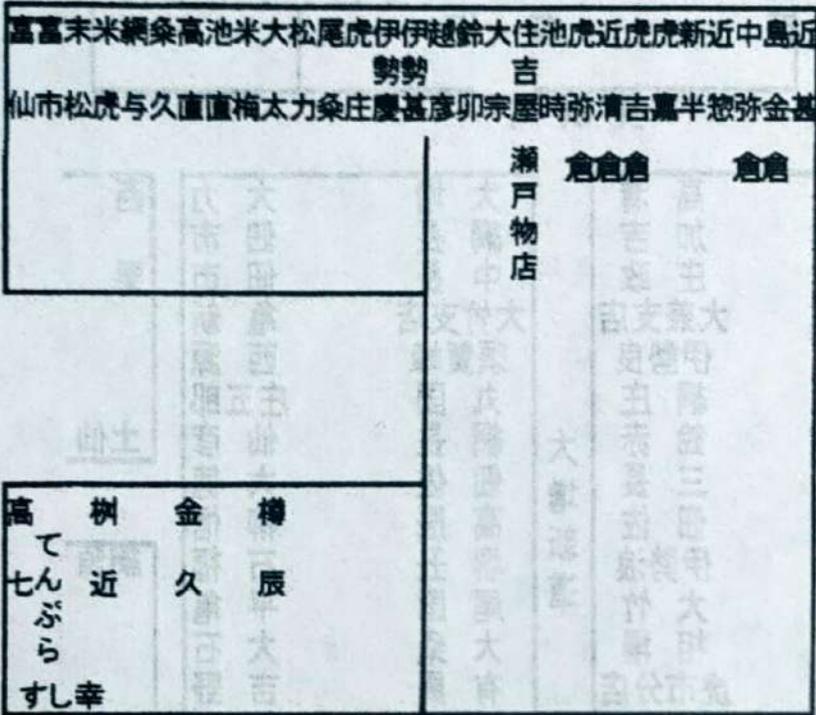


地引河岸

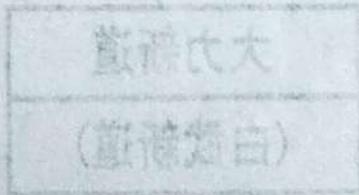
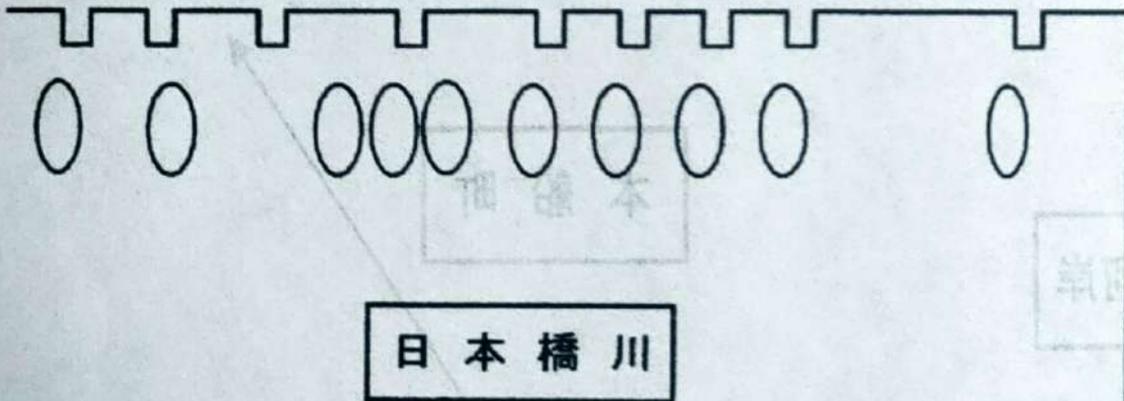
C地区

下河岸

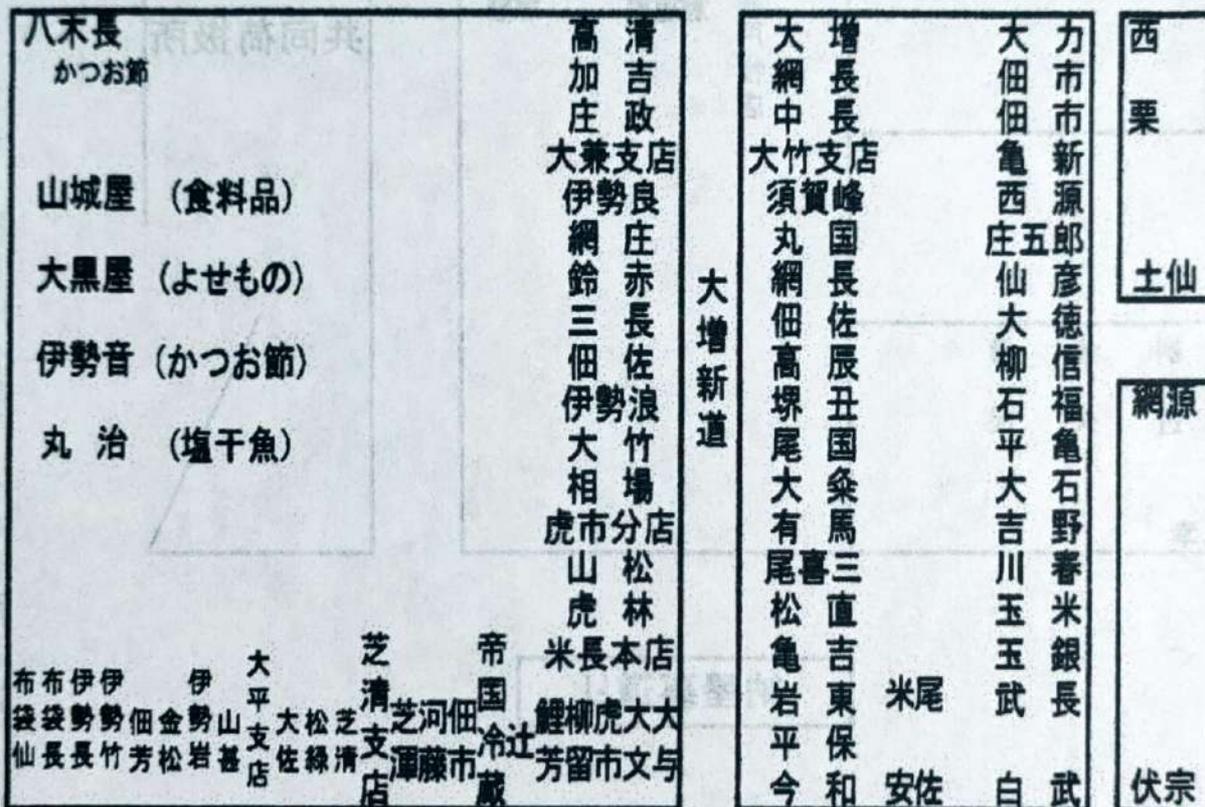
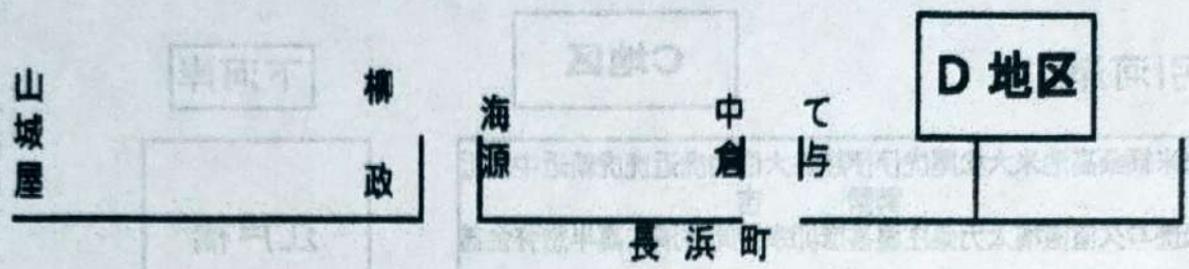
魚河岸百年より写す 問屋・仲買・その他配置図



納屋裏道り



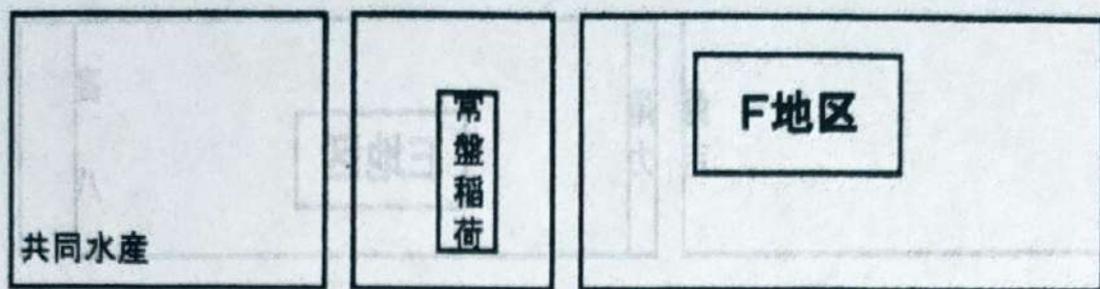
魚河岸百年より写す 問屋・仲買・その他配置図



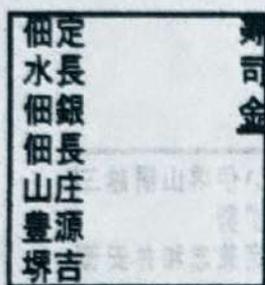
芝河岸

本船町

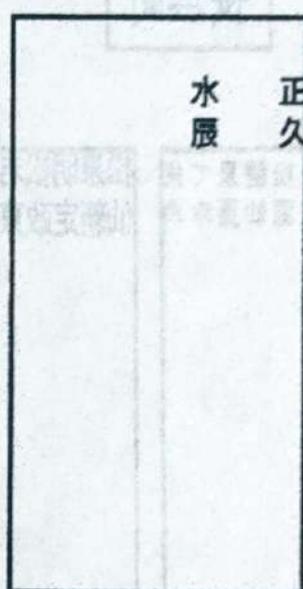
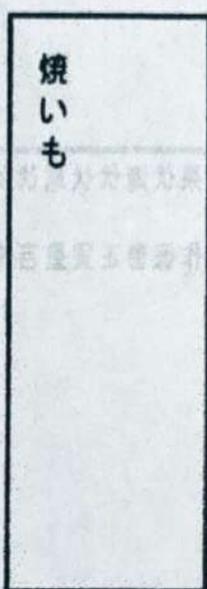
大力新道
(白武新道)



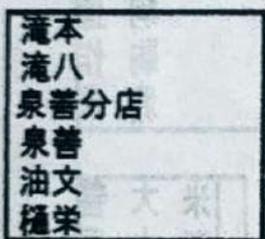
長浜町



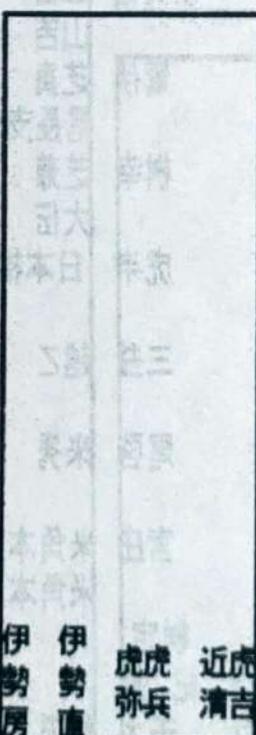
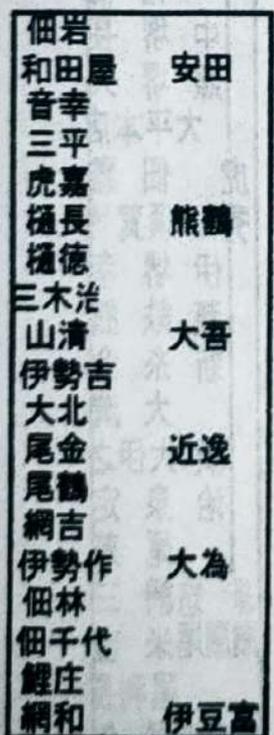
寿司金



伊勢町



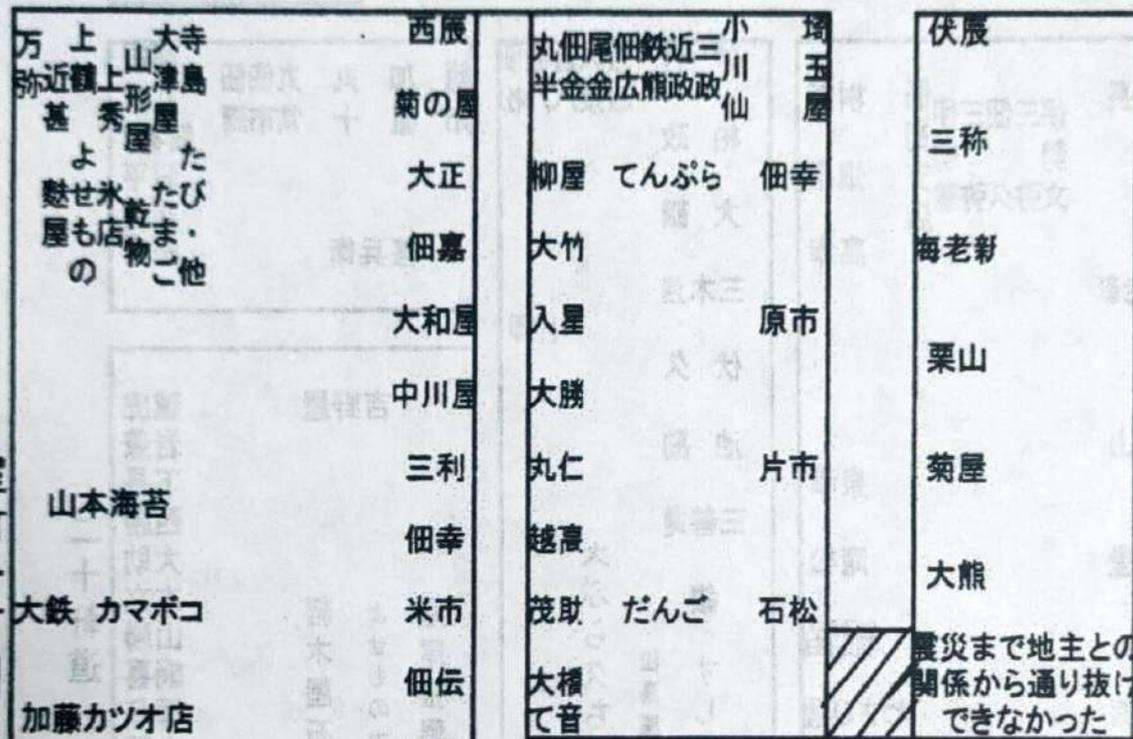
二十軒道



道町原田小本

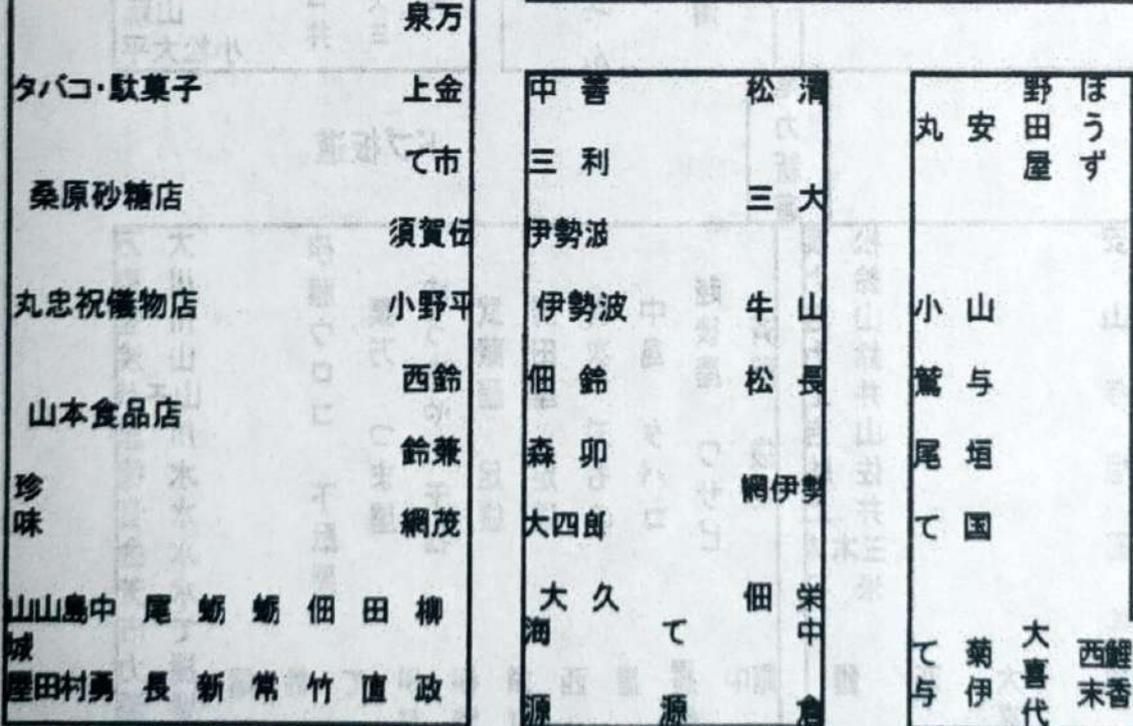
G地区

魚河岸百年より写す 問屋・仲買・その他配置図



震災まで地主との
関係から通り抜け
できなかった

室町一丁目



長浜町

魚河岸百年より写す 問屋・仲買・その他配置図

伊勢町

I 地区

アボロ

床屋

米竹清竹菊清川久浜忠新川久常治豊長仁栄
 水玉米玉杉米小松尾山松小伏佃山丸丸水大
 屋 蔵庫 増冷

安針町

二十軒道

兼安助
 大中山
 須賀甚
 共同水産
 八百金

常盤稻荷

魚荷扱
 豆腐屋
 小田原屋新海
 三和製木
 木村手打
 藤山錦村
 早川ゴム
 木貝実

長浜町

魚河岸百年より写す 問屋・仲買・その他配置図二十種並

本小田原町

木力店 八作三
青林八 小三
橋小 栖近山

伊勢町

ヒロ荷役

J地区

長勝六 豊寛虎松竹富友内初三徳野菊常徳徳源清久仙鶴龜三常浦店半豊屋多屋は屋半や
上佃大平 大佃加柳尾越越竹佃米伏坪山尾機宮片上佃柳海海薪伊三木物店半豊屋多屋は屋半や
深川 大木 濱物 佃大 土佐喜川川ゆ屋半や
三河屋 菊八 大和屋 日清軒

瀬戸物町

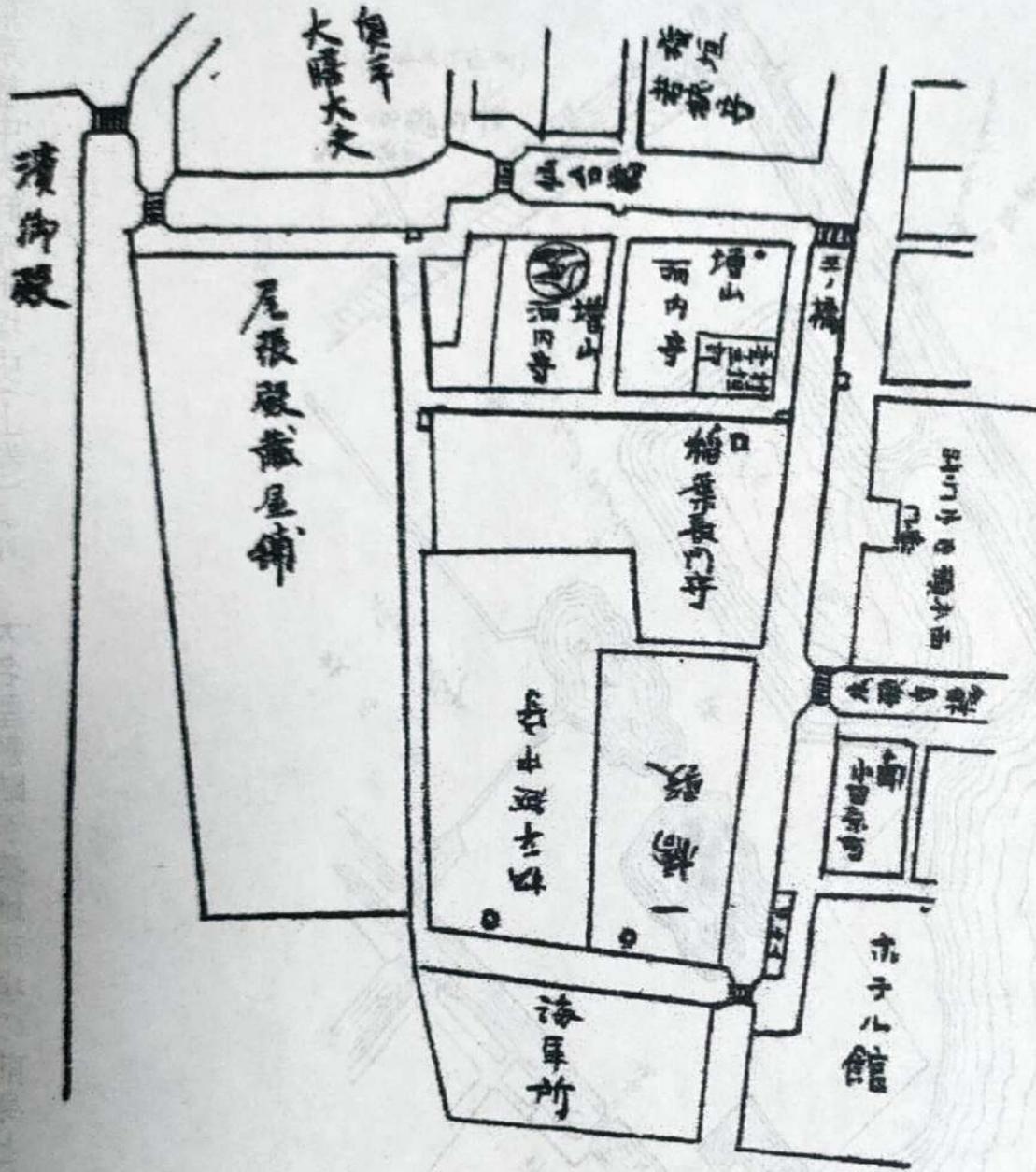
かつお節

高木時計店 時計台
いわしや薬局

木貝安 折箱屋
早川ビルブローカー
秋山絵はがき店
木村そば屋
三味線木屋
小田原屋漬物店
島津のり店
青梅堂絵はがき店
鳥釜料理店

室町電車道

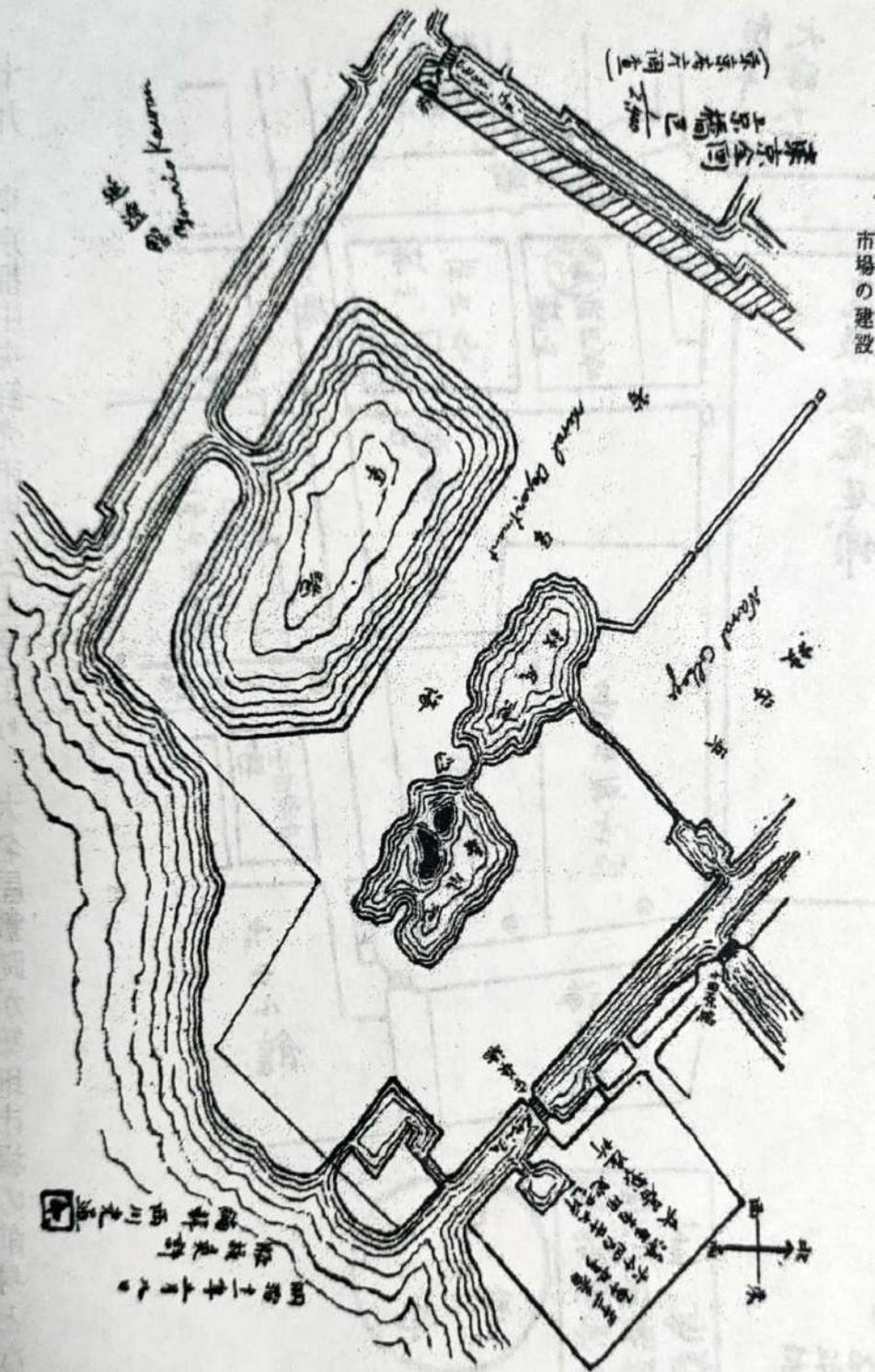
十九 東京都中央卸売市場史(上巻)より 大名屋敷跡が築地市場の前身となる



明治之築地改正再編
築地北洲南

東京都中央卸売市場史(上巻)より

東京都中央卸売市場史(上巻)より 大名屋敷跡が築地市場の前身となる



旧海軍省用地(築地本場敷地)

日本橋魚市場発祥の地

記念碑建立に寄せて

二十 日本橋魚河岸発祥の地

記念碑建立に寄せて

『日本橋魚市場発祥の地』記念碑建立に当たり、その栄光の伝統を受け継ぐ築地魚川岸会として、つささか往時の日本橋魚川岸に思いを致し、もって記念碑建立の意義を顕彰したいと思でした記録によれば、その濫觴は、遠く天正十八年にさかのぼり、家康公が関東封ぜられた砌り、摂津の国西成郡佃、大和田両村の名主森孫右衛門以下

漁夫三十余命を従えて入府した時点がその始まりとされています。

この事實は政治家としての家康公の非凡な才を覗かせた意味でも記憶されなければなりません。

すなわち、家康公は江戸入府のその時点において、よく漁場としての江戸湾の有望性に着目し狭義には幕府自らの御膳所の賄料として、また、広義には江戸市民の動物性タンパクの供給源として炯眼にも水産業開発に烈々の慨を燃やしていたということでもあります。

森孫右衛門以下随伴した三十余名の漁夫は安藤対馬守の下屋敷(浜町川岸)に居を賜わり、家康公より

塩水三合差す処予の勝手元の漁事たるべし

とのお墨付きを拝領し、江戸湾内角浜浦に漁を営んだとあります。

このように日本橋魚川岸は、その勃興が自然発生的、ありきたりのものでなく独自の由緒を誇る点をまず想起しなければなりません。

とはいっても、この頃はまだ『市』としての日本橋魚川岸は存在しませんでした。幕府の御膳所への納付を一義とした漁獲物がその残余を一般江戸市民向けの市販に許されたのは、慶長以降のことです。森一族の棟梁も、孫の九右衛門の世代へと移り、ここに至って日本橋魚川岸はいよいよ『市』への胚芽期を迎えることになったのであります。

武蔵の国豊島郡平川村が当時の地名でありました。魚川岸の発展過程を年代別に分類すれば、次の五段階に区分できます。

〔第一段階〕

慶長九年から寛永年間までの草創期であります。

漁獲物の仕向けが、幕府の御膳部一辺倒から一般市民供給をも併せて指向した転換期の意味で、この年代の胎動は特筆されな

ればなりません。

〔第二段階〕

寛永末期から慶安明暦を経た寛文までの約三十年間でありす。この時代は幕府のお膝元としての市街整理もようやく終わり、市民生活も日増しに安定度をみせた頃であります。日本橋魚川岸も江戸繁栄に伴って、驚ろくべき躍進期を迎えたことは語るまでもありません。

〔第三段階〕

延宝から天和、貞享、元禄、宝永、正徳、享保に至る約六十年間であります。

この時代はすべての面で、江戸の爛塾期でありました。魚川岸にとつては、いよいよ躍進にはずみをつけた、隆昌期とうこ

〔第四段階〕

寛保から延享、寛延、宝暦、明和、安永、天明寛政までの約六十年間があげられます。この時代は、魚問屋組合等の商機能が確立された、画期的時代で、いふなれば市場安定期といふことができます。

〔第五段階〕

寛政四年頃から慶応四年までの七十年間であり、文化、文政の奢侈がその反動を強め、天保の改革に代表される不況がこの時代であります。魚川岸も幾多の制約を余儀なくされ中でも幕府の御納屋制度は例をみない強権発動として、畏怖されました。この時期は安定の夢が破られた受難期といえます。

いごのことは多く語るまでもありません。維新の戦乱に耐ええた、日本橋魚川岸は、大正十二年九月一日午前十一時五十八分忌わしい関東大震災によって、三百年に及ぶ

栄光の歴史に幕を下ろし、卸売市場法に基づく、現在の法制下へと、その所在を變るに至ったのであります。

以上が日本橋魚川岸の沿革、概要であります。この魚川岸が江戸時代の文化ね経濟両面に果した功績を見落とすことは許されません。

江戸時代は町人文化を中心とした、国民文化勃興の時代ともいわれています。五代將軍綱吉公の時代までは、大阪が町人文化の中心でありました。ところが、文化、文政に至り、この比重は果然江戸へと傾くことになりました。この背景には、魚川岸を軸とした、日本橋の繁栄があったからであります。日本橋を東西南北の里程の一里塚（慶長九年）に定めたところからも知られるごとく、幕府は日本橋をもつて、日本の中心としたのであります。

魚川岸がこの中心に立地したことは、先人の明として、高く評価されなければなりません。

市の立つ処には、当然多くの人々が寄り

集うことになります。現在のデパートの前身である白木屋(現東急)越後屋等が日本橋に着目したゆえんも、この魚川岸を媒体とする人の群れを幸便にしたものと推測できます。魚川岸。殷賑、をしまに伝える川柳に日に三箱華の上下へその下これは浅草の猿若三座と魚川岸と吉原花街の一日の稼ぎ高、金参千両を褒めそやしたものです。

文化の面でも、魚川岸は大きな足跡を残しました多くの粹人墨客がその風物をいまに伝えております。

日本橋袂もみえぬ賑いはみな筒袖のさかな売り人大名の立つる道具の日本橋槍をも入るる魚市のセリこのほか季節魚を主題にした俳句など、魚川岸にまつわる、詩、歌、散文は枚挙にいとまありありません。

天保四年、安藤広重の東海道五十三次はこの場合の典型といえます。天秤を肩にした方角師(魚の行商)威勢のよい房手振

のかつぐ盤台から躍動せんばかりの活きのよさで、尻尾をはね出している初松魚。大名行列とそのうしろに、クツキリ聳へる麗峰富士の山、このどれが欠けても、日本橋の絵にならないことを広重はいみじくも告白しています。

今回の記念碑建立は、吾等の祖先の功績を後世に伝え、もって先人の偉業を永久に顕彰せんがためにほかありません。

最後に趣旨に御賛同をいただきました会員の皆様に対しまして、心からなる謝意を表し、併せて市場人として、大いなる心の遺産と其の誇りをも分かち合うことを喜ぶものであります。以上
昭和五十五年三月十五日

魚川岸会々長

町山 清

建立実行委員長

関本 徳蔵

二十一

震災後魚市場芝浦の鮭 T12・9・末
(独立法人水産総合研究センター所蔵)



築地市場開始 T12・10

(独立法人水産総合研究センター所蔵)



佃島出身における、幕末・明治・大正・昭和・平成の間屋
仲卸業者の「記号・経営者」

	屋号	氏名	旧屋号・代表	取扱品目	備考
1	佃文	山縣 琢磨	長谷川文次	海老	長谷川憲太郎・武
2		網谷安五郎			
3	丸龍	下条 龍吉		海老	佃平
4	佃熊	山田 敏之	熊之助	海老	
5	大久	小林 久雄		海老	
6	浜長	小沢 貞夫	松之助・長吉・政吉	海老・特種	(長吉氏二代目大口協同組合理事長)
7	栗原	山本 コウ	山本鹿蔵	海老・特種	
8	水直	栗原 時正	栗原 道直	海老	
9	丸久	小林吉太郎	小林栄吉	(現佃煮販売)	
10	佃丸長	加藤常太郎	長八・喜三郎・弘	海老	(弘)中央魚類 6代目代表者
11	山勝	山本 勝昭	喜平治・松之助	まぐろ	
12	佃久支店	大塚 勝司	敬太郎	海老	野村久治郎
13	佃久	吉田 重信	金之助(佃半)出	海老	(喜代太郎)大田合水代表者
14	佃茂	中村 恵一		(現佃煮販売)	現在築地において営業
15	佃仙	高橋仙太郎		(元佃煮販売)	仙太郎(コマセ屋)
16	佃半	野竹久次郎	吉田新太郎	海老	関西に住まい
17	大熊	大野熊五郎		海老	
18	佃天安	宮田 仁	大和田三次郎	(現佃煮販売)	松之助(4代目)・仙太郎・安夫
19	佃長	森 健次	長次郎・磯吉	鮮魚	
20	源重	松江源重			
21	佃庄	櫻木 藤吉	庄五郎・庄八	市場問屋	なかま・11代継承
22	佃源	田中賢太郎	源右衛門・昭二郎	(現佃煮販売)	昭二(6代目)
23	大寅	細川 市郎	源次郎	問屋・なかま	
24	佃伊之	飯田 浩	伊之助・栄太郎	海老・特種	
25	佃伊之分店	飯田喜三郎		海老・特種	
26	佃喜八	飯田 信夫	林之助・喜三郎・初太郎		たじま
27	佃輝	山口 輝雄	庭次郎	まぐろ	自宅に水槽を
28	丸国	金子 公一	国松・新太郎(長男)	海老	(佃丸長の丸をもらう)
29	丸作	金子作次郎	国松(次男)	海老	
30	丸敏	金子 敏夫	国松(三男)	海老	
31	善金	神戸 範雄	(神戸)熊吉・勝蔵	海老・特種	(屋号神戸から善金に変更)
32	神勝	神戸 信男	健司	海老・特種	
33	庄政	伊東源太郎		海老・特種	
34	庄熊	増見庄五郎		海老	日本橋時代
35	山幸	秋山 幸一	秋山幸治郎(鯉音)	海老・特種	
36	なかま	細川 貞雄	重右衛門	問屋・なかま	
37	佃巳之	高瀬 政一		特種	
38	佃巳之支店	高瀬久次郎	末男・好昭	特種	
39	佃寅	高橋 輝夫	喜三郎・寅吉・金三郎	海老・特種	金三郎(ペンネーム石井きんざ) 初代半四郎(コマセ)
40	鈴一	桜木 文雄	(鈴正) 正雄	海老	(鈴正)から鈴一に変更長次郎)

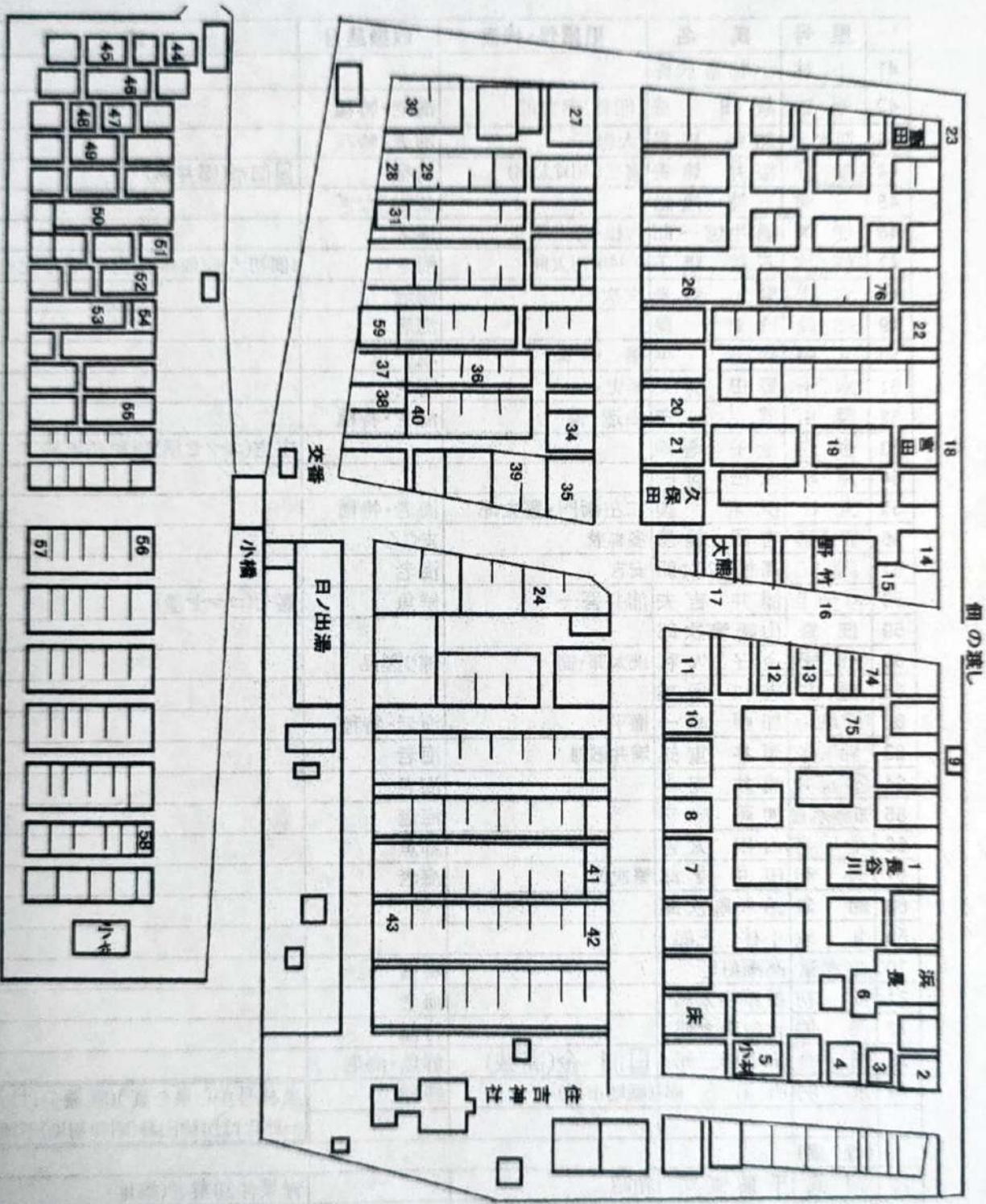
二十二
これからのページ・82・83・84はこの誌の最も残したいページ

	屋号	氏名	旧屋号・代表	取扱品目	備考
41	小林	小林富次郎			
42	飯田	飯田 豊	(佃林)赤太郎	海老・特種	
43	佃大忠	加藤 忠男	(大忠)	海老・特種	
44	佃井	桜井 建夫	富三郎(国太郎)	特種	目佃市(櫻井殿)
45	三浦	三浦 福松		淡水うなぎ	
46	佃信	酒井信一郎	吉松・芳太郎	海老	
47	佃林	石居 陽子	(佃初)初太郎	海老	(佃初)から(佃林)に変更・喜平次・折原義三
48	水米	鷺山 弘光	文次郎	海老	
49	佃豊	狩野 豊		海老	
50	丸禎	船倉 平	禎二・一純	塩干魚	
51	水十	野田 秀夫	隆史	海老	
52	原由	原 守	由造・肇	海老・特種	
53	金庄	金子 増雄			庄吉(コマセ屋)昭和40年終了
54	原政	原田 義政			
55	丸仁	伊東 護	仁左衛門・豊太郎	海老・特種	
56	佃多喜	吉岡 義昌	多喜兼	まぐろ	
57	高安	高橋惣次郎	安吉	海老	
58	ⓧ佃吉	浦井 吉夫	浦井吾一	鮮魚	嘉七(コマセ屋)
59	佃繁	山崎繁次郎			
60	佃権	金子 久利	銑太郎・喬一	練り製品	
61	樋佐	志和 辰雄			
62	佃龜新	加藤 順一	権平	海老・特種	
63	鈴重	浦井 重雄	浦井敏雄	海老	
64	⓪浦井	浦井 克昇		海老	
65	加藤水産	加藤 守宏		海老	
66	龜吉	山田 太吉		鮮魚	
67	佃赤	田中 俊郎	繁次郎	海老	
68	鈴龜	鈴木 亀次郎			
69	丸政	小林 三郎			
70	佃水産	高瀬好昭		特種	
71	佃初	折原初太郎		海老	
72	佃佐	竹内市太郎		特種	
73	佃金	田中勝三郎	目佃 金(高城)	鮮魚・海老	
74	泉明	明石 一郎	(築地市場)	特種	泉林号から泉を貰う(暖簾分け)大正12年 一郎氏は房総出身(昭和初期)平岡平左門出
(青果)					
75	河直	千葉直司	和昭		青果仲卸業者(築地)
76	大田達国	黒部 弘行			青果仲卸業者

佃島出身者

ここに、幕末・明治・大正・昭和・平成時代に渡り、日本橋・築地市場における、水産経営者等の住居を確認して置く。(ただし、青果関係の2社も含める)
屋号に網かけは平成21年現在営業中である。

次ページで住まいを特定しておく



租の渡し

間屋・仲買

住居場所

昭和20年以前

(一) 前ページの住居

田農商の祝辞魚市場組合頭取池田氏の答辞があつて式を閉じ正午食堂に入つて散会、それより引続いて鯛と鮪の売初めを行ひシヤン、シヤン芽出度しくの手うちがあつた。

朝日新聞 大正十二年十二月一日 掲載より写す

当時の市場入場者表年次

大正十三年

一ケ年 5, 395, 727

大正十四年

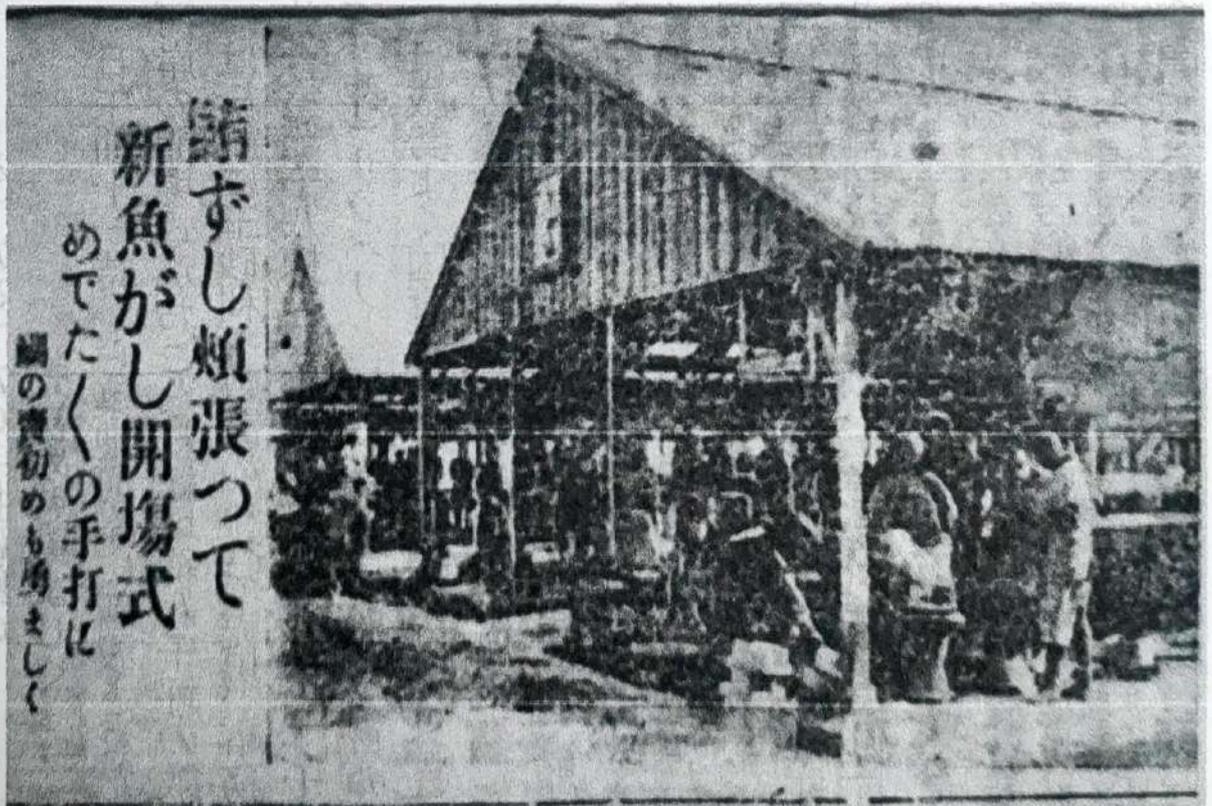
一ケ年 5, 736, 967

大正十五年

一ケ年 5, 908, 491

(魚立商人水産聯合博覧会ノシヤン一頁)

二十三 魚市場・卸分



請ずし煩張つて
新魚がし開場式

めでたくの手打に

鯛の賣初めも勇ましく

魚市場の入り口

二十四 魚市場の開場式

ここに、はじめて魚市場を東京市の統轄下に置くこととなつた訳で、市場の位となつた訳で、市場の位置は現在の中現在の中央卸売市場の東南隅の河岸に沿い面積約一万坪、バラック建てで一部焼け残りのレンガ造りて建物を使用し、使用し、これに棧橋冷蔵庫等を設備した問屋及び仲買業者が名義上（魚市場組合員）一千二百九十四名であつたが、売場所が一律に一人間口三尺奥行一間半であつた。

問屋專業は売場権をもつていないので、他人の名義を買つたり、狭いので、売場所を買つたり、借りたりすることが行わることが行われので、実際の營業者は組合員総数の八割程度だつた、とみられてゐる。内訳は、問屋專業十八人、問屋兼仲買人七百五十三人、仲買人專業五百二十三人であつた。汐待茶屋は、東支河ぞいにあり、百九十五軒を甲乙丙の三階級に分け、それによつて場所を割りり当てた。

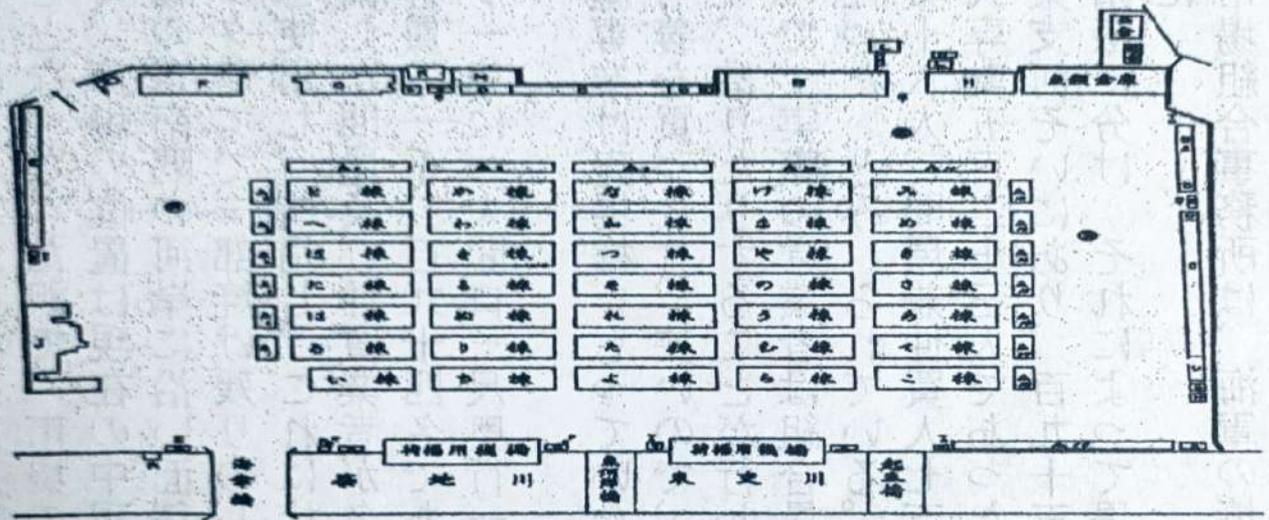
魚市場組合事務所は、海軍の焼残りの建物を修復して間に合わせた。売場は総て一

律の割当で不満を抱く者もあつたが、とにかく歳末繁忙期に入つたのでみんな我慢して、營業に専念した。

この頃の買出人は、魚商・料理店・飲食店・すし屋・そば屋・天ぷら屋、弁当屋、仕出屋、棒手商人など合わせて一日二万人から二万五千人、前橋、高崎、水戸などの遠方から買出しに来る者もみられた。附屬業者は前期汐待茶屋の他、小揚げ二百三十九人小揚げ二百三十九人、軽子六百二十三人、到着運送業者十八人、到着運送業者十八人、発送運送業者二十人地方出荷業者十四人、附屬商百九十九人であつた。

現在の海幸橋付近に建設された

東京市魚市場建物配置圖



- | | | | | | |
|-----------|--------|---|---------|---|--------|
| い棟—ふ棟 | 魚商店舖 | G | 組合事務所 | O | 板取売所 |
| A, —A, 11 | 買荷保管所 | H | 銀行其他 | P | 守衛見張所 |
| B, —B, | 第一第二食堂 | J | 市事務所 | Q | 巡査派出所 |
| C | 附属商店舖 | K | 小揚休所 | R | 郵便所 |
| D | 水販売所 | L | 倉庫 | S | 便所 |
| E | 作業所 | M | 車魚市場 | T | たばこ販売所 |
| F | 郵便局其他 | N | 無料買付保管所 | U | 自動車庫 |

東京魚市場株式会社
 資本金 三千八百〇四円
 社長 早良 監査 尾全
 副社長 長 三木
 事務 坂政
 成山 部長
 山崎 部長
 小幡 部長
 伊藤 部長
 高橋 部長
 山崎 部長
 高橋 部長
 軍一魚問屋
 会社が創立す

二一五

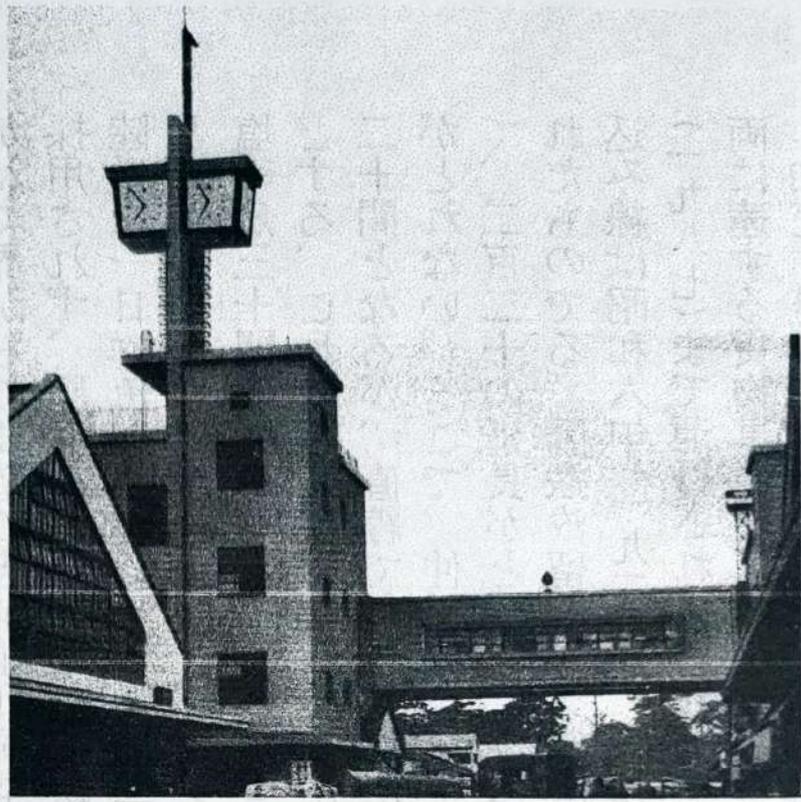
(独立法人水産総合研究センター所蔵)

二十六 市場の建物が半円を描くわけ

この市場建設には、昭和三年三月に着工、同四年五月竣工、同六年四月地鎮祭を竣工、この設計での番一の問題は仲買売場（現仲卸）で、かねて界からの要望の店舗並列縦型の配置は採用されず、扇形を採用したのは鉄道による陸送を一日鮮魚五百トン、塩干魚二百トン、と見込ん業で鮮魚百三十間のプラットホーム、塩干魚三十間のプラットホームを必要とする、これに、青果六十間を加えると二百二十間となるが、直線では、それだけの延長がとれない。そこで、仲買人売場を扇形にして、二百二十の延長がとれるように、設計されたものである。国鉄汐留から築地市場の引き込み線は昭和六年（一九三二）〜昭和六十二年（一九八七）まで運行され、最盛期は一日一五両に達する貨物車が通過した。

卸売り場の外側を旧国鉄（JR）の線路・内側に市電が市場内を





通称・時計台

(東京魚市場青年団会報より)

二十七 築地明石町と

外国人居留地

(一) 築地明石町

明石町の名の由来は対岸の佃を淡路島に見立てると、播磨の『明石』に見えるところからと云われている。明石町は明治維新後に旧明石町と十軒町・船松町二丁目の町と大名・旗本屋敷とで、形成されていた。船松町は弘化二年まで、佃島の名主が兼務していた。

(二) 外国人居留地

大名・旗本屋敷の築地は明治元年から一時、外国人居留地となり、明治三十二年頃廃止された。近くに、慶応義塾・立教大学等も創立され、また、病院も創立(聖路加)も。

二十八 戦禍を逃れた佃島

(一) 佃島

昭和二十年三月十日、東京大空襲、聖路加国際病院があるこにより、築地・明石町・月島・佃一帯は空襲による爆撃を逃れ（一説には米軍が病院屋上より爆撃地点を確認したとの話しがあった）このことから、明石町の対岸、月島・佃島が戦禍から逃れた。事実、筆者も母親から戦禍の話聞いていた。佃も戦禍から逃れたが、悲劇は終戦直後の六月、一枚の赤紙の様な物が舞い込み強制疎開の通知、佃のメインストリートが広くなっていますが、ここには、島民の住居が一棟総て撤去した為、現在の広さが維持されている。なを、もう一つの悲劇も次ページで、強制疎開は佃島五番地の一部・十八番地・二十九番地・四十四番地から五十八番地全部が撤去対象となり実施された。

(二) 聖路加国際病院

一八七四年築地、の外国人居留地に、イギリス

国教会長老派の宣教医師ヘンリー・フォールズが病院『健康社』を設立、後に「築地病院」と改称
フォールズはこの地で指紋捜査法を発見した。

一九〇二年フォールズ帰国して、後荒廃していた築地病院の建物を聖公会宣教医師ルドルク・トイスラーが買取、聖路加病院とする。（一九〇〇年明治三十三年トイスラーが佃島の佃煮屋を改装して診療所を開いた）「聖路加国際病院」と改称されたのは、一九一七年（大正六年）のことであった。（一八九九）明治三十二年北川千秋氏 投影より写す。



二十九 庄五郎こと

櫻木藤吉について

佃島に庄五郎ここに有り、佃島の中で、話しの端には、庄五郎の名前が出てきます。

前頁でも、記して於きましたが、佃島での幕末から明治時代にかけて、「様」を付けて呼ばれた三人のひとりで、人望厚く、島民から慕われて来た事が、現在においても見え隠れしております。

庄五郎家は、筆者の友人宅であり、過去帳の整理をする機会が有り、平成二十四年から数えて、三百十九年遡ることが出来た、しかし、寶永七年（一七一〇）佃島沽券絵図に、すでに、宇右衛門（佃右衛門）の家守を庄八（櫻木庄八）が実施している事も沽券図に記入されてをります。佃島 築島時代を遡り、名前は継承されてきて

いるが、庄八・庄五郎の祖先は、だれ「佃島江戸時代の任別帳・明治二年佃島身分帳」等が個人情報保護法の壁にあたり、見拝出来ず残念である」ただ、この本誌が完成後も、この部分は後世に託したい。

最後にもう一度拝見等について、御願ひ・相談を「ある方」を間に、ご相談致し、条件が付きましたが、長年の懸案事項が叶い、明治二年佃島戸籍簿については、拝見するまでに見聞できましたが92祖先は解らず残念である。

ただし、中央区郷土天文館に『江戸時代の人別帳』の収蔵品が実在します、この公開がいつなのか、庄五郎家（櫻木）は、佃屋庄八・庄五郎を代々継承してきた、土地は持たず、名主孫右門の近親者であろう、当時、近親者でも一番近い者で、宇右衛門氏は、名主忠兵衛が地主の二百坪の土地の家守を、当初の沽券絵図（一七一

○)年であったが、(一七四四)年には、この土地が宇右衛門氏の名前に変わった。その宇右衛門氏も佃姓を名のり、継承している。その一部に佃屋庄八・庄五郎の家屋を現在取得している。

庄五郎家は代々漁師であったが、人望・才覚等が、優れ、漁師の「なかま」の中心となり、早くから、日本橋魚市場に進出、明治十三年の日本橋魚市場商業登録簿に、「庄五郎」の名前が出てくる。

歴史を追って行くと「庄五郎」家に置いても、明治時代には第十一代目となり、佃島からも市場に出店する、以前は「庄五郎」で修行を重ね、市場に出店していった者が、多数いた様子、現在においても、佃島では、「庄五郎」は存在している様子だ。

明治・大正及び昭和の初期までは、幸運と商

運等に恵まれ、房州から、日々、活漁が我家の船着場から、生簀に入る姿は、それは活気が充ちた光景であった。(秀吉談)種類は、黒鯛・カレイ・ギンポ・穴子・カニ・アカ貝等で料理屋向けが多かった、年に一度は、盤台を新調して、盤台に「正」の焼印を押す時は、重石代わりに、子供が乗り、祭り騒ぎであった。

盤台は直径一メートルの物であった。「庄五郎」家の得意先は、湊町(テッキン楼)・歌舞伎座・弁松日比谷(松本楼)・橋善・あげだし・豊島園(常駐)・天金(池田弥三郎)実家、現在においても一流の老舗である。現在住居の「庄五郎」本家及び庄五郎末息子櫻木龍吉の住居は、前段でて来る、宇右衛門氏の敷内に住む、他の島民は、土地持ちが多数見られる中、「庄五郎」は土地を持たずじまいだったのが、不思議でない、代々(平成二十四年)において宇右衛門

様に使え、島民に対する人望等から土地を持たなかつた様子。

でも佃島では、「庄五郎」を前面に、ださせる機運「庄五郎」は偉大であつた。櫻木秀吉談より

しかし、佃島渡船場前の広場の土地、旧持ち主宇右衛門(継承)佃宇右衛門・久保田氏・の時代に(第二次世界大戦)の昭和二十年八月の終戦以前に、佃島の悲劇が襲い、『広場の出現』の是非があるが、この場所にいた方々が、佃島にかかわつた時、

佃島には、土蔵が二つ存在、其の中に住吉神社例大祭のヒーローの「竜・虎」の獅子頭も入っていた様子、時に、佃島の向う河岸からの火災からの火の粉を納めた、言い伝えから、その土蔵の中には、佃島の重要な古文書があつ

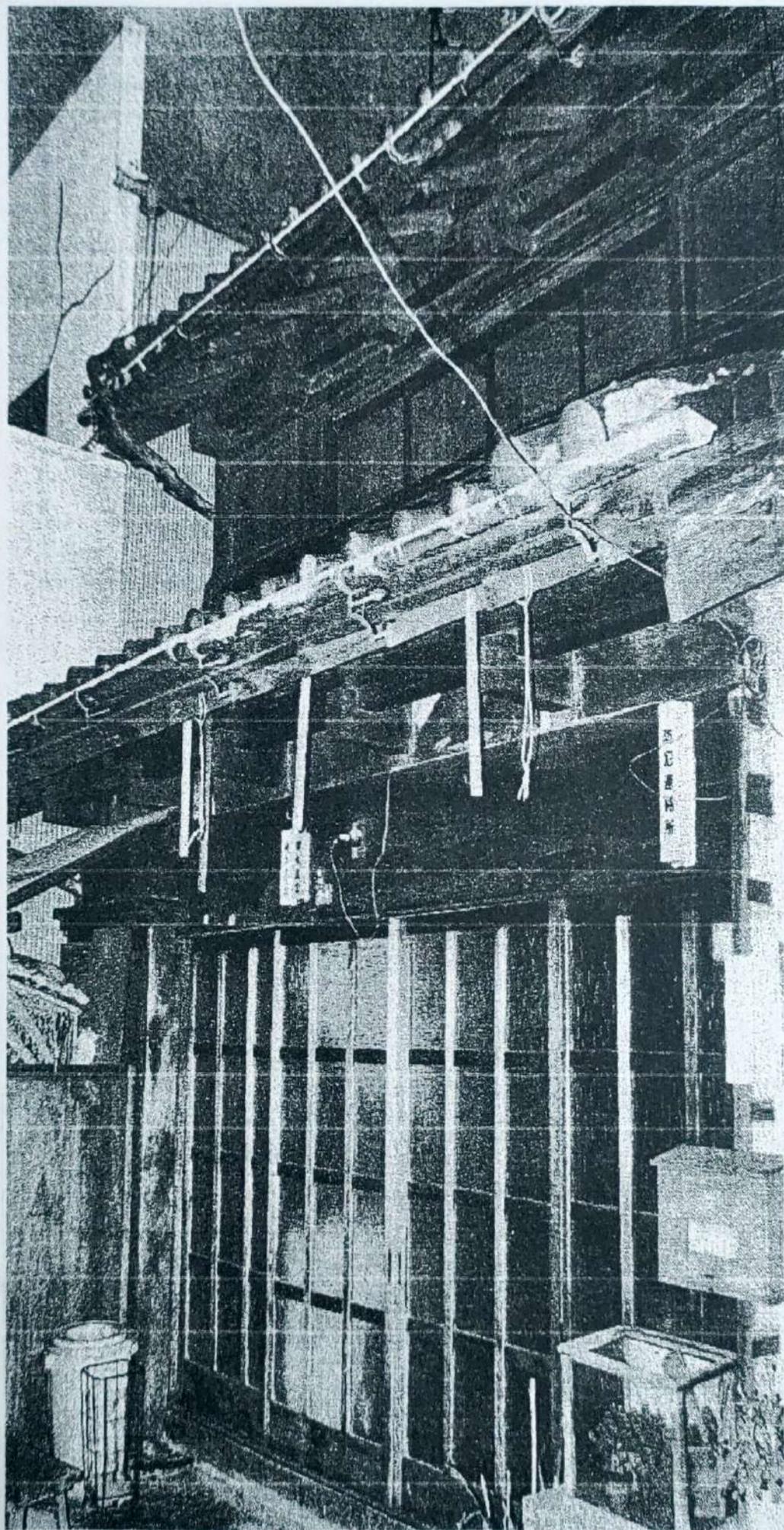
たのでは？

この物は今どこに、佃島の旧家に存在していた古文書等は分散、一部は当時の地主の方からの古文書の写しが、『佃久』号から、平成二十四年七月末日に、寄贈を戴きました。

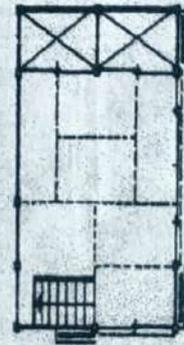
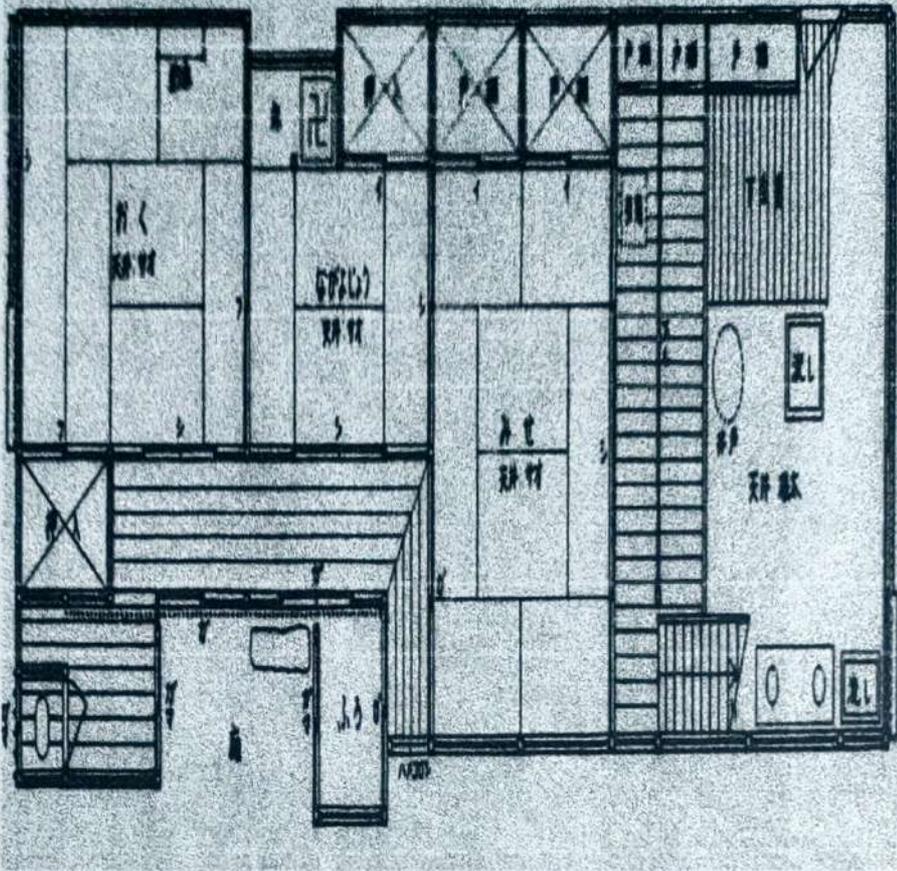
吉田喜代太郎氏健在時から古文書を拝見、筆者から、佃島門徒講に寄贈を願い出ておりました事が実現致しました。

寄贈項目等を記載する

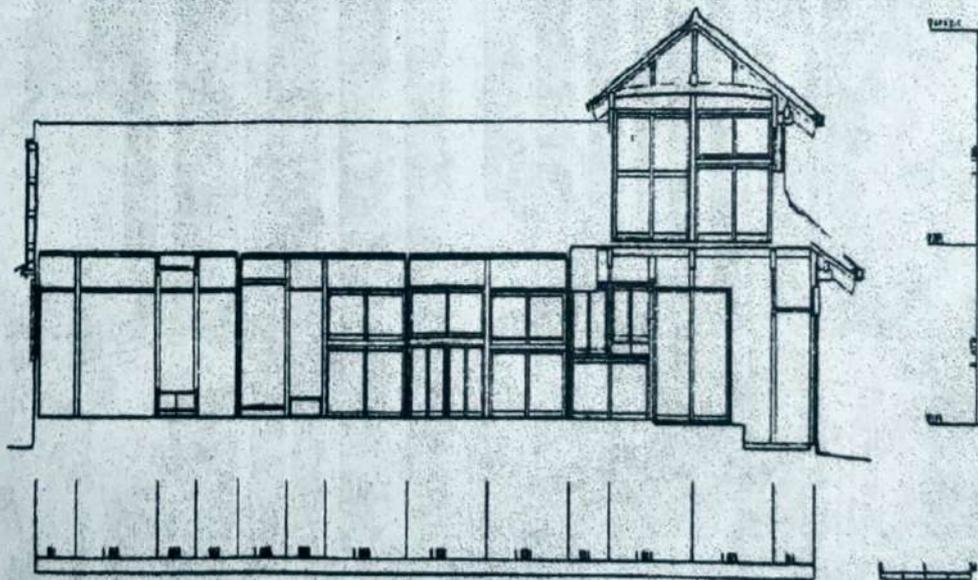
三十 櫻木家(庄五郎)当時の問屋(明治初期の建築物)(櫻木家)見取り図



三十一 昭和五十九年解体された(中央区文化財(七)建築より



2階



三十二 庄五郎の覚書

柳

徳川家康と佃島の関係は、天正十年六月家康京坂及泉堺を遊覧中たまたま本能寺之變に遭ひ夜に紛れ三河へ帰路の途次、神崎川を佃村の漁夫が家康主従を漁船を似て渡し佃村庄屋見市孫右衛門宅に休息し庭前の松の大木三本あるを見て森姓を与へたと云ふに始まり、天正十八年八月朔日家康江戸入国と共に孫右衛門一族六人及び漁夫三十余名江戸へ下り、安藤、石川邸内に居住し家康の食膳の御菜魚の献したり、慶長年間に至り孫右衛門弟九左衛門其余魚を日本橋辺に於て之れひさぎ今日の魚市場

の起因を作りたり、同十八年八月二日は之等の漁師に江戸周辺の海川に於て漁獵勝手足るべき特権を興えらへしたり、寛永年中に武家邸内に町人の居住を禁ぜらるに及び、荒川の下流千波の地願よりを賜り、正保元年二月之が填築せし故本国佃村の名を取り佃島と号し以来代々將軍の御菜漁を献する傍川狩御成之に漁獵を上覽に備つる事年久し、かかる古き歴史を有する我が佃島も今日昭和の御代に至るも何等変ることなき百間四方一小島なり、安永天明の頃に南沖干潟の地を埋立ることを願出たるも許可されざれし所、明治の聖代に東京市に依つて之れ

が実現さし月島、新佃島が填築成つて今日の繁栄を見るに至る。

今江戸時代を懐古し佃島漁業に間する記録等を見るに佃島漁業の中興の大恩人しも云うべき八代將軍吉宗公時代のもの多し、吉宗公は四代家綱公以來中絶せし川狩御成を復興し漁獵を上覧するばかりでなく、地引網めぐり網大六人引網等を新造し、佃島に之との御網新築して永く保存を命じ、又鯨船に隻を下附せらして遠く鎌倉へ鯉漁に行くを命じたり、深川佃町及小松町を漁師助成地として賜り、尚白魚網役の者に京橋東西の地を助成として下附

せらる等数々の記録多し、代々の將軍家川御成は引続き行いる然し時代の変遷に随ひ幕末の記録等は殆どなし、此他火災水害等による佃島の被害状況及宗教に関する住吉神社及西本願寺などの文献等古記録も佃島数回の火災に依つて焼失せられたるならし、今は僅に住吉神社家と森家記録等少数ある許なり、名物としての佃島の白魚は今日僅に中川に於て毎冬春の候に昔の名残を止るのみ、それも船火事の如しと言はれ奉行所より注意の御ふれが出てし篝火などその影さへなし、唯江戸名勝として北斎、広重其他数多の浮世絵師の筆になる錦絵は

今尚珍重せらし江戸時代の佃島は之等に於ても有名なり。それも歳月経るに従ひて郷土誌は段々失はれつつある現在、不肖浅学微才にも不抱、年久しく佃島に関する文献を書集めたるを、佃島起立三百年記念のためにと「江戸時代の佃島」と名づけ上下二巻に集成したり、尚後日同好の緒賢に依り、足らざるを追補せらるれば幸甚なり。

歳老ひて視力益々弱まり記くに非常し困難を感じ老眼鏡をかけ其上左手に虫眼鏡をかけて書く始末、宜敷判断せられんことを乞願ふ。正保紀元より三百年の八 本生 櫻木藤吉こと庄五郎 写す

三十三 明治二年佃島戸籍簿

明治二年現在 庄 八 三十歳

本籍地 佃島五番地 櫻木屋

明和六年(一七六九) 佃宇右衛門より

二十一坪を借地する

嫁 奈三 二十七歳

男子 庄之助 五歳

女子 水いと 二歳

母 加津 四十六歳

兼次郎

弟 庄五郎

やっかいもの三ノ助 五十二歳(葛飾郡猫実

出身)この部分は、長年、日参して、見聞しな

がらメモって作った「佃島戸籍簿」の文章で

ある。本人(櫻木龍吉)が確認にする事により。

(京橋図書館所蔵)

平成二十四年から数えて二五五年前の出来事。

三十四 櫻木庄五郎文書(一)・(二)

この、櫻木庄五郎文書の存在については、他の調査記録等から解っていたが、どこに所蔵されているのかがわからず、時間をついやした、たま々、水産関係の古文書が、中央水産研究所に存在することがわかり、「庄五郎」の子孫、櫻木龍吉氏をともない、現地におもむき拝見する。
むき拝見する。

この書籍は「庄五郎」こと櫻木藤吉(一八九〇〜一九五三)が佃島の歴史を後世に残しておきたい旨、填築三〇〇年記念(江戸時代之佃島上巻・下巻)筆写した、大学ノート二冊、こ

れを基に筆写したもので。
上・下巻二冊の筆写した。

「漁業制度資料」の内容は昭和二十四年〜二十九年度に行われた「漁業制度資料調査保存事業」によって収集されたものです。

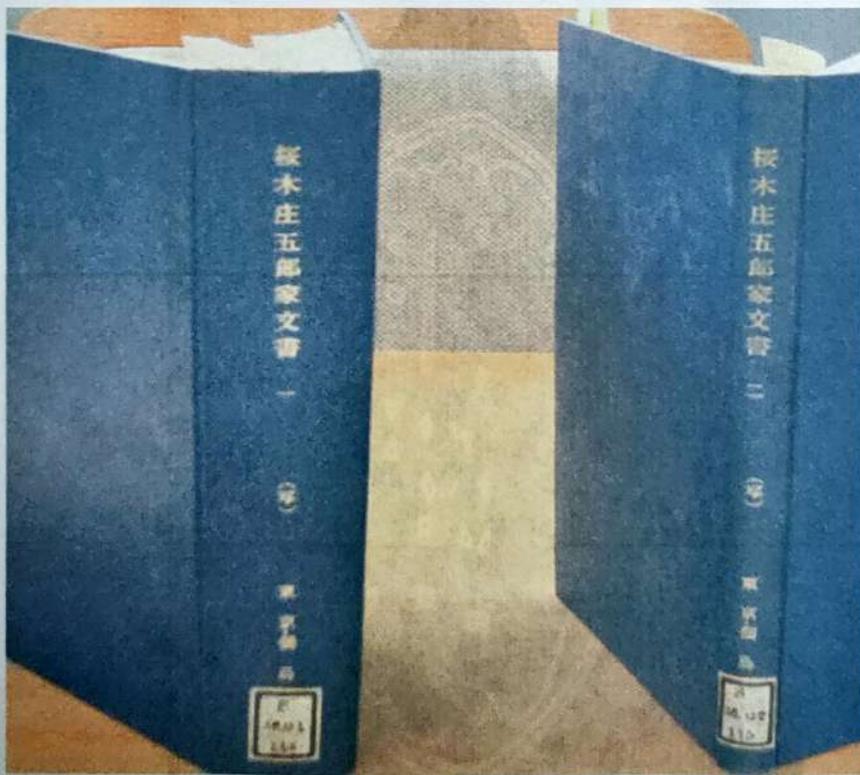
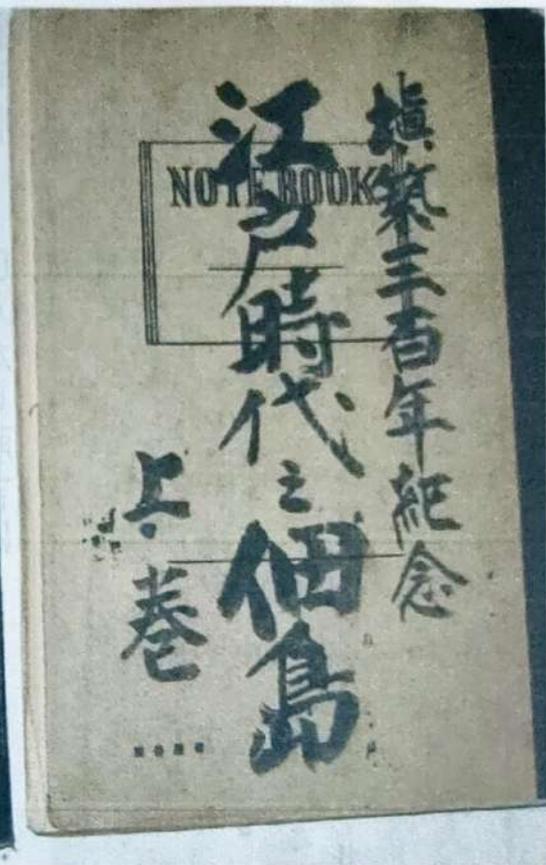
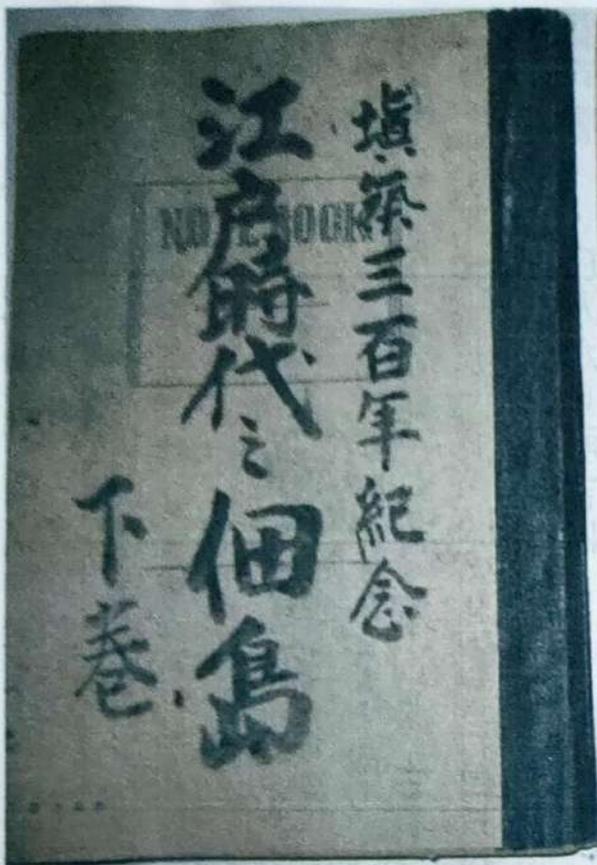
この事業は東京都中央区月島にあった、水産庁東海区水産研究所を根拠地とし、業務を受託した財団法人日本常民文化研究所所属の調査員が、全国漁業組合や漁業を営む旧家で資料を収集する方法で行われたものである。

文書の所在・独立法人水産総合研究センター
中央水産研究所 図書館
横浜市金沢区福浦二〜十二〜四

〇四五 七八八〜七六〇九

東京水産大学卒業

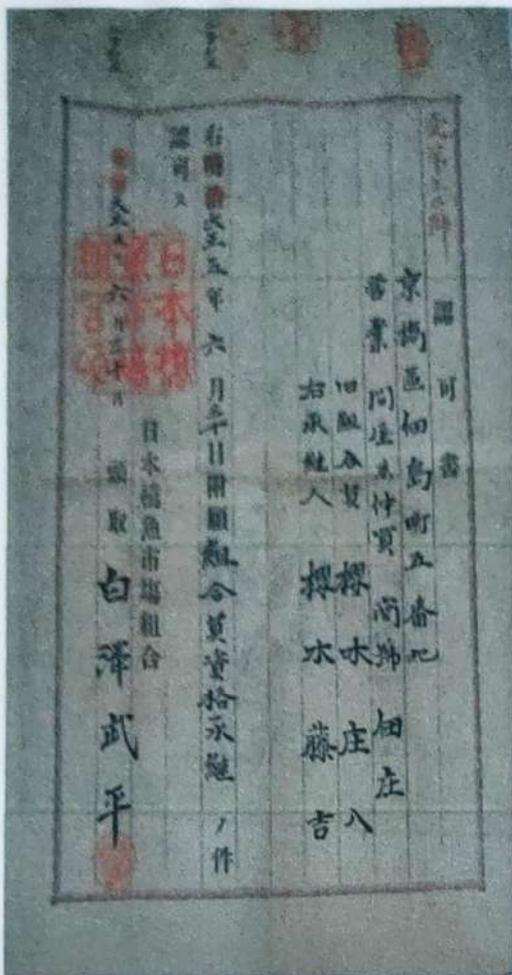
田淵 誠 館長



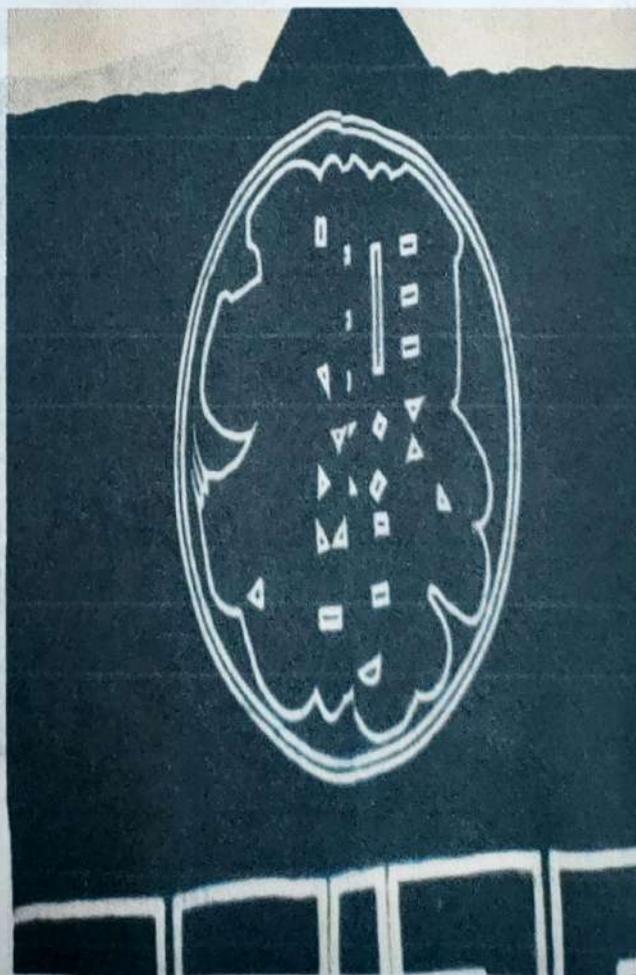
三十五 日本橋魚市場組合鑑札



認可書・庄八から藤吉に



櫻木家の半纏うら



この写真が明治の東京の風景が、一対の写真を撮る大正五十一手、昭和十一年の東京の風景にマサシ

三十六 「佃」の過去と現在

上部は大正11年住吉神社例大祭小橋の上貴重
な一枚の写真(東町の民家) 右側に交番有り。

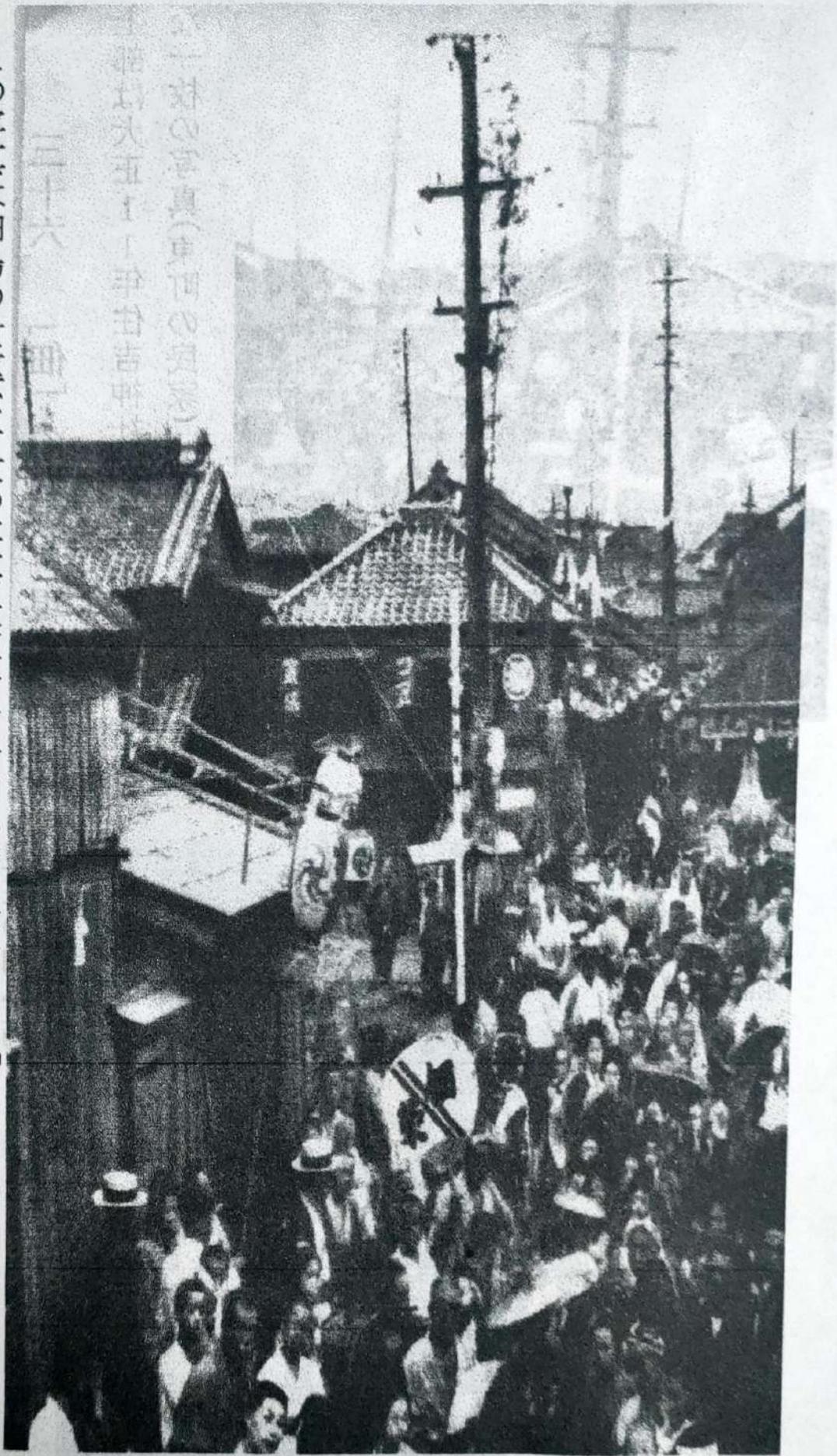


現在の佃小橋



(昭和20年東京大空襲後の強制疎開実施に伴い現在
の道路幅)

この写真は佃島の貴重な一枚の写真(大正十一年)佃小橋及び前面は福コマセ屋



(一) 問屋・仲卸業者を束ねた、

「浜長」小沢長吉 (濱長・ブログより)

濱長創業者(一八九二〜一九七一)佃生まれ、日本橋魚市場時代、佃喜八・佃伊之で修行、震災時、築地仮市場時代、濱長開設その後、大口協同組合二代目理事長、都知事章勲五等旭日章、佃島では数々の要職を兼ねていた。現在「浜長」三代目・貞夫 継承中・・・後に慎一に

(二) (佃島に井戸)

・・・元文三年十二月(1738)

佃島に初めて、『井戸』が掘られる。正保元年(1644) 佃島築島、後、から数えて、九十四年後(平成二十四年)から数えて、二百七十四年前となる。しかも、この井戸は現在も現役であるとの事。

もともと、この位置には、島民が多く集合する場所であった。

また、佃島説教所の前進であった、道場があった。現在 佃喜八号家前。

(三) 新酒屋

(現在の佃喜八号前の井戸)

当時、新酒屋の井戸として井戸水使用して、どぶろくを加工販売し、財をなすも、大正七年に起きた米の高騰により、どぶろく販売を断念するも、佃島では大盛した。

のちに、大正十二年日本橋魚市場において、鯉音号を立ち上げ、昭和二十五年統制解除後に山幸号に変更築地市場において営業する。重右衛門(長男) 細川市太郎出身。

(四) 銀座 と 佃島 「井戸」

銀座の昔を語る本の多くに、銀座は遠浅の海を埋め立てたなどと書いてあります。

銀座四丁目交差点あたりを、昔は尾張町と呼びましたが、その町名の由来は尾張国の人々が、あの辺を埋め立てたからだなどというお話が広く知られています。

ところが実際は地図のように、銀座が乗っかっている江戸前島は、本郷台地—駿河台と続く台地が、侵蝕されて低くなった場所です。これはビル建設の際のボーリングや、根切（基礎を掘り下げること）で、地層や地質を直接観察すると、海でなかったことがわかります。これと関連させてつぎに、中央区が昭和三十九年に製作した「佃島」という映画をみていただきます。

まず佃大橋の工事場面に注意しますと、川の中に立てる橋脚工事場面で出てくる土の状況を見ますと、海や河底の黒いヘドロではなく、案外にサラサラした赤い土であることがわかります。

つまり佃島も洲や埋立て地ではなく、もとは江戸前島と一体だった土地なのです。

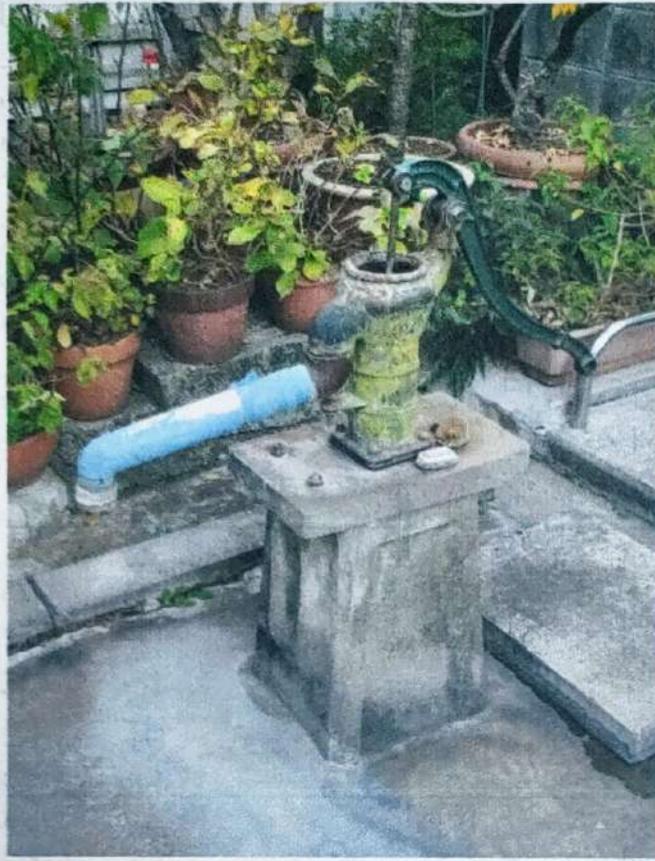
この赤い土は、武蔵野台地の上の関東ロームと同質のものです。

もう一つ、この映画で気がつくことは佃島の人々は水道ではなく、井戸を多くつかっています。

江東地区のように、ゴミで埋め立てた場所ですと、何百年たっても井戸の水は使えませんが、佃島の井戸の水脈は「本土」とつながっているのです。飲料水として使えたのである。

（もうひとつの証言）高橋きんざ氏大正12年の震災時、佃の井戸が活躍したことについて

て、当時、佃・月島全土が相生橋方面から水道管による、供給ですが、相生橋が崩壊のため飲料水の供給が止まる。月島全土で佃島の井戸の水をわけた。



旧佃島説教所跡の場所

どぶろく製造井戸

(新酒屋の井戸と呼ばれていた)

(五) 佃島の一番、重要地の所有者

佃島築島正保元年(一六四四)に三十六筆の土地を分け、築島後の沽券、宝永七年(一七一〇)幕府に対して、提出(築島後六十六年)のこと。佃島で一番重要な場所、孫右衛門一族の土地、この土地が日本橋魚市場の新興勢力により、土地を明け渡す、こととなった、二回目の沽券には、孫右衛門一族の土地と他の土地も弥兵衛氏及び日本橋魚市場大店の所有となった、(沽券延享元年)一七四四年この弥兵衛氏の所有者住所が、深川大島町及び明治九年の日本橋沽券図に魚市場の土地に付いても、土地所有者として、名前が出て来る、佃島の土地に付いては、平成の二十四年現在も、所有している、所有年(二六八)年間、昨年更新を行ったと、聞いている、福島家は、佃島の土地所有については、一切触れていな

いが、中央区越前堀にも住居をかまえた、形跡がのこっている、市場人ではなく、市場での営業活動についてはわからず。ここの、事については、後日調査される方に託す。

福島弥兵衛氏のまつえは墨田区緑町において、質屋を行っている。

(六) 所有者の年表

一、正保元年(1644)佃島築島完成

二、寶永七年(1710)佃島初回の沽券図(金子家)所蔵、金子政吉氏(築島後66年)後の出来事

三、延享元年(1744)佃島2回目の沽券図(国会図書館所蔵)初回の沽券図には、孫右衛門所有地及び八右衛門所有地と記載されていたが、二回目の沽券図には、孫右衛門・八右衛門の所有地が、総て、弥兵衛(福島弥兵衛)氏の所有となっていた。

地主(弥兵衛)氏の住所は深川大島町となつてゐる。

二回目の沽券図は一回目の沽券図作成後、

三十四年後に作成された物である。

四、明治六年佃島一番地及び四番地、福島弥

兵衛日本橋魚市場内・日本橋本船町十一番

地(地主福島弥兵衛)(第一大区沽券図)

五、明治十七年(1884)・佃島一番地及び

四番地福島弥兵衛

六、明治四十五年(1912)・佃島一番地及

び四番地、福島弥兵衛所有者住所(本所緑

町一の十六番地)

七、昭和七年(1932)・明治四十五年

のと同じ。

八、昭和二十二年(1952)・中央区越前堀

土三丁目一の十二及び十四に福島弥兵衛(土地

所有)

(五) 佃島の一、重要地の再調査

(七) 佃島渡船場跡

大正十五年東京市に移管された時に
建立されたものである



(八) 佃の記録(例大祭)

「大帳弘化四年六月」下町百九十人名の名前が記載、
最終記入は昭和三十九年、若衆組大帳に明記され
た「庄五郎」・・現在の佃一丁目三番地四号の櫻
木家(庄五郎)・現物は佃喜八号(飯田家)にある。

平成二十四年

(九) 佃の旧家

善右衛門・仁左衛門・喜平次等も、初代から約
十四代目を数える家系を見る事が出来るのではな
いか、庄五郎・飯田・野田・伊東・新屋・等の子
孫の方が存在すると思われる。

その他、但馬・神戸・松江・金子・小沢・田中
・山田・高瀬・櫻木・小林・福村・福田・細川・
高橋・平岡・森田・等々のお方達。

(十) 「佃島のまつえについて」

三十三人の旅人の中に見られる、四名のまつ
えが健在致します。宇右衛門(佃家)・仁左衛門
(伊東家)平左衛門(平岡家)・半四郎(高橋家)・
・佃寅(沽券図(地主)・喜兵次(折原本家)・
金蔵(水谷)沽券図(家守)・庄五郎(櫻木)・平
六(細川本家) 十右衛門(細川)・清七(太田家)
佐助(山田)前段の4名方については、慶長十

七年(1612)に、大阪摂津佃村から江戸に出発して、今年(平成二十二年)は400年のねむりから、さめた年でもある。宇右衛門氏は森家の親族であり、佃島で4番目の地主でもあった。佃島を支えた、名主忠兵衛

より、大きな土地持ちの言われがわかった様子。残りの7名も、佃島民のまつえであり、佃宇右衛門も継承して来たが、佃氏には継承する方がおらず、使用人の、久保田・大塚の二名の内、久保田氏が佃姓を引継ぎ、又、大塚氏は商いに進み、佃屋酒店が、現在も継承されております。久保田氏は佃島のはえぬきの方と聞いております。

森家(忠兵衛)のまつえの方も現在においても健在とのこと。

三十七 佃島のよもやま話

(一) 故吉田喜代太郎

先代の吉田金之助は佃半で修行、独立して、屋号佃久を名乗つ金之助は「大口卸協同組合」の経理を長く貢献した。喜代太郎は息子であり、昭和二十五年に中央魚類株式会社に入社し、特種で活躍し昭和五十八年から昭和六十二年まで常務の重責をはたし、平成元年大田市場水産物部大田合水株式会社代表取締役就任する。

談話

時の「長島茂雄」氏が昭和三十年(1955)佃島に数十人で、吉田家に承継訪問に訪れた。吉田氏は立教大学の野球部の先輩であり長島氏二年目で六大学野球初優勝での出来事。

昨年、平成二十三年十月末(八十七歳)永眠この、前段に、沽券絵図面が掲載されておりますが、この、沽券は吉田家に伝わるものであります。

(二) 大正七年四月から大正時代の

日本橋魚市場の休日は月に一回の休日。

(三) 佃島地図

明治九年の東京朱印内全地図を見ると、一番地は渡船場の場所(一番重要な場所)二番地がその北側、三番地が住吉神社側である。

(四) 父は立教大学の教授

息子は総長を歴任

宇右衛門氏は、三十三名の一人・宇右衛門を継承し、苗字が付き、佃姓を継承、佃氏にはお子さんが居ないため、佃氏の商いの、酒

屋と質屋、跡継ぎ、久保田氏・大塚氏が奉公に来ていた佃氏は久保田氏に対しては、学問が好きで、当時の蔵の中で学問をすすめていた様子、大塚氏については、商い、佃屋酒店を継いで貰い、現在に居たっています。現在、四代目となるとの事。

久保田正次氏は、明石町にあった、立教中学校・高等学校・(池袋)の大学と進み、立教大学教授(英文学者)で徳川家食膳白魚御用・供養塔・佃島開発の一人であり、明治憲法草案参画・日本法律学校(日本大学の前進)初代校長。住まいは、佃島五番地角、戦時中道路拡張のため強制疎開(撤去)大きな土地を明渡すことと成る。お墓は、和田掘りの佃氏の横に並んでいる。

正次氏の次男が佃姓を継ぎ、第九代(昭和四十七年から五十年)まで立教大学総長を歴任された。

(五) 佃のゝ隠居

海老の名門問屋「佃丸長」号の後継者（加藤弘）古くは、丸の字を貰い、「丸国」号の暖簾分をした事実。大正十二年の日本場魚市場の消滅まで営業しており、その後、統制中は小売商の東京魚商協同組合常務理事として活躍。中央魚類に入社後は、海老・特種物部門を育成し、さらに総務部門に転じ、後に六代目社長に就任。そのかたわら（社）全国中央市場水産物卸売業者協会会長（社）築地市場協会会長その他幾多の要職を勤めた。平成六年十一月、勲三等瑞宝章受賞。平成二年、市場水産物卸売業者協会会長、（社）築地市場協会会長その他幾多の要職を勤めた。平成十年二月十一日九十四才永眠。

(六) 「神戸精一（中央魚類50年誌より）」

魚河岸の老舗佃の「神勝」号に生まれる。戦前は東京魚市場に勤務し、当時より伊東春次、中央魚類（三代目社長）の知遇を受け、自然の流れの中で中央魚類の創立準備にも事務局長役として活躍し会社発足後は総務課長、後に常務として社内の中む枢にあった。

その明るいざつくばらんな性格で、部のとりまとめにあたっていた。昭和四十五年に中央冷凍（株）社長に就任したが、在職中の昭和五十二年に永眠する。

(七) 丸敏号 故金子敏男（佃長老談話）

佃島例大祭のシンボル「八角神輿」の隅田川の海上渡御が昭和三十七年を最後であった。佃堀の護岸工事の際に、堀をプール方式にして、「八角神輿」を海上渡御としたらどうかと、提案をしたが、保健所の許可が出ず断念する。

(八) 市場の文筆家 「佃寅」号

高橋金三郎 (別名きんざ)

日本橋魚市場「佃寅」に十五才の時店員となり、やつと落ち着き一人娘と夫婦となり店を継いだ。

佃寅の前身は、半四郎、摂津からの三十三名の一
人である。高橋喜三郎、佃東町四十番地・佃寅の
本家で。この場所はコマセ屋の一軒であった。

(九) お魚かるた考案者

長谷川秀雄 (佃文号)

明治四十一年八月五日生 佃島海老問屋佃文
の長男として誕生する昭和十五年、当時、魚市
場会社企画部宣伝係「魚販売促進」用として、得
意先仲買人に配布された。

その後、出世して、昭和十八年南方ニューギ

ニアで戦死、築地市場も約六十年がたち、
平成十年に「お魚かるた」が発見され、復刻版
を製作し、現在銀鱗会により販売しております。
「魚市場山岳会」の創始者でもあった。

「お魚かるた」復刻版



いみじくも、長谷川秀雄氏と筆者の長男が

同級生であつた。東京市月島第三尋常高等小

学校卒業昭和十四年三月(当人の写真あり)

三十八 「佃島鹽鮫屋」

「コマセ」屋、佃島には、八軒の同業者が存

続していた。

左記の名簿とは、大正拾貳年関東大地震後

の、佃島の様子と代金延着、東京方面の金融非

常に切迫之により取引きについては、現金で御

願い申し上げる向上文書。

福神丸(丸福田中屋)新造船大正11年

頃 高後ろ側の森は住吉神社

(八) 市街の文章家 「佃島」号



謹啓貴店益々御清榮ノ段奉賀候
 陳者毎度御引立ニ預リ當鈔同業
 者一同厚ク御禮申上候却説從來
 ハ御注文ニ依リ鈔御送附申上候
 へ共代金延着致ス事モ度々之有
 其レガ為集金ニ參堂致シテモ思
 フ様ニ集金出来ザル事モ度々之
 有候故實ニ困難ニ御座ルニ候然
 本年ハ御承知ノ道リ昨年ノ大震
 火災ニテ東京方面ハ金融非常ニ
 切迫致シ居リ其レガ為生鈔ハ勿
 論樽鹽等總テ現金取引ニ相成候
 間今同業者一同資本ニ苦シミ居
 ル様ナ始末ニテ遺憾乍從來ノ様
 二代金延引ハ一方ナザル困難
 ニ御座候故一同協議ノ上此ヨリ
 ノ取引ハ皆現金ト決定致シ候間
 右御承知ノ上鈔御入用ノ節ハ倍

舊ノ御引立ヲ當同業者一同伏テ
 御願ヒ申上候
 大正拾三年五月

三十九 京橋区佃島鹽鈔同業者

大寅 細川 源次郎

介 小澤松之助 濱清

金庄 金子 庄吉

佃仙 高橋仙太郎 佃煮屋

半四郎 高橋喜三郎 佃寅本家

丸福田中屋 田中福太郎

嘉七 浦井 嘉七 吉 佃吉

櫻木長次郎 鈴正

各御得意様御中

四十(福) 田中鹽鮎

佃小橋手前(東町)別名向町にお住まいの、
田中 清・寿子の御夫婦による聞き書き。

(元アミータナカヤ・洋菓子店)店主佃島の中に
おいても、今では、語られていない事柄では
ないかと思われる、佃島住民の中から、日本
橋魚市場に参入されたのは、明治初期頃であ
り、明治十三年頃の資料に問屋四軒・仲買六

軒が見られる。この、時代の前後から島民の
職業の仕事が市場関係・魚師・棒手振・コマ
セ屋・餌屋の仕事が島民の職業で佃島に繁栄
をもたらした。

「コマセ」屋の創業は、明治初期(一八六八)
頃から田中家(田中徳太郎)嘉永二年(一八四九
一八九一三)漁場は品川沖・台場付近であった、
あみじやこを漁獲し、佃島を出港する時点に
おいて、塩のこも俵と四斗樽等を積み込み、
漁獲した、あみじやこを船上で、海水で洗浄
し、持って来た塩をまぶし当初は、麻袋・終

焉時は、「きぬ袋」水切の重みが違う、どじょうざるを引き、水切、佃島に帰り二度目の洗浄作業をほどこし、四斗樽に詰め込み、荒縄で樽をくくり、佃島の目前の東海汽船の発着所に持ち込、千葉県の房州・三浦三崎・伊豆下田・沼津方面に顧客を持ち、海上輸送していた。

父親、久三郎（一八九一〜一九六〇）一九歳の時、（明治四十二年）東京湾の異変を考え、あみじゃこの買付けに、九州まで奔走していた。

残念な出来事、昭和二十年三月十日の東京大空襲後、終戦八月十日から二ヶ月前の六月に、いき

なり、役所から、赤紙の様な物で、強制疎開の通知が配布された。渡船場から小橋に向かつて右側一列が強制疎開、通知から三日後に、各家屋の柱にノコギリを入れ、最後の柱にロープを掛け、一気に引く、柱にノコギリが入る度に、涙が止まらず。苦い経験を味わった、その後に、おいて、黙っていると、とことん、うちのめされ、元に戻るまで時間がかかった。

（強制疎開にあった、件数は、東町で約五十軒下町で十五軒）倉庫兼作業場は石造りの蔵であった。

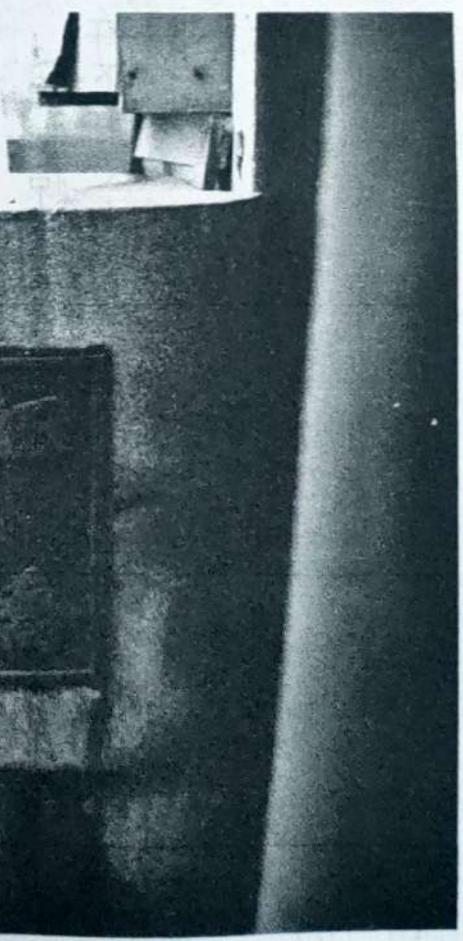
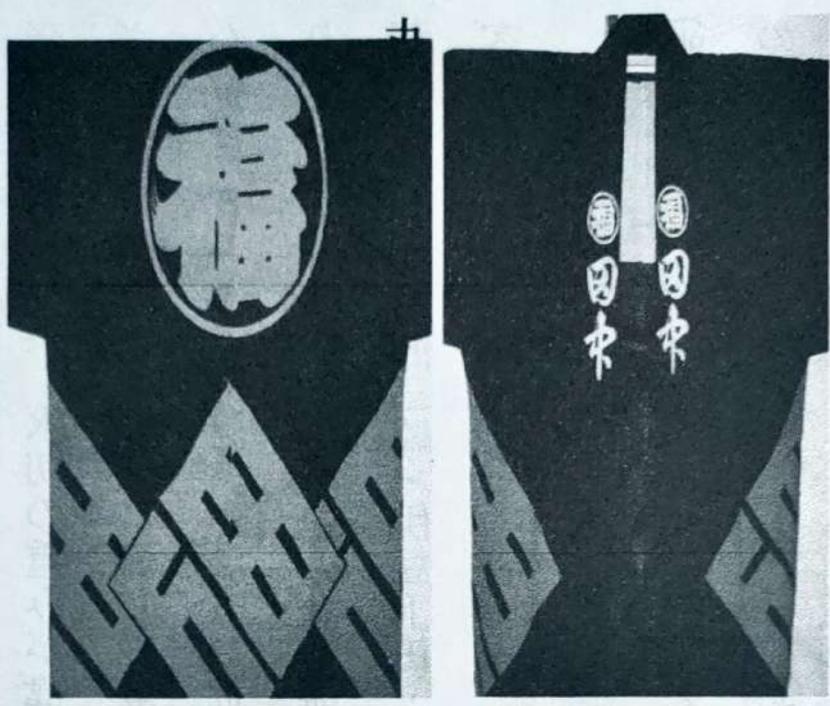
美談

「コマセ」屋と顧客との関わりだけで、百年のお付き合い（南房総富浦の顧客）両者の厚い信頼

が無ければ成立しない話である。

佃島で最後の「コマセ」屋は金庄号さんで

あつたと聞いております。田中 寿子氏談



佃島の影

(四十二) 佃の町並み

佃煮 丸久(平成二十四年)



佃煮 丸久(平成二十四年)

佃煮 天安(平成二十四年)



佃煮 天安

(四十二) 田の田並名



佃煮 田中屋(平成二十四年)

佃煮 天塚(平成二十四年)



佃屋 大塚家

(平成二十四年)



渡船場道り(上町)(平成二十四年)



渡船場道り(上町)(平成二十四年)



渡船場道り(下町)(平成二十四年)

新船場通り(下町)(平成二十四年)



渡船場通り(下町)(平成二十四年)

新船場通り



渡船場通り(下町)
(向きをかえました)(平成二十四年)



渡船場道り(上町)(平成二十四年)

渡船場道り(下町)

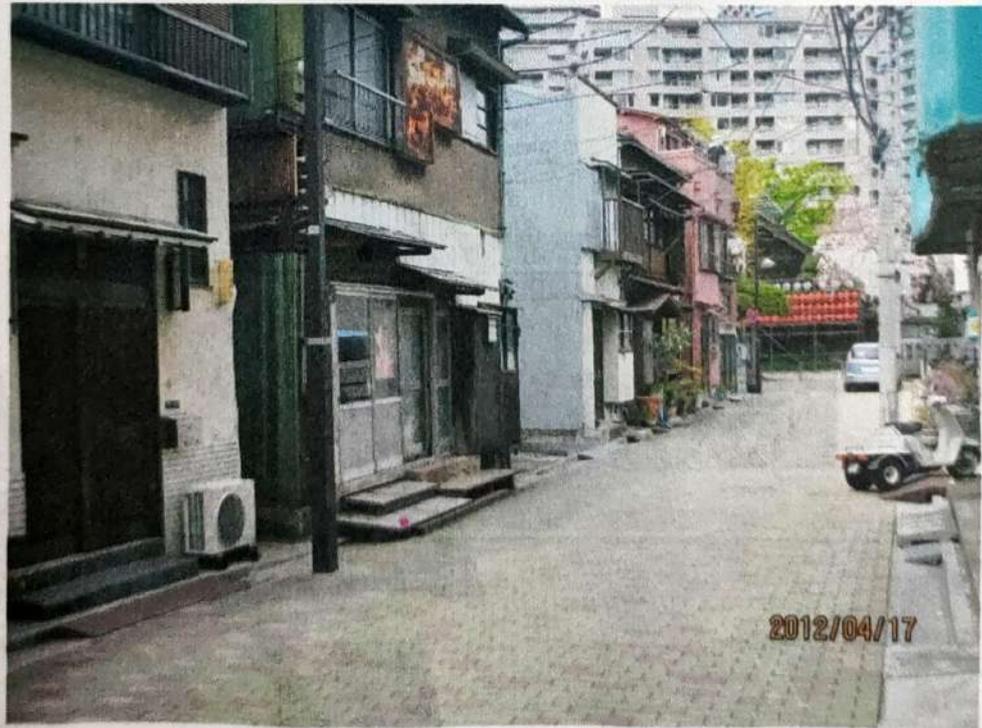


渡船場道り(下町)(平成二十四年)

うわての中道り



うわての裏道り



下町の
中道り

下町の裏道り



下町の
中道り



下町うら河岸道り



現在の佃 (家の中に蔵が存在) (平成二十四年)

四十二 「佃の名物」と『広場』

佃煮は天保時代に漁師の妻が保存食を作り最初は、塩茹で、千葉県野田市から醤油が入り、生醤油で煮付ける、佃煮を考案、参勤交代で、武士が江戸に出て来ると、お土産として、佃島の佃煮を持ち帰り、全国に知れ渡った。

平成二十四年の現在、三軒が残っておりますが、以前には、佃島には七軒の佃煮屋が存在していた。

現在の佃煮屋 天安・丸久・源 田中屋
昭和二十年八月の強制疎開以前までの店舗

佃茂・佃仙・佃栄・田中屋

佃茂店は、築地本願寺横で営業 田中屋は都内の佃煮屋に販売していた。

佃メインストリート『広場』

盆踊り会場、その昔、盆踊りといえは、現「濱長」前の広場で実施されていた。

昭和二十年八月の終戦まえに、佃島の住人の避難通路の拡大のために、住居を強制疎開が実施され、現在の広場は、以前は巾は三間(約5・3m)しかなかった通路であった。現在は12²mの広場(渡船場通路)は渡船場・佃小橋から東町まで、三間の通路であった。その、あかしは、八角神輿の横棒が短くなっている。

四十三 佃島小学校創立の功労者

細川源治郎氏は、弘化二年（一八四五）五月五日、佃島九番地に平六長男として、生誕、平成二十四年（二〇一三）から数えて（一六七）年前、各賞状及び佃島漁業組合の総代として組合の発展につくした、功績は大きい。学校創立に奔走した事情等については、息女細川キミ氏の思い出によってもうかがえる。

佃島小学校設立申請明治二十一年六月七日、林厚徳、京橋区長より男爵高崎五六、東京府知事に佃島尋常小学校設置について、申請書を提出している。

設置場所 位置・京橋区佃島四十二番地
先学科配置・尋常小学校科（四十二番地先）渡
辺石油店・現在の坂ビルの場所の前の方

旧佃橋がかかったのは、高は明治二十六年

思い出

明治二十八年卒業生 細川キミ
この度、佃島小学校の歴史が三十二年古くなつて、私の通ったころの学校までつながったことは、何といつても、うれしいことです。

この間は、また、浜長さんのお骨折で、そのころを語る座談会まで開いてくださつて、ありがとうございました。父は、佃島の総代をしておりました関係から方方の会合にもよく出ました。

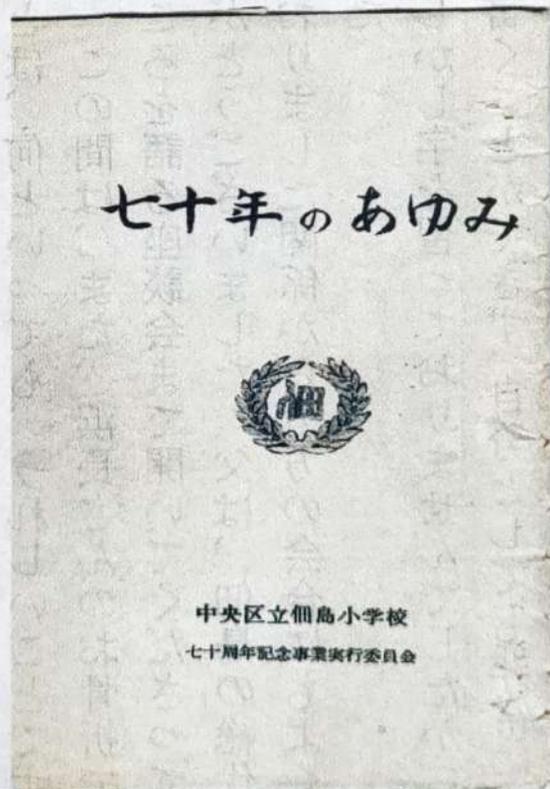
しかし字を習つておりませんでしたから、字を書くことができず、自分としても非常に残念がつており、これからの子供達がこんなことではないから、何とかして学問をさせ字をおぼえさせたいと思い、まだ佃島学校のできない前、

父の友人あって、今の油屋さんのある所で佃煮をしていた中村茂吉さんの巳之吉さんという、まだ二十歳位の若い人にたのんで、夜近くの子供達に字を教えてもらいました。この事がきっかけとなつて、どうかして学校をたてたいと考え、当時の京橋区長であつた大森さんにたのみ自分は、握り飯にわらじばきで方ぼうかけまわり、佃島尋常小学校の建設に骨折りました。

そんなわけで、父は学校にたいして強い関心を持ち、学校の式のときはもちろんよく学校に行きました。そして学校のことは何でも気にかけて、いろいろとお世話をしました。

もつて生まれた親分はだの氣しようで人の世話がすきで困っている人は助けてあげました。大正十一年七十八歳でこの世をさりました。

・・・佃島小学校七十年のあゆみより



(二) 佃島小学校第一回卒業 名簿 8名

明治24年11月18日卒業

中村マサ

明治25年 3月27日卒業

細川捨松・三浦福松・高橋竹松・

山本久之助・松江源之助

明治25年3月 卒業

柳 千ヨ・高瀬夕子

(入学)

氏名 住所 父兄名 性別 生れ

明治21年10月4日付入学

小澤新次郎 佃島35金 七 長男明治14

明治21年10月8日付入学

取海庄三郎 佃島35金 七 長男明治14

町田 喜三 佃島35金 七 長男明治15

山本松之助 佃島1 勝五郎 弟明治15

平岡 好広 佃島3 好國 三男明治15

浦井治三郎 佃島29 弥太郎 弟明治15

山田竹次郎 佃島9 幸吉 次男明治15

三浦福松 佃島42 吉兵衛 長男明治15

木村初太郎 佃島36 重兵衛 次男明治15

伊東鉄次郎 佃島39 銀次郎 次男明治15

高橋竹松 佃島1 勝造 三男 明治15

山本久之助 佃島30 繁太郎 次男明治15

田中新次郎 佃島4 金次郎 次男明治15

森 由松 佃島46 六三郎 長男明治15

田中為造 佃島42 赤次郎 次男明治15

平山勘之助 佃島15 夕ケ 次男明治15

大久保秀吉 佃島28 豊松 三男明治15

柳 千ヨ 佃島2 サト 次女 明治15

高瀬夕子 佃島20 勘之助 次女明治15

大塚千ヨ 佃島1 シゲ 四女明治15

沢田ハツ 佃島15 赤次郎 次女明治15

細川トヨ 佃島15 タツ 次女明治15

明治21年10月9日付入学

福山金次郎 佃島42 亀吉 長男明治15

伊東元次郎 佃島39 銀次郎 次男明治15

中村マサ 佃島40 駒吉 長女明治15

明治21年10月10日付入学
 細川捨松 佃島16亀吉 次男 明治15
 明治21年10月12日付入学
 山本ツネ 佃島20 松之助 次女 明治15
 明治21年10月14日付入学
 伊東トメ 不詳
 明治21年10月15日付入学
 神戸サク 佃島21 善右衛門長女 明治15
 明治21年10月18日付入学
 細川タマ 不詳
 明治21年10月19日付入学
 野竹久次郎 佃島5 吉田半次郎
 明治21年10月20日付入学
 西川カヅ 佃島1 安五郎 長女 明治15
 伊東チヨ 佃島2 歌次郎 長女 明治15
 細川アカ 佃島16長次郎 三女 明治15
 木村ハツ 佃島16佐七 長女 明治15

明治21年11月3日付入学
 細川弥太郎 佃島16亀吉 長男 明治15
 明治21年11月8日付入学
 高瀬新太郎 佃島46幸吉 三男 明治15
 飯田林之助 佃島7 竹松 三男 明治15
 松江源之助 佃島6金次郎 長男 明治15
 山本キク 不詳
 明治21年11月11日付入学
 三浦久太郎 佃島5高橋三之助長男 明治15
 明治21年11月15日付入学
 水口ハツ 佃島36米次郎次女 明治15
 明治22年1月10日付入学
 金子ヨネ 佃島14安五郎三女 明治15
 明治22年1月13日付入学
 小澤スエ 佃島42安五郎次女 明治16
 明治22年1月18日付入学
 野田フサ 佃島39金兵衛長女 明治16

明治22年2月10日付入学

中村ヨシ 佃島40駒吉 次女 明治16

明治22年2月14日付入学

横堀市太郎 佃島45虎吉 次男 明治16

沢田イネ 佃島I5赤次郎三女 明治16

明治22年2月17日付入学

金子キヌ 佃島3 佐七 長女 明治16

明治22年2月26日付入学

神戸タネ 佃島I 福松 長女 明治16

明治22年3月6日付入学

飯田長二郎 佃島7 竹松 四男 明治16

明治22年3月8日付入学

清水才次郎 佃島8 スミ 長男 明治16

明治22年3月10日付入学

浦井スエ 佃島32 磯吉 長女 明治16

77年のあゆみ 中央区佃島小学校より写す

四十四 すかし入り修業證 (庄政・所蔵)

卒業証書 (伊東政吉)

1877~1934 (57歳)

第六號

東京府平民

伊東政吉

明治十年一月生

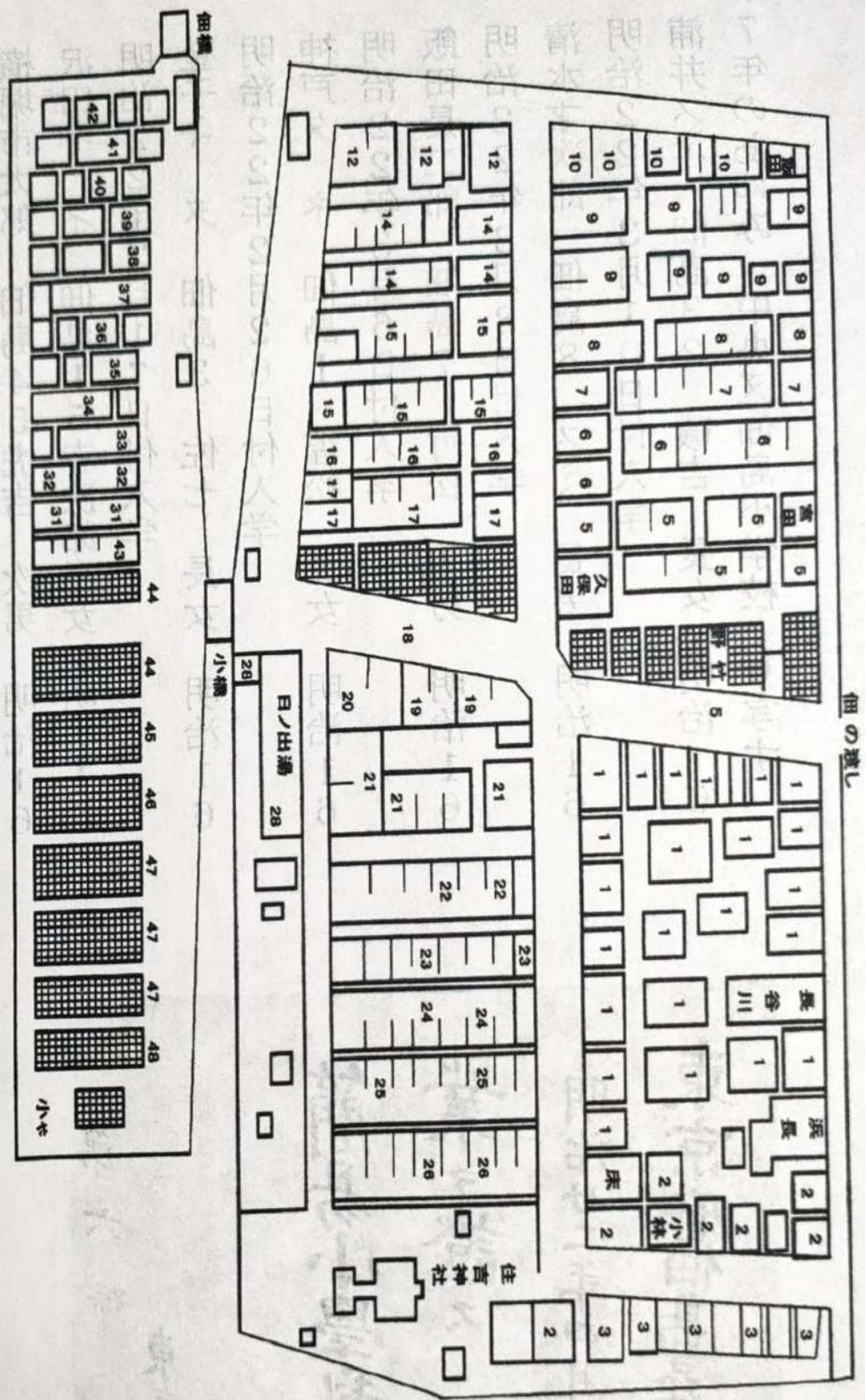
簡易小學校第一年修

業ヲ證ス

明治廿二年四月十二日

東京府佃島尋常小學校

昭和二十年八月二十日以前に強制疎開が施行された場所を表示する。昭和二十年八月二十日以前に強制疎開が施行された部分の赤字の部分が強制疎開及び昭和二十年以前



個の産し

強制撤去場所

この部分

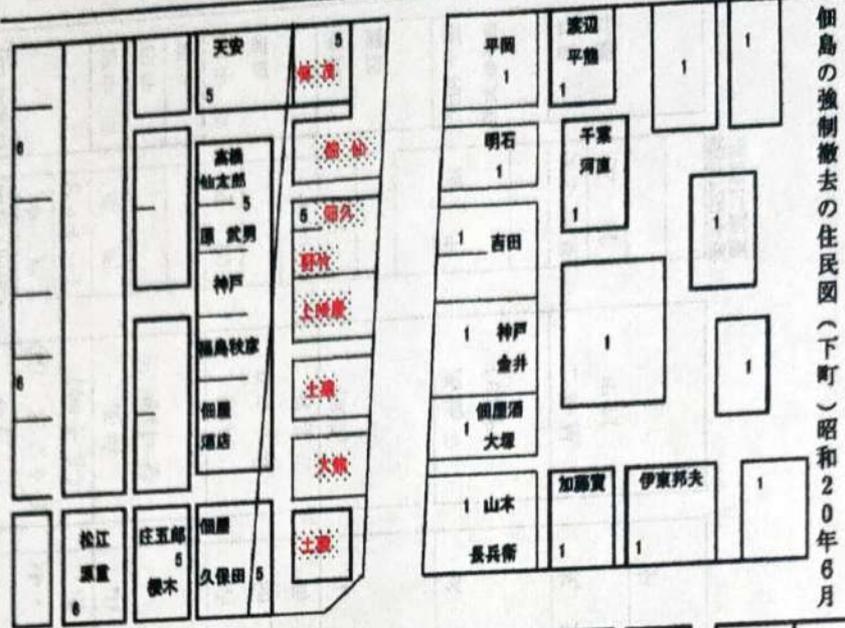
昭和20年

伊島図

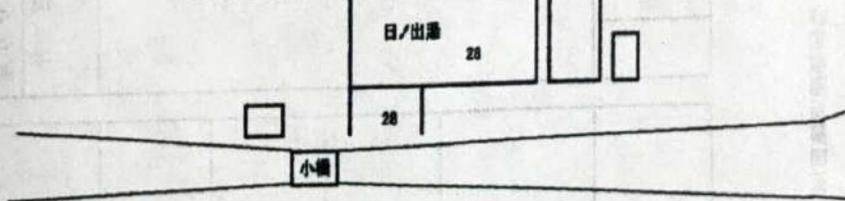
の島民

終戦の2月前施行

運送船



佃島の強制撤去の住民図（下町）昭和20年6月



強制撤去前の住民図(東町)

佃小橋		クツ屋 支那ソバ(佃軒)		石蔵 たなか屋 (佃多喜) 高橋 三浦(佃繁)		油・タバコ 清水田 山田		鮎商(半四郎) (佃寅本家) 高橋喜三郎 高橋		鮎屋 納屋 小澤甚之助		アサリ屋 酒井		佃吉 浦井嘉七 彦一		佃島 漁業組合 庫倉		
伊東 豊太郎 丸仁	山本 豊吉	佃栄(佃煮)	神 戸	鮎商 たなか屋 母屋 但馬	納屋 佃巴之 高 小林	仲 却 佃巴之 高	鮎 商 小澤甚之助 介									金子	渡 辺	
船倉	倉 庫		(小島)		ツツサー吉 渡 辺											渡 辺	岩 本	
ペンキ屋	渡 辺		森													岩 本	白 井	
伊東 石渡 神戸 豊	金子和夫 金子新太郎		浦 井		鈴木													
田中	長島 高橋		ラジオ屋 玉 村		本 橋													
伊東ふじ 伊東秀																		

昭和20年後
道路に変更

東 町 2

強制疎開実施区域

佃島漁業組合製造場
佃島漁業組合事務所

大寅	納屋	金子菊松	新屋	田中屋	佃仙	(天安)	高橋盛平	(佃茂)	平岡
飯田伊之助	細川源次郎 市郎	加川金五郎 長谷川初雄	金子吉五郎 黒部亀吉 金子仙之助 佃小ね 佃政 手与木 佃馬家作 佃馬	田中源次郎 駄菓子屋 オリンさん 飯田 佐助 山田 浦井 福岡初雄 金子澤田 天竹 長谷川	佃屋 田中清吉 梅原カメ (林) 森政吉 大和田三次郎 高山肇司 石毛 梅原智五郎 アメ金 (山田)	宮田松之助	高橋仙太郎 原武男 神戶 福嶋秋彦 佃屋酒店 大塚善彦	中村忠一 (佃仙) (佃久) 野竹久次郎 上州屋 塚越 佃屋酒店 大塚善彦 大熊 久保田正次	平岡 明石 吉田 金井 大塚佃屋 山本長兵衛
飯田文熊	細野	小林	市川	内田	市蔵 アクサン	小川	飯田文熊	高橋	平岡
飯田伊之助	細野	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	佃仙	明石
飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	神戶	吉田
飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	神戶	吉田
飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	佃屋	金井
飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	志置	大塚佃屋
飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	村山	大塚佃屋
飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	佃屋	山本長兵衛
飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	飯田伊之助	佃屋	山本長兵衛

昭和20年以前個の住民住居 下町 ①

現在の道路
→12m
3間
5m

現在の佃



昭和三十九年、目黒川沿いの十軒の空堀(昭和三十九年)。(昭和三十九年)

四十六

大川端リバーシテイ21

昭和47年再開発基本構想答申

昭和54年基本計画調査実施

昭和59年3月都市計画決定

昭和61年4月全体着工式

昭和63年住宅1期入居開始

昭和63年6月地下鉄有楽町線

月島駅開業

平成12年8月北ブロック

Nブロック入居開始

昭和7年1月末現在

四十七 佃島における土地の变革(昭和七年)・(昭和二十七年)

地番	坪数	地価	所有者住所	所有者氏名
1	529.85	1,906.74	本所区緑町1-16	福平 島 弥 兵衛
2	111.18	400.24	佃島3	岡 好好
3	187.87	460.33	同上	岡 好好
4	36.25	130.50	本所区緑町1-16	福 島 弥 兵衛
5	255.92	921.31	京橋区佃島5	佃 島 弥 兵衛
6	117.65	423.54	京橋区築地3-3-2	金子 源子 政次
7	116.87	420.73	京橋区佃島7	柳 源子 政次
8	115.96	417.45	京橋区築地3-3-2	金子 源子 政次
9	115.18	414.64	同	金子 源子 政次
10	92.61	333.39	同	金子 源子 政次
11	27.20	97.92	同	金子 源子 政次
12	65.78	235.62	同	金子 源子 政次
13	66.78	340.40	同	金子 源子 政次
14	69.30	249.48	京橋区西8-2-8-1	金 菊池 勝久
15・1	96.31		京橋区佃島5	野 竹田 井子
15・2	64.24		京橋区佃島1	吉 井子
16	74.58	268.48	京橋区本湊町27	福 井子
17	70.45	253.62	京橋区築地3-3-2	金 柳尾 崎子
18	70.24	70.24	京橋区佃島7	柳 崎子
19	22.40	80.64	京橋区新川町1-6-9	尾 崎子
20	45.36	163.29	京橋区築地3-3-2	金 白柳 金子
21	71.56	257.61	京橋区月島西仲道1-1	白 柳金子 崎子
22	68.53	246.70	京橋区佃島7	柳 金子 崎子
23	74.82	269.35	京橋区築地3-3-2	金 金子 崎子
24	79.33	285.58	同	金 金子 崎子
25	81.86	294.69	同	金 金子 崎子
26	77.85	280.26	京橋区新川町1-6-9	尾 崎子
27	435.00		京橋区佃島27	住 吉田 乃
28	43.78	157.60	京橋区築地4-6	池 田 乃
28・2	60.73	218.62	同	同 村 茂
29	75.03	270.10	日本橋区小網町1-7	中 村 茂
30	75.94	273.38	同	同 村 茂
31	77.88	280.36	京橋区佃島31	伊 東 仁 左衛門
32	71.54	257.54	京橋区築地3-3-2	金 子 政 茂
33	73.52	264.67	日本橋区小網町1-7	中 村 政 茂
34	72.66	261.57	京橋区築地3-3-2	金 子 政 茂
35	68.67	247.21	京橋区佃島31	伊 東 仁 左衛門
36	72.16	259.77	日本橋区小田原町1	折 原 初 政 茂
37	71.52	257.47	京橋区築地3-3-2	金 子 政 茂
38	70.87	255.13	日本橋区小網町1-7	中 村 初 政 茂
39	70.22	252.79	日本橋区小田原町1	折 原 初 政 茂
40	69.57	250.45	京橋区築地3-3-2	金 子 政 茂
41	68.93	248.14	同	同 飯 田 赤 次
42・1	50.36	181.29	京橋区築地3-24	飯 田 赤 次
42・2	30.00	108.00	京橋区築地3-42	三 浦 田 赤 次
43	36.86	123.69	京橋区築地3-1	吉 田 赤 次
44	35.88	129.16	京橋区築地3-3-2	金 子 政 次
45	66.41	239.07	京橋区佃島7	柳 源子 政 次
46	80.64	290.30	京橋区南新堀2-6	福 井 田 新 桂
47	241.61	869.79	京橋区京橋1-9-4	池 高 橋 信 三
48	142.20	511.92	芝区三田四国町2-1	高 橋 信 三

昭和27年10月(不動産調査会)より

地番	所有者住所	所有者氏名	地番	所有者住所	所有者氏名
1	墨田区緑町1-16	福島弥兵衛	30-2	佃島30	田中寿子
1-1	佃島1	神戸 健司	30-3	日本橋小網町1-2	中村茂八
2	佃島3	平岡好直	30-4	日本橋小網町1-2	中村茂八
3	佃島3	平岡好直	30-5	佃島20	高橋安則
4	墨田区緑町1-16	福島弥兵衛	30-6		東京都
5-1	文京区森川町125鈴木方	佃 正 昊	30-7	大田区上池上上町73	山本ますゑ
5-2		東京都	31	佃島31	伊東豊太郎
6	築地3-3	金子為雄	32-1	佃島32	横田金太郎
7	佃島1	柳源次郎	32-2	湊町3-6	田中龜太郎
8-1	佃島17	金子政吉	32-4	佃島32	田中徳太郎
8-2	"	"	33	日本橋小網町1-2	中村茂八
8-3	佃島8	黒部亀吉	34	築地3-3	金子為雄
8-4	佃島8	金子吉五郎	35		大蔵省
9	築地3-3	金子為雄	36	築地3-3	金子為雄
10	"	"	37	築地3-3	金子為雄
11	"	"	38-1	日本橋小網町1-2	中村茂八
12	佃島17	高橋金三郎	38-2	葛飾区本田立石町440	高橋とよ
13-1	佃島13	金子新太郎	38-3	佃島38	酒井信一郎
13-2	佃島13	金子敏夫	38-4	佃島38	小原龍三郎
13-3	佃島13	高橋初太郎	38-5	佃島14	神戸熊吉
13-4	佃島13	金子芳江	39	築地3-3	金子為雄
13-5	佃島13	山田精吾	40	築地3-3	金子為雄
14	佃島14	神戸熊吉	41	佃島18	金子政吉
15-1	世田谷区松原町3-922	増田六郎	42-1	佃島24	飯田赤太郎
15-2	佃島1	吉田金之助	42-2	千代田区西神田1	田辺綱治
16	湊町1-7	福井隆之	43	佃島1	吉田金之助
17	佃島17	高橋秀雄	44-1	佃島1	小堀一市
18		東京都	44-2	佃島35	高橋安吉
19	新川町1-6	尾崎喜八	45	入船町3-3	中島エレベータ
20	築地3-3	金子為雄	46-1	入船町3-3	中島エレベータ
21	月島西仲道り1-1	白井信之助	46-2	佃島25	折本市太郎
22	佃島1	柳源次郎	47-1	新佃島西町1-7	白井藤太郎
23	築地3-3	金子為雄	47-2	新佃島西町1-7	白井藤太郎
24	築地3-3	金子 為雄	48-1	月島西河岸道1-2	山口章
25	築地3-3	金子為雄	48-2	新佃島1-25	浦井彦一
26	佃島27	住吉神社	48-3	佃島48	京橋佃漁業会
26-1		東京都	50	日本橋室町3-1	三井不動産
27	佃島27	住吉神社	54	佃島54	石川島造船所
28-1	銀座西5-5	池田金太郎	57	佃島57	渡辺正二
28-2		外2名	58-1		東京都
29		東京都	58-2	佃島48	佃島漁業組合
30-1	佃島30	山本豊吉	58-3	佃島48	京橋佃漁業会

錢樽 松江・(源重号)所蔵



明治から昭和十年代まで自宅において小錢に
入れに使用。

源重号御子息(宏)氏・・・談 この錢樽は、自
宅に戻って来た、使用人が、ポケット等に残った、
小錢を入れた物、余談ですが、写真を取らせて戴
いた時に、樽の中に一朱銀が何枚か入っていました。
た。なを、松江家の、母屋には、現在においても、
土蔵が実現しております。

五十 現在の佃には、平成の時代でも

屋号が生きている

佃政 佃茂 神勝 善金 佃松 飯田水産

佃竹 吉松 金庄 引 水直 岩屋 加村

目佃市 佃久支店 水十 水米 佃天安

佃吉 佃芳 亀吉 岩市 但馬 丸熊

引 大寅 佃上 清七 佃昇 佃水産

佃直 今岡田屋 今佃林 佃傳 高安

佃藤 佃仙 ① 本城 小澤 佃長

佃 ③ 小澤 河直 細川 栗原 食

佃丸長 丸仁 佃繁 丸半 佃甚 佃半・

⑤ 佃大忠 新屋 丸国 十右衛門 佃久

庄五郎・庄八 庄政 丸龍 佃栄 山勝

浜清 小川 佃喜八 佃伊之 浜長 佃金

佃寅 高常 丸政 佃輝 田島屋 下市

岩友 佐藤 金六 佃佐助 佃金 佃辰

新酒屋 佃熊 佃仙 前田 丸初 引

佃亀 佃芳 佃屋 佃源 分 長

銀金 佃文 源重 三浦 佃権 佃初

浜房・丸敏・丸作・福・鈴一(正)・丸龍・新屋・

五十一 佃久号

故吉田喜代太郎氏奥様シズ子様から、

喜代太郎氏、ご健在時から、吉田家の所蔵品の一件等、「佃島沽券絵図」の保存に対して、門徒講に寄贈して戴き、佃島の後世に残す為、ご協力願いたい旨お話しをしてきた。

先般、奥様から吉田家の古文書を見てほしい旨お話しがあり、見せて戴き、その際に、以前からの寄贈に付いてのお話、後日、改めてお話に来る事を約束。平成二十四年八月三十日に古文書の寄贈(佃島門徒講)を完了致しました。

五十二 「佃伊之号」(飯田家)

佃伊之は、現在の飯田浩社長で三代目となるそうです。先代は伊之助・二代目栄太郎となり、本家は、佃喜八号の次男として、佃の伊之助で「佃伊之」を名乗った、しかし、伊之助が独立、当初、日本橋時代には佃権号を借りて営業するも、佃権からの返却要請で、返却。「佃伊之」号についても、大正十年の日本橋魚市場絵図の中に「佃伊之」号として記載してある。

現在の築地においても、老舗の店舗である。浩社長は慶応大学卒業(昭和三十五年)後、すぐに「佃

伊之」に入社五十二年の勤務、築地市場においては、特種物業界所属(すし種)を扱う仲卸業者、跡継ぎの息子さんも健在、益々のご発展を。又、この度、佃町会長兼務、平成二十三年九月より、佃住吉講、講元として就任いたし、ご苦勞が耐えませんがどうか健康に留意し、これからの、佃の未来にまい進して頂きたいと思う。

社長談話

平成二十四年四月二十四日 佃町会事務所

五十三

「佃喜八号」(飯田家)

平成24年4月5日NHK放映「ブラタモリ」の番組中で紹介された家屋、日本橋魚市場の仲買時代から、表台所として、現在も使用されている表戸、現在はガラスと板塀の時代劇に出てくる、おもむき、表戸を開くと、中に井戸がある、この井戸は、魚類等を洗う場所。

この、表戸は4枚が全部取り外し、敷居も取り外すと、おもて台所が広々と使用できる。

ふだん、は、何も無かった様子で表戸が閉める、敷居も取り違いになっただけで、一箇所の敷居を外すことも出切る。「大正9年建築」

問屋のかまえは、現在、佃には「佃喜八」の一軒である様だ、

たじま



おもて台所



五十四 仲買制度の復活出願者

一、二八八名

第一次選考適格者 一、二五五名

この中で卸売会社に在職していて仲買人として早急に離職する人は、卸売業務の運営上支障があるとして許可保留願出のもの八九名（三ヶ月以内に転出希望者一六名、将来転出希望者七三名）であった。合計1702名

第1次許可

昭和25年6月1166名

第2次許可

昭和25年11月368名

第3次許可

昭和26年10月104名

第4次許可

第5次許可

昭和26年11月 22名

第6次許可

昭和26年12月 1名

第7次許可

昭和27年 5月 7名

第8次許可

昭和27年 8月 1名

第9次許可

昭和27年12月 1名

第10次許可

昭和28年12月 10名

第11次許可

昭和30年 1月 1名

昭和30年 8月 21名

五十五 昭和三十年から四十五年頃の

抽選場所の風景

年間売上金額が左右される為良い場所に移動

出来る様に、神だのみ、神社に出向き、御札・

願掛け、易によるクジ運、あらゆる物を取り

入れ、一族総動員で、子供までも巻きこみ、抽選場所に

白装束での抽選、現在では、見られない光景である。

五十六 東京都中央卸売市場築地市場

店舗移動の経緯 (年度別店舗移動日)

第一六回目 昭和二十五年七月

第二五回目 昭和二十六年七月

第三 回目 昭和二十七年六月

第四 回目 昭和二十八年十月

第五 回目 昭和三十年十月

第六 回目 昭和三十二年十月

第七 回目 昭和三十五年十月

第八 回目 昭和三十九年十月

第九 回目 昭和四十二年十月

第十 回目 昭和四十四年六月

第十一 回目 昭和四十八年五月

第十二 回目 昭和五十二年五月

第十三 回目 昭和五十六年五月

第十四 回目 昭和六十年五月

第十五回目

平成二十六年五月

第十六回目

平成二十七年六月

第十七回目

平成二十八年五月

五十七 「ガラポン」

店舗移動実施対策委員会の設置

店舗移動日時決定

使用条件の決定

ブロック別移動方法の決定

本抽選の順番決め抽選（予備抽選）

ブロック別の本抽選

抽選については、「ガラポン」抽選機方

各ブロック別に番号の玉を入れ抽選す

注意 抽選別店舗における組合せにより、複数
件で一抽選 引く場合の並び方は組合せの件数
で並び方を決める。

この店舗移動には、膨大な費用と東京魚市場卸
協同組合との一致団結における、二日間の大イ
ベントである。築地市場の仲卸業者が日々営業
を行う場所が1, 236コマの数があり、また、
半円を描く店舗の並びとなっている施設。開場
時代の入荷する物の流れは、隅田川からの船に
よる搬入、全国の産地から貨車（鉄道）による

集荷、卸売場に集荷された物を並べ、せりにより、

場販売された物品を各店舗に運び販売する、市

場の施設は東西に長く出来ており、東西での、

年間売上金額が大幅に違うためと店舗の使用面

積も違うため。なを、市場正門からの買出し人

の流れの良い、第四大通路から第七大通路の角

店舗が良いとされている。

この、格差是正のため三年に一度の店移動が

実施される。この店舗移動については、業界から

の要請に基づき、自主的に実施されるものであ

る。

この店舗移動については、業界からの要請に基づき、自主的に実施されるものである。

五十八 歴代市場長名

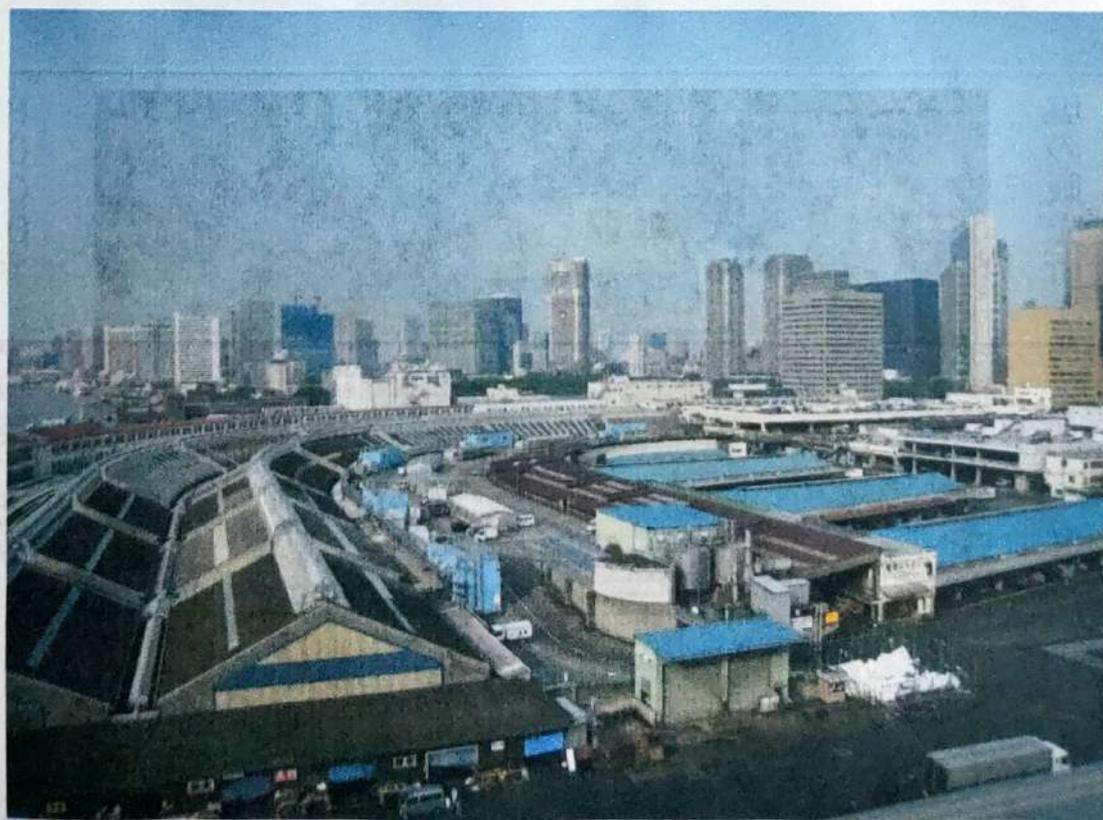
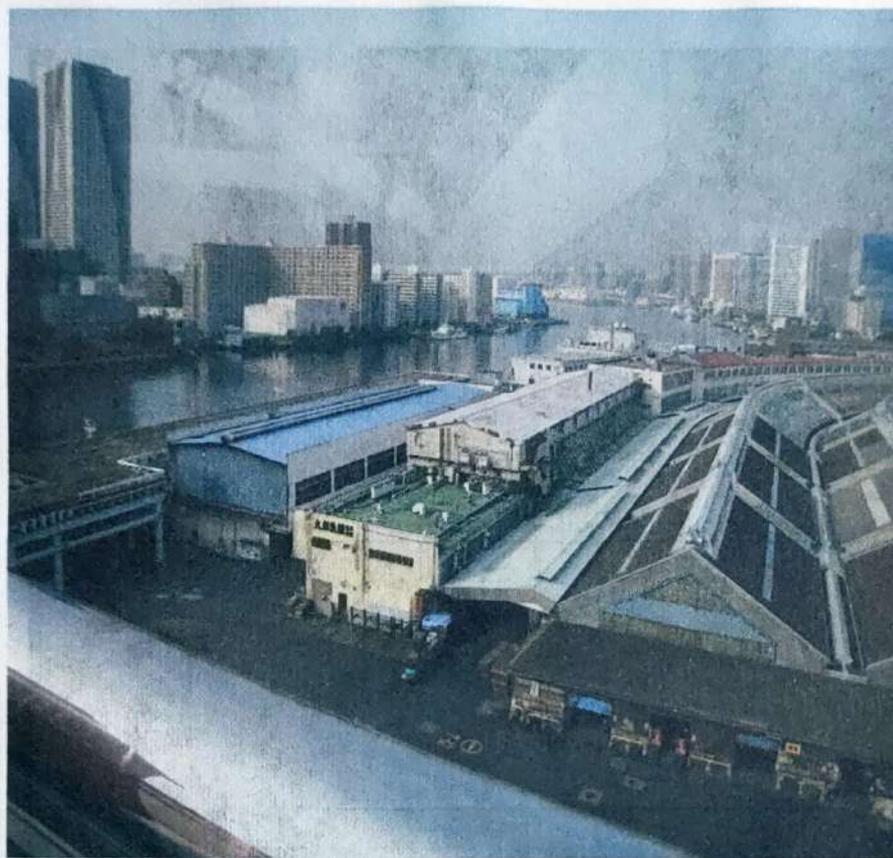
東京都中央卸売市場歴代市場長名簿

9	8	7	6	5	4	3	2	初代
磯村	高田賢次郎	石原幹市郎	岸寿喜恵	須田詮道	船津新四郎	桑原徹	近新三郎	荒木孟
英一	昭和一七年一月二日	昭和一七年七月	昭和一七年三月	昭和一五年五月	昭和一二年三月	昭和一一年一月二日	昭和一一年六月	昭和六年六月

2	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7	6	5	4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1
橋尾	青木	土屋	常陸	野沢	石井	岡	藤原	飯田	小金井	木島	大田	中島	遠山	安井	工藤	塩谷
勇	久	鉄茂	壯吉	栄寿	孝義	泰夫	賢吉	逸治	建男	寛	園	義平	栄吉	久	九郎	隆雄
昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和									
4	4	4	4	4	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2
5	3	1	1	0	9	6	4	1	9	7	6	2	2	1	0	0
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
7	7	1	9	7	8	2	1	0	7	1	9	2	6	2	6	4
月	月	0	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	2	2
4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	8
中西	岡田	比留間	森澤	碓山	大矢	宮城	番所	小山	赤木	村山	西村	勝見	高杉	大野	吉留	山岸
充	至	英人	正範	幸夫	寛	哲夫	広育	孝之助	博	益美	慶太郎	雄二	杉光	邦雄	俊男	弘男
平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	平成	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和
2	2	1	1	1	1	9	7	4	4	5	5	5	5	5	4	4
3	2	8	5	3	1	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
7	4	7	7	7	7	7	7	7	4	7	5	6	5	8	7	7
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月

五十九 築地市場の全景及び主要箇所





塩の販売所



8000番 仲卸業者売場



氷販売場
ホームと冷蔵庫の出入口

国鉄貨物踏切跡



渡り廊下



塩水製造

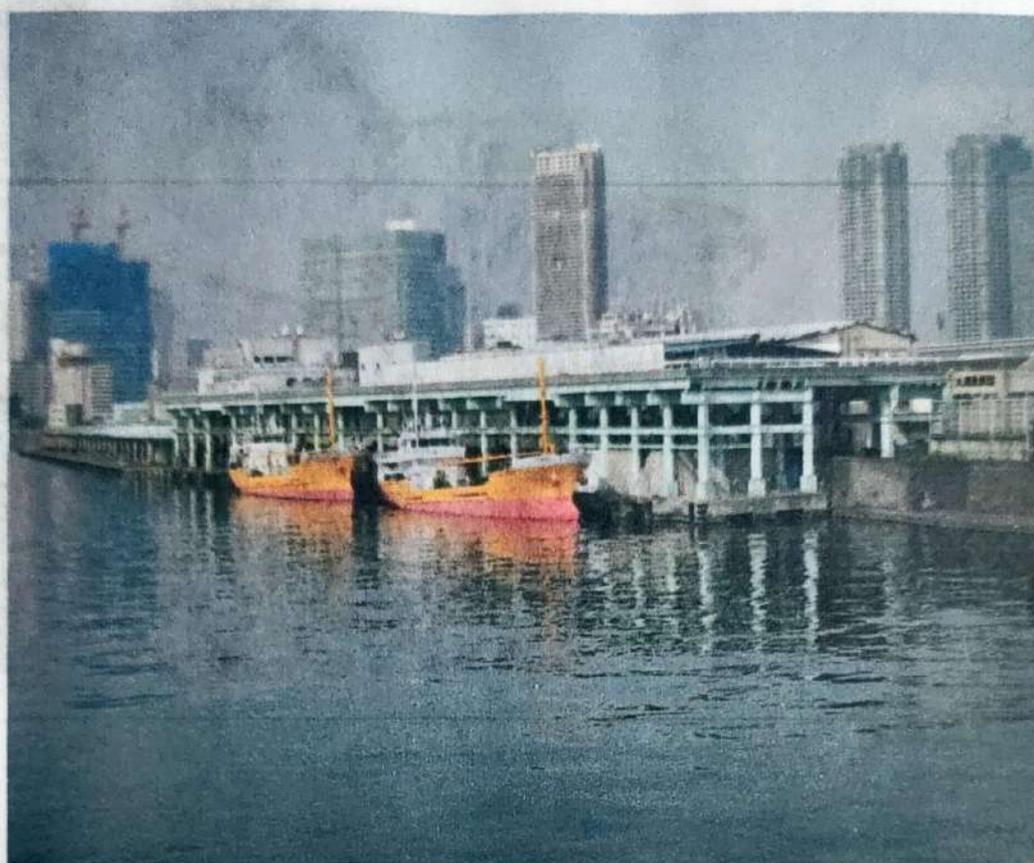


参事文庫



2F 東京都事務所

勝どき橋から築地市場を



参考文献

東都水産(株)五十年史(昭和六十二年) 上・下
『佃島年表』・京橋図書館編(昭和四十一年)
会報『佃島と白魚漁業』

都市紀要26・(1978)

史校料刊『佃島年代記』『東京の歴史』・

第四・第五、第九号

『佃島の今昔』佐原六郎編者

雪華社(1972)

昭和三十七年七月『得意先名簿』

中央魚類(株)発行

魚河岸百年・魚河岸百年編集委員会

(昭和四十三年)

『中央区の昔を語る(一)』・

八丁堀・佃島・中央区教育委員会

白井與太郎出世物語 佃屋・・・

交詢社発行(昭和八年三月三日)

回想・・・松永翁に捧ぐ・・・著者 町山 清

『日本橋』・・・東京の経済史・著者・野口孝一

魚河岸春秋・・・著者・片又伊作

(平成三年十一月)発行

さかな一代・・・著者・・・

安部小治郎(昭和四十四年六月)発行

魚市場・・・発行者・・・

山本郁雄(昭和五十年九月十七日)発行

水産卸ひとすじに(中央魚類五十年史)

発行・・・中央魚類(株)

鮪屋繁盛記・・・著者・・・

寶井善次郎(平成三年十月十六日)・・・大善号

魚河岸繁盛記・・・田口達三薯

(昭和三十七年)・・・いさな書房

東都水産・・・魚市場青年団連合会

(創刊号・第七号)

古文書からみた佃島の起原・・・佐原六郎

東京都中央卸売市場概要・・・昭和24年3月
写真で見る江戸東京

1993年・岡部昌幸 新潮社

『東京都中央卸売市場史』上・下・・・東京都

『日本橋魚河岸物語』

尾村幸三郎著・・・青蛙房

『魚河岸怪物伝』

尾村幸三郎著・・・かのう書房

『東京魚市場卸協同組合史五十年史』

平成十四年・・・東卸組合

『中央区史』・・・中央区役所

中央区文化財(美術・工芸・古文書)

中央区文化財 一 (・史跡・旧跡・記念碑)

中央区文化財 五 道具類

中央区文化財 七 建物

御協力者

秋山初江・田中清御夫婦・櫻木龍吉・櫻木秀吉・金子逸郎・故吉田喜代太郎・平岡かつ子・明石

あとがき

筆者は、現在は陸続きとなつた佃島の近くに生まれ育ち住吉神社の氏子であり、大祭には積極的に参加し佃島の友人達と多に関わってきた。

また、築地市場との関りは、近かつた市場でのアルバイトに始まり、一般企業を十三年間経験した後縁あつて、第二の人生先が市場行政人として、築地市場に赴任したことから市場への愛着はより強まつた。

築地市場の歴史、日本橋市場の発足、我が町の隣に住む友人達の『佃島』に大いに関わつて『日本橋時代から平成の時代の魚市場』と『佃島の問屋・仲買人』についての過去から現在までを記して後世に残そうと思つた。

この『あとがき』に際して築地市場についての思い出は昭和三十二頃のアルバイト時代の思い出である。当時の築地魚市場は、全国から入

荷した海産物を荒縄で縛り梱包して現在の水産茶屋の広場に高く積んで市場で仮眠して夜に東京周辺の地方市場に出荷していた。その間の盗難監視の夜警、練物関係の仲卸業者での荒縄で縛る年末の深夜の荷造りでの夜食と朝食は小田原町の工場に白米と味噌汁を受取りに行つて、隣の大物仲卸業者(マグロ)から『中落ち』をもらつての食事は『真の美味』だった。当時の『中落ち』は通路に無造作に置かれていた。

また、荷造りの基本の『荒縄の縛り方』を覚えたことは現在でも重宝している。更に築地市場の行政業務において仲卸業者の『屋号』等について佃の方々からの直接うかがえた業務は楽しかった。この間、この誌が出来上がるまでに市場関係者及び多方面の方々にご迷惑とご指導を戴きました事を深く感謝しております。

筆者と市場の関り

昭和五十年・・・東京都中央卸売市場築地市場管理課赴任

昭和五十五年・・・大森市場赴任 水産業務

昭和五十九年・・・東京都江戸博物館建設予定地

江東市場『青果市場・三分場の統合(葛飾・小岩・小松川)』

葛西市場赴任『移転・開場』管理関係担当

昭和六十二年・・・築地市場水産品課 (業務係)

平成元年・・・食肉市場赴任(大田市場開場)

平成三年・・・大田市場赴任(花き担当)

平成五年・・・築地市場水産品課赴任 (指導係)

平成九年・・・大田市場赴任(水産業務係)

平成十二年・・・築地市場水産品課赴任(水産業務主任)

平成十五年・・・築地市場水産品課 卒業

104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

1050	1051	1052	1053	1054	1055	1056	1057	1058	1059	1060	1061	1062	1063	1064	1065	1066	1067	1068	1069	1070	1071	1072	1073	1074	1075	1076	1077	1078	1079	1080	1081	1082	1083	1084	1085	1086	1087	1088	1089	1090	1091	1092	1093	1094	1095	1096	1097	1098	1099	1100	1101	1102	1103	1104	1105	1106	1107	1108	1109	1110	1111	1112	1113	1114	1115	1116	1117	1118	1119	1120	1121	1122	1123	1124	1125	1126	1127	1128	1129	1130	1131	1132	1133	1134	1135	1136	1137	1138	1139	1140	1141	1142	1143	1144	1145	1146	1147	1148	1149	1150	1151	1152	1153	1154	1155	1156	1157	1158	1159	1160	1161	1162	1163	1164	1165	1166	1167	1168	1169	1170	1171	1172	1173	1174	1175	1176	1177	1178	1179	1180	1181	1182	1183	1184	1185	1186	1187	1188	1189	1190	1191	1192	1193	1194	1195	1196	1197	1198	1199	1200
------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

地
 水
 產
 仲
 卸
 業
 者
 八
 店
 年
 舖

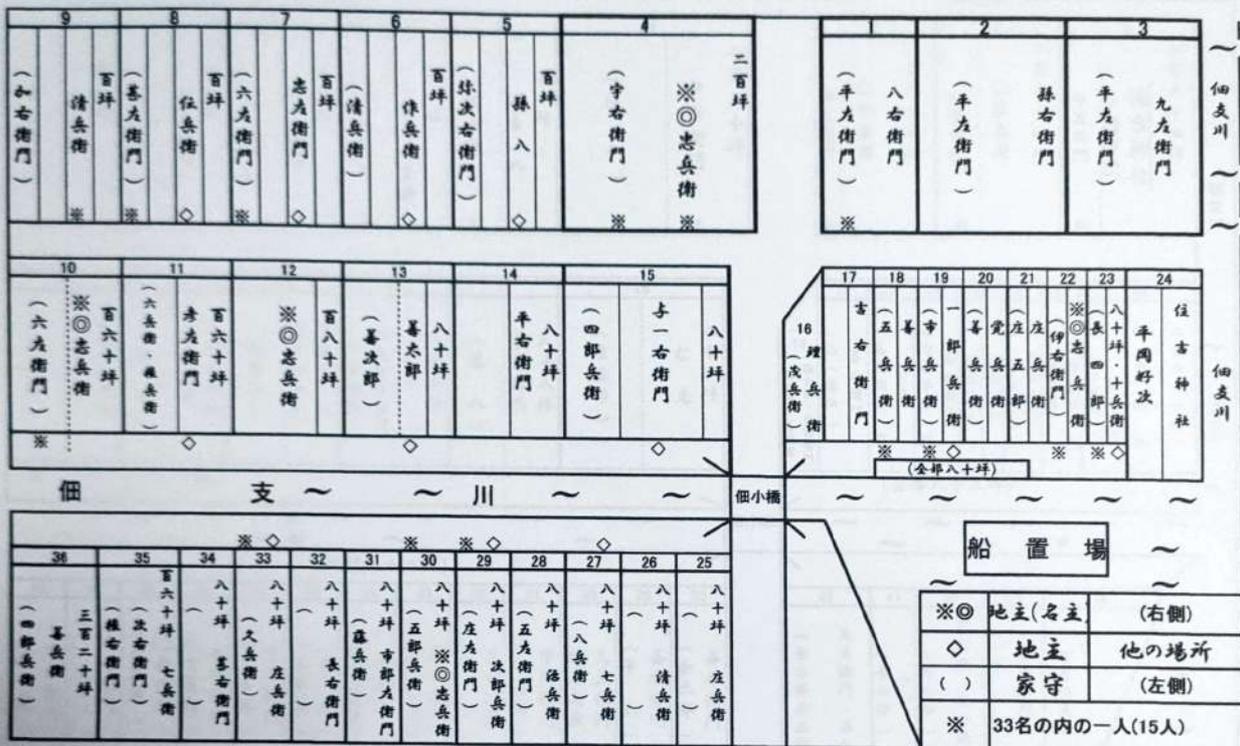
注) 宝永七年(1710)以前の佃島の築島が完成後すぐに、幕府に提出された絵図面があった事が言われていたが、今だ、発見されていない。

※ 孫右衛門・九左衛門・八右衛門の土地除く33筆で区割りする。

佃島沽券絵図 宝永七年(1710)

(隅田川)

隅田川 (土地を三十六筆)に



※ 23番 本文には長五郎になっているが長四郎のプリントの誤り。後に、延享元年の沽券絵図が発行の際には、23番は住吉神社に吸収された。

- ◎ 1、~2、孫右衛門の土地を深川大島町の弥兵衛が購入した。
- ◎ 5、 番八は他の場所の者である。
- () は、家守で、土地は無いが建物は全員自分の持ち物である。

隅田川

佃島沽券絵図

隅田川

延享元年(1744)

